

282



\*0045140000\*

1

0045140-000

263.6-282

国史教授に於ける至難教材の究明

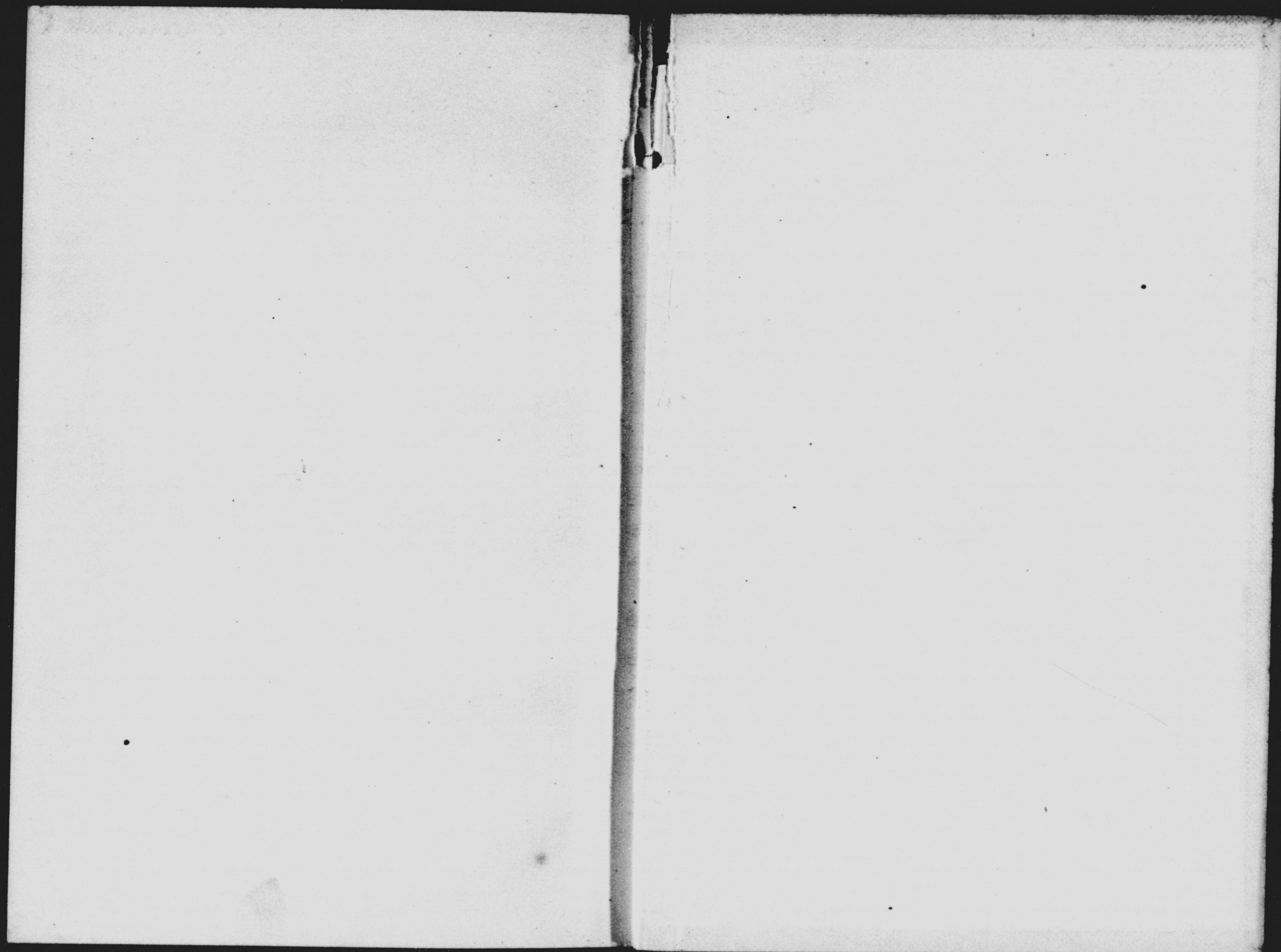
村瀬仁市・著

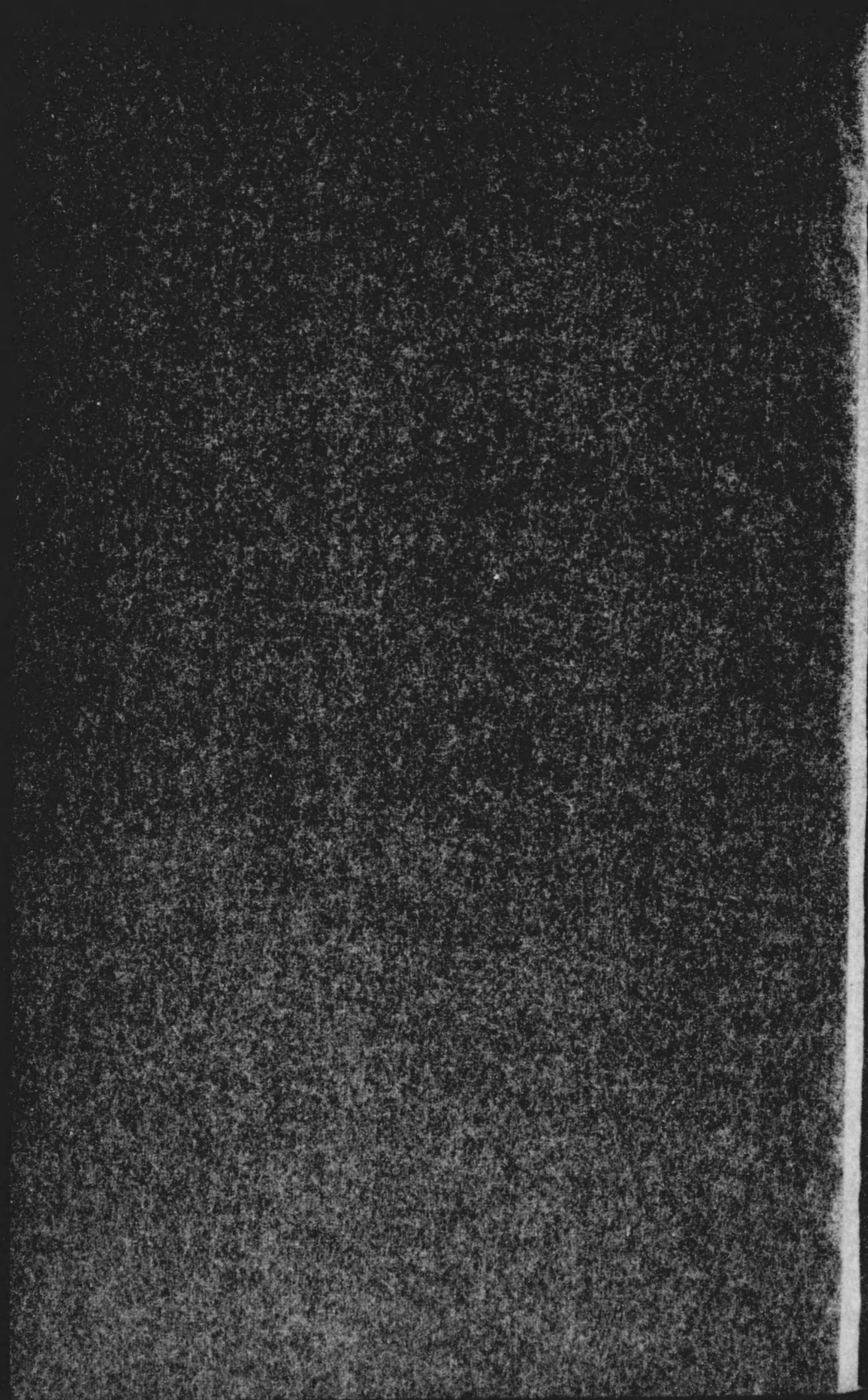
文泉堂

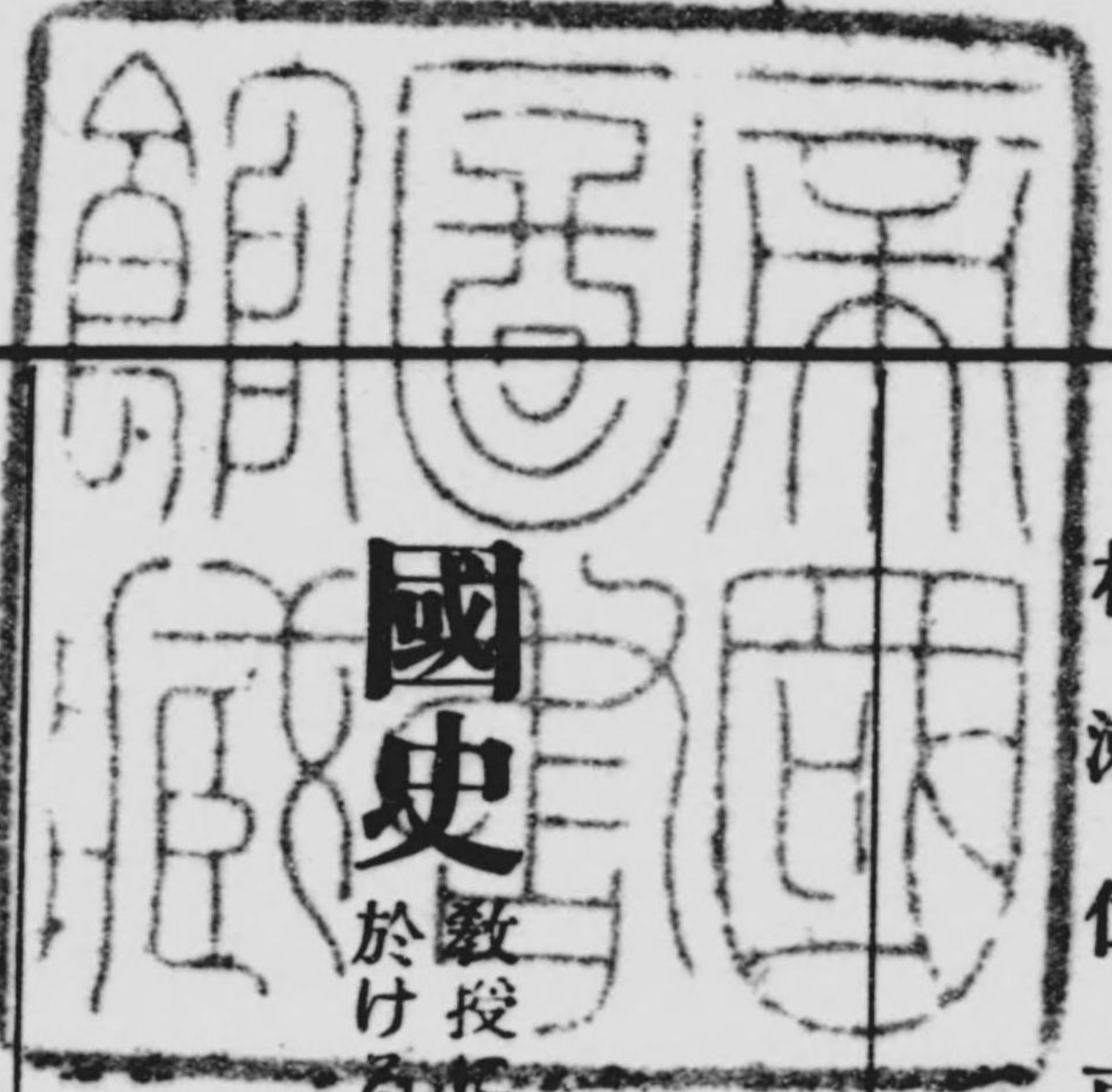
昭11

AHF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。







村瀨仁市著

國史  
教授に  
於ける

至難教材の究明

全訂版

文泉堂書房發行



267-282  
.6

## 自序

○ 「國民指導原理としての國史」の重要性の叫びを聴くこと既に久し。而してその實績は如何程までに擧げられ得たか。

○ 「過去に於ける國史教育」の反省をしてみる。目的論の考察に於て、將又教授方法論に於て、乃至教材論に於て微を穿ち細を極めて論議された。

○ けれども直ちに兒童の魂にまで觸れ得たりや否や。

○ 「脚下照顧」せよ。そこには教材が展開されて居る。

教材研究と云ふ言葉はともすると個々の精細な史實の羅列にのみ走つて、その史實

の底に流るゝ國史精神の把握を忘れ勝ちになる。

○ 「教材研究の本質的態度」とは何か、曰く國史に流るゝ國民精神、日本精神の具體的把握である。

三千年來綿々として流るゝ我等祖先の思想感情——日本精神を國史と云ふ一系列の上に於て把握せしめ、之によつて我も亦祖先にもました日本精神の體現者たらんとする、國民的自覺を多分にもつた兒童をつくるための教師のいとなみである。

○ 「史實は眠れる獅子」である。

之を呼びさますことによつて始めて生きて働くのである。こゝに呼びさます作用が行はれなくてはならぬ。畢竟教材研究とはこの呼びさますためのはたらきであらう

○ よびさますことの至難な教材」がある。

よびさまし方、生かし方にいつも私は苦んで居る。たゞ教科書をそのまま表面的に走れば平々坦々たるものではあるが、眞面目に考へれば考へる程その生かし方、よびさまし方になやみが増してくる。

○ この小著はかかる意味に於ける私のいとなみの記録である。もとより淺學菲才、公刊の目的は最初なかつた。だから形も整つて居ない。

○ 本書はかゝる立場から凡そ國史教材に於てその取扱上特に困難とする教材二十三を挙げ、一々に就いてその難點を指摘し之が具體的解明を試みたもの、勿論その解明は「かくあるべかりし」との前提のもとに、歴史的事件の展開、人物の思想感情、行動を意味づけ價值づけをしたものであり可成り主觀的獨斷に走つたところも多い

○ 史實を史實としてそのまゝに觀る存在判斷的敘述を忘れてはならぬと共に、史實を

批判鑑賞する價值判斷的敘述をも忽にしてはならぬとの意味に於てこの書を読み  
たゞき度い。

○

参考書に就いては幾多あつて其のところ／＼に記してあるが、次に重なるものを明  
記し紙上をもつて厚く深く御禮申上げる次第である。

國史の研究  
日本史講話  
日本史の研究  
日本文化史  
日本精神の一貫と國史教育  
雜誌「歴史教育」  
國史教材觀の新研究  
昭和十一年五月

黑板博士著  
萩野博士著  
三浦博士著  
大 燈 閣  
山田義直先生著  
諸家の論文  
全國同人國史研究會著

琵琶湖畔にて

著者識

### 改訂の序

本書の第一版を出版したのは昭和七年五月であつたが、それから四ヶ年の歳月を閲  
するに至つた。その間この拙い小著が圖らずも江湖の注目を惹き、版を重ねること數  
次に及び今こゝに改訂するの必要に迫られたことは私にとつては、むしろ身にあまる  
光榮である。

願れば本書は最初出版の考へ全然なく、唯私の史的背景として幾多の雜誌、著書に  
於て先輩の教を仰いだ言はゞ私のための研究帳の一頁であつたのである。然るに不圖  
した動機より公刊さるゝに到つたが、その當時校務の繁忙等により、出版迄に寸暇な  
く、遂に校正も大部分他人に依頼するのやむなき爲に、印刷上の誤實に多く、見る度  
毎に私にとつては惱みの種であつた。

今改訂するに當つてこの點を一掃し、加ふるに、増補修正の部分も加へることが出  
來たので聊か胸中安らかなるものがある。

前版の缺を補ひ不全を完くすることが出来れば幸甚である。

昭和十一年四月天長節の日

著者

# 國史教授に於ける至難教材の究明

## 目次

前篇 理論的背景……………	一
——序——	
第一章 教材研究の難點——至難教材……………	三
至難教材の意義	
教材の價值發見	
第二章 記録された國史——歴史書、教科書の問題……………	七
史實の價值判斷的叙述への止揚	
構成的歴史觀——記録された歴史	



教科書の観方

教材の底に流るゝ史的生命の探究

第三章 教材研究の根本態度 …… 一四

一、時代的個性の上から …… 一四

二、國史教育の本質より …… 一五

三、教科書編纂の方針より …… 一六

後篇 至難教材の究明

第一章 國史教材中の至難教材 …… 一九

第二章 至難教材の究明 …… 二三

第一節 天照大神の章の難點及究明 …… 二三

第二節 神功皇后の章の難點及究明 …… 三四

第三節 聖德太子の章の難點及究明 …… 四四

第四節 和氣清麻呂の章の難點及究明 …… 五七

第五節 菅原道眞の章の難點及究明 …… 六八

第六節 平氏の勃興の章の難點及究明 …… 七六

第七節 武家政治の起の章の難點及究明 …… 八七

第八節 後鳥羽上皇の章の難點及究明 …… 九七

第九節 北條時宗の章の難點及究明 …… 一〇六

第十節 楠木正成の章の難點及究明 …… 一六

第十一節 足利氏の僭上の章の難點及究明 …… 一三二

第十二節 足利氏の衰微の章の難點及究明 …… 一四五

第十三節 織田信長の章の難點及究明 …… 一五〇

第十四節 豊臣秀吉の章の難點及究明 …… 一六〇

第十五節 徳川家康の章の難點及究明 …… 一六九

第十六節	徳川家光の章の難點及究明	………	一八〇
第十七節	大石良雄の章の難點及究明	………	一九一
第十八節	攘夷と開港の章の難點及究明	………	一九九
第十九節	武家政治の終の章の難點及究明	………	二〇八
第二十節	西南の役の章難點及究明	………	二一七
第二十一節	條約改正の章の難點及究明	………	二三〇
第二十二節	明治卅七八年戦役の章の難點及究明	………	二四三
第二十三節	韓國併合の章の難點及究明	………	二五三

# 國史

教授に於ける

村瀨 仁 市 著



## 前篇 理論的背景

史學そのものゝ本質的究明に、國史教育の本質論に將又教授方法論に、更に最近の思潮と國史教育の動向に等々幾多の問題が論ぜられ又論じられつゝあるのである。

まことに慶すべく祝すべきではあるが、我々はかゝる問題の研究と共に、今一度自己の足元を凝視し、而して見なほす必要はなからうか、脚下照顧と云ふ語はよく禪僧の使用する語

である。今の私には特に此の語が強く響くのである。自己の脚下を照顧してみると、そこには誰もが「與へられた教材」の存在に氣づくであらう。教材研究と云ふ語は、私たちの耳にはあまりに云ひふるされて居るやうに響く。併しながら過去の國史教育に於て、かゝる研究に對して實に冷淡であり、而して閑却されて居はせなかつたらうか。

私は國史教育の効果を擧ぐる最良の方法は、先づ教材研究に始ると云ひ度い。したがつて教師の修養多々ありと雖も先づ以て脚下照顧——そのことである。

如何ばかり史學の本質論を掘り下げても、又、如何ばかり教授方法の研究に新生面を開かんと努力しても、教材そのもの、研究が淺薄であり、誤りを傳へたり、教育的でなかつたり、國體に對する觀念が適當でなかつたりしたならば、その教育的効果は殆んど望み得ぬものと信ずるものである。

私のこの論文はかゝる部面に向つて注がれた貧しき研究の一端である。いまだ到底全きものでないがこゝに發表して大方諸賢の御批正を乞はんとするものである。

## 第一章 教材研究の難點——至難教材

私は序に於て教材研究の必要を再吟味した。さて我々がその教材の研究をなすに當つて常に困難を感じるものは何か。それは即ち國史教材そのものが直ちに以て、國史教育の目的を達し得難い姿にあることであり、かゝる問題に度々直面することである。

云ふまでもなく國史教育究極の目的は、國史を授くることにより國民たるの志操を涵養し以て國民たるの責務と自覺を與へ、我も亦祖先にもましてよりよく祖國發展の爲めに、貢獻せんとするの意志を陶冶せんとするものである。然るに多くの史實の中には往々にして所謂反面的な教材内容を含んで居ることに氣付くのである。特に皇室に關する御事、或は人物の眞價を狹縮するが如き問題、或は從來の史家の説により先入見的に人物の業績、眞價が無慘にも低下縮少されて居る場合が往々あるのである。

例へば皇室に關する御事として保元の亂がある。此の亂の原因をたゞ表面的に、或は從來の説き方によつて進めば皇室の御争ひの如く見て取り易い。更に人物の眞價の狹縮されて

るものに聖徳太子がある。特に蘇我氏との問題に至つては太子の御態度が優柔不斷、然して國體に背馳するものとして史家の論評が極めて峻烈であつたりした。或は又兒童の單純なる先入見によつて、理解せしめんとする前に、すでに人物の人格全般を一も二もなく低下した觀方によるものに徳川家康がある。

かゝる例は一二にとどまらない。私は常にかゝる問題を取扱ふ毎に惱みつゞけたものであつた。私はかゝる意味の教材を國史教育に於ける至難教材と云ふのである。翻つて之をみるに從來の國史教育者はかゝる點に對して、果して如何ばかりの用意と眞面目さをもつてゐたか、かく云へば或は言はん、「國史教育はあるがまゝの教材を與へればよい」と。

併しながら茲に考慮すべき大きな問題がある。

即ち客觀的文化財は直ちに陶冶材とはなり得ないことである。陶冶の理想と陶冶價值に照合して兒童の心意に適合せしめられて、始めて陶冶價值を發揮すべき陶冶材となり得るわけである。故に我々は教育の第一步に際してすべての文化財より選良せられたる陶冶材の研究を怠つてはならぬ。私の云ふ教材研究の必要の論據もまさしくこゝに出發を求めんとするもの

である。

さて從來の國史料に於ける所謂教材研究が、單なる附説の材料の蒐集に過ぎなかつたことはたしかに否定し得ないであらう。與へられたる史實に對する内面的考察、中心點の考慮、が比較的閉却されて居はせなかつたか。

教材の含みもつ特殊的價值や生命を没却したまゝの學習指導は、無價值であり、徒勞であり、却つて兒童の頭を混亂せしめるものではないかと思はれる。

併しながら此の教材に對する價值の發見は容易でない。教師のもつ史眼、史的能力、史的見解—教育史觀によつてその中心價值の認識も自ら異つてくる筈である。故に我々はそれが爲めに史的教養の研鑽努力を必要とするのである。歴史學者に非ずしてそれと同様の深さの歴史研究家であり、歴史愛好者であることを要求されるのである。而して現在及將來を達觀し教師自ら文化創造者たるの陶冶價值を發見省察して、之を適當に整頓し秩序立て最も教育的に兒童の價值生活を指導し教材との聯關脈絡を觀察し結合を圖らねばならぬ。

かくして教材は單なる傳達の形骸に止らずして、兒童の生活にまで滲透し得るわけであり

教育全般としては生活の發展擴充であり、國史はその一部面を擔當して以て教育一般と交渉しつゝ眞の人間教育、シュテルンの所謂「教育の任務は人間を陶冶されたる人格にまで教育するにある」の意に達することが出来る。

## 第二章 記録されたる歴史

### —— 歴史書教科書の問題 ——

國史は「記録そのものを理會するものではない」。即ちその底に流るゝ精神を把へることが大切である。記録を通じて國史の流れ——國史精神——日本精神をその源泉に汲むと云ふ態度を忘れてはならない。前節に於て教材は單なる傳達の形骸に止らずして、兒童の生活にまで滲透し得ねばならぬことを述べたのも即ちこの意味であつた。

「歴史は自然に出來たもの又は出來るものに非ずして、我々人類が造つたもの又は造るものである。

如何に小なる史實と雖も悉く之れ吾々の嚴肅崇高なる意味活動の所産である。即ち創造こそそのうちに一貫して流るゝ生命であらう。

従つてよりよき進歩と向上の爲めに批判と鑑賞とを要する。換言すればデザインとしての叙

述からズルンとしてへの叙述へ止揚すべきものである。

史實を史實としてそのままに観る存在判断的叙述を忘れてはならぬと共に、史實を厳正に批判し鑑賞する価値判断的叙述へ進むことを忽にしてはならぬ。

さてこゝに問題となるものは「記録されたる歴史」即ち歴史書とか國史教科書を如何にみるか、の問題である。「記録されたる歴史」に就いては種々本質的な問題もあらうが今ここでは、構成的史觀について簡単に考察してみやう。

歴史は多くの資料——歴史的事實——の中から學者が自らの理想に依つて選擇し組織したものでありそれが今日の記録された歴史である。過去の事實とか或は人格實現の蹟とか或は又活動の蹟とかいつてもそれは歴史を選んだ人、作つた人によつて選擇された所の事實であり活動の蹟であり人格實現の蹟である。かく考ふるとき歴史は二つの要素から構成されてゐる。即ちその一は人名とか古蹟とか年代とか官職とか制度とかさうしたものは大體に於て動かない部面であり萬人が共通に其の通りに認めるものであり世に云ふ史料であつて之を名づけて客觀的要素と云ふ。他の一つは原因とか動機とか、乃至影響とか云ふ内面的になつた

やうな事は史料の調べ方によつて變つてくる。即ちかゝる批判はその批判者の主觀によつて變るものでありこの部面を名づけて主觀的要素と云はれるものである。

かの平泉博士がその著「我が歴史觀」に於て小早川秀秋の家康に内應せし動機の觀方を從來と全く變つた觀方をせられてゐるのも博士の主觀によりこの事件この歴史の主觀的要素が人により變ることを物語る一例であらう。

以上を要約すれば、即ち歴史は學者に依つて選擇された所の過去の事實、過去の活動の蹟であり而してその歴史には動かすべからざる客觀的要素と、人によつて動く主觀的要素とよりなつてゐることは何人も首肯し得る所であらう。この客觀的要素が所謂史料であつて、主觀的要素は創作であり藝術である。そこで或人は歴史を定義して「歴史は史料に立脚したる創作なり」と言つてゐるのも肯定さるゝのである。

西村眞次氏はその著國民の日本史序論に曰く。

「元來歴史は史料ではなく、史論でもなく、勿論史學でもない。史學は歴史の範疇、目的、其の研究、表現の理論と方法を考究する學問であらうし、史料は史實を正確に知らうと

する材料でもあらうしまた、史論は史料を研究してそれから或史實を捕捉した経路を示す論述であらう。これらは歴史の要素であつて歴史それ自身ではない。

眞正の歴史は陳列された史料であつてはならぬ。討究の経路の指示或は史實の認識であつてはならぬ。眞正の歴史は史學に基づき、史料に據り、史論を経たところの的確なる史家の美的表現でなくてはならない。即ち歴史は記述ではなく論證でなく、模倣ではなくして創造であらねばならぬ。」

これによつてこれをみるに歴史は客観的要素の上に立つ主観的要素——西村氏の所謂創造——であることが明かになつたと思ふ。

さて教科書を考へてみるに前者客観的要素なる史料を國家的見地、國家教育の立場に於ける「國家教育史觀」とも云ふべき主観的要素によつて叙述してゐるものと云へる。

かゝる國家教育史觀によりて叙述せる教科書と雖も又幾多の教師が日々兒童に向つて説くその客観性の史料に何等變りなきも、兒童の受ける印象の非常に差異のあるのは即ち此の主観的要素である教授者の創作力藝術力又は感情移入の差であらうかと思ふ。

ここに於て私は教科書そのものについて論じ最後に私の言はんとんする教材研究の結論へと急がねばならなくなつた。

教科書も亦記録された一種の歴史書であると観るとき教科書そのものが、直ちに以て兒童に對して國史教育のねらう目的を果すや否や。いまだそこに物足りなさを感ずるものがあることは誰しも首肯するところであらう。

教科書は劇の筋書の如きものであり往々抽象的なる記述が多い。即ち記され書かれた智的な國史である。

我等はこの記され書された知的國史を眞に生きて働く知情意全體の生活國史として國史そのもの、歴史生活そのものを兒童生活に生かすべき鍵が托されてゐることを忘れてはならぬ。

こゝに於て教師の正しき教育史觀による教材研究が必要となりこれによつて教科書は眞に生きて働くのである。故に教材研究とは畢竟、教科書を透してその根柢にひそむ生命——日本國民の精神生活——思想感情の核心にふれしめんための思索であらねばならぬ。

従来の教材研究が所謂史實の精細な羅列にのみ走つてその底に流るゝ史的生命の探究を忘れてゐはしなかつたらうか。歴史上の人物——祖先の思想感情にふるゝことが國史の生命であるとすれば教科書も亦教科書の奥にひそむ國史生命の探究であるべき筈である。



人間の活動は思想感情がその基調となる。人間の思想感情が意志に作用してそこに現はれたものが史實であり活動であり事蹟であり行為であり事業である。その史實、活動、事蹟、行為、事業が今日に残るものが遺物であり遺蹟、作品、記録、傳説である。これ等を資料として作り上げられたものが歴史の書物である。

大日本史とか外史とか或は又大日本歴史集成とか大日本全史とか云ふ如き大部の書物も皆かくして作り上げられたものである。そこで其の色々の著書から出來て來たものが、教科書

である。

「我々は教科書を教へるのではない。吾々は教科書を透して其の奥にひそむ所の遺物、遺蹟作品、記録、傳説を探り更にそれ等によつて史實や活動の様子、事蹟、行為、事業を考へる是等は皆人間の意志の働であつて更に其の意志を起した基になる日本國民の思想感情であるればこの思想感情を考へた時始めて歴史といふものゝ真相を理會したことになるのである。

然らば歴史といふものゝ一番奥の院は何かと云へば國民の思想感情でありこの思想感情の研究が所謂内面的研究と云はれるのである。(山田義直氏の説に負ふところ多し)

これによつてこそ兒童をして、我も亦祖先にもました日本精神の體現者たらんとする國民的自覺即ち意志の陶冶をなし得るものであると信するものである。



### 第三章 教材研究の根本的態度

教材研究の究極の目標を國民の思想感情の内面的考察におくと云つたがこれだけではあまりに漠然としてゐる。故に私は今便宜上

イ、時代的個性の上より

ロ、國史教育の本質より

ハ、教科書編纂の方針より

の三點に立脚して究明して行かうとするものである。

勿論かくすることの不自然さは認めてゐる。故に之れが渾一の奥に私の教材究明の姿を理解せられ度いと思ふのである。

#### 一、時代的個性の上から

各教材の中には脈々として發展の概念が流れそれ／＼の教材はそれ／＼のテーマによつて

發展を契機として其の位置を主張してゐるものとみることが出来る栗田元次教授の時代の特色論をかるならば、上代はものゝあはれ即ち美を讃歎する生活の發展に或は中世の聖的價値を重んずる宗教生活の發展に、或は近世は眞即ち學問生活の發展に、最近世は經濟的生活の發展と云ふ如き全體的發展に參堂すべきである。

かくて一の教材に面した時はこの教材はいづれの方面の向上發展を主題とし如何程の範圍を荷つてゐるかを考察すべきであり而して教材中の人物事件も皆この時代の力と歴史的因果の關係を有するものでありとすれば其の史實のうちに時代の力が如何に動きつゝあるかを觀ねばならぬ。

#### 二、國史教育の本質より

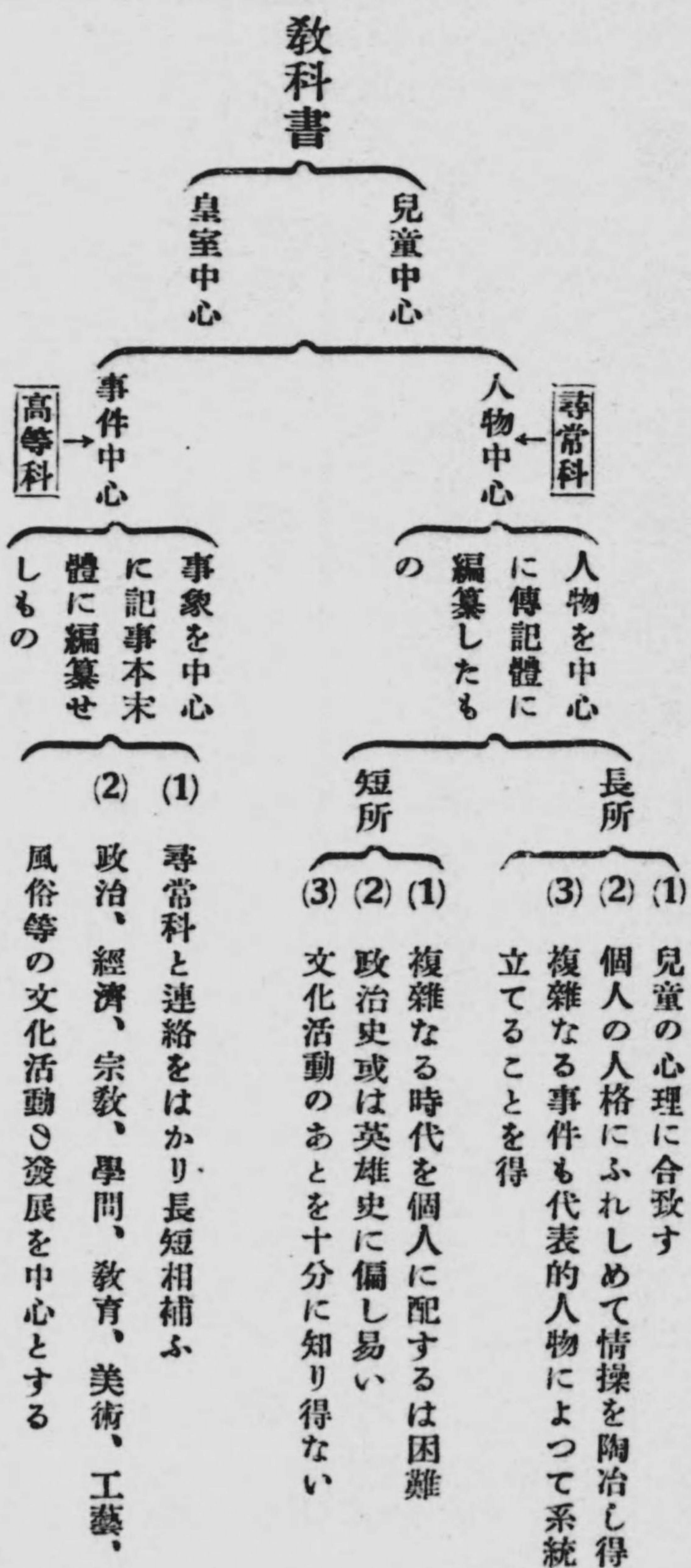
國史教育が國民教育の一部面を擔當して國家人養成を目的とする以上當然その教材も國史教育の上より教育的價値觀に照して觀て行かねばならない。

我等は國史の特色を概觀し國史の特質の中に我が祖國の進路、未來への發展方向、日本國

民の指導原理のあるところをみつめねばならぬ。故に教材を観るにあたって常に現代並に將來わが祖國日本の進路方向を暗示する何ものかひそんでみるといふ教育的價值を中心にして行くべきである。

### 三、教科書編纂方針より

編纂者は常に國家教育の立場から教材を觀照し排列してゐるものであり教科書は我等に與へられた國家教育の示標である。此の趣旨を明確に知れば妥當な見解を生むわけである。編纂の特色とするところは、皇室中心主義、兒童中心主義、人物中心主義（尋常科）事件中心主義（高一高二）高三は（思想中心主義）に立つてゐることは今更云ふまでもないが、これ等は互に因となり果となり相關聯して國史教育の目的に添ふべく編纂されてゐるものとみるべきである。



以上三點に立つて教材研究の根本的態度を示したがさて一々の教材を個々のにこの三點に分析して究明せんとするものではなく又たとへこの三點に分析し得たとしてもその教材の眞の生命は把握出来得ないものであると思ふ。私の各教材究明の根本的態度はその究明せる教

材觀照の奥に自らこれ等の問題が渾一的に流れてゐることをよんでいたとき度いと思ふのである。(本項は特に全國同人國史研究會同人の所論に負ふところ多し)

### 後篇 至難教材の究明篇

#### 第一章 國史教材中の至難教材(尋常史)

課	題目	難	點
一	天照大神	○神話の取扱を如何にするか	
四	神功皇后	○新羅征伐を如何に扱ふか、皮想な取扱をなす時は徒らに侵略的行爲とのみしか扱はれない。	
六	聖德太子	○從來太子と蘇我氏の關係は論議さるゝところであるこの點如何に見るか ○太子と十七條憲法、外交、佛教の取扱も相當骨のをれるところであらう	

國史教材中の至難教材(尋常史)

一〇	和氣清麻呂	○道鏡事件を思想的に如何にみるか ○天皇の御意志は？何故清麻呂を遣はしたまひしか ○神託を如何にみるか ○清麻呂配流に天皇御参加ありしや ○道鏡死をまぬがれし理由 ○清麻呂なかりせば天下あやふかりしや
一三	菅原道眞	○道眞は忠誠なる士なるも藤原氏に對してあまりに弱き態度であつた點 ○藤原氏と種々困難な關係にありつゝその位置に戀々たりしは如何 ○道眞と時平との政治的手腕如何
一七	平氏の勃興	○保元の亂の原因を如何に見るか ○何れが賊軍なりや ○登上人物の批判を如何にすべきか
一八	武家政治の起	○武家政治の起を如何に取扱ふか否定してかゝるべきか、謳歌すべきか止むを得ずとするか ○頼朝と義經との取扱を如何にすべきか
二〇	後鳥羽上皇	○承久の變に北條義時泰時のとつた態度は如何に取扱つたらよいか ○皇軍はいまだ敗北せしことなきにこの變のみは御敗北になつたこの點如何に扱ふべきか
二二	北條時宗	○弘安役の勝因を如何に扱ふか、神風を如何に取扱ふかの問題である

二三	楠木正成	○建武中興の取扱ひである ○恩賞問題、並に中興の崩壞の原因を如何にみるべきか ○護良親王を如何に扱ひ奉るか
二七	足利氏の僭上	○後龜山天皇の京都御遷幸を如何に取扱ふべきか、後醍醐天皇の御遺志に背きはせぬか相當困難なところである ○足利義満の僭上を如何に取扱ふべきか
二八	足利氏の衰微	○義政は東山文化の功勞者であるが、一方かゝる戦亂の世に土木を起して政治も顧みざる將軍であつた。文化と道德の二面から見て如何に扱ふべきか
三二	織田信長	○織田信長と光秀との關係を如何に取扱ふべきか、特に本能寺の變について
三五	豊臣秀吉	○秀吉の朝鮮征伐は失敗にこそ終れ何ものも得なかつたと説き或は軍閥主義鼓吹の教材とさへ云はれる、如何に扱ふべきか
三六	徳川家康	○家康は十五代三百年の太平の基を開いた人物であるが兒童は先入見的嫌惡の情を以て眺めて了ふ此點如何に指導すべきか
三八	徳川家光	○島原亂の原因を如何に扱ふか、キリスト教の問題は今日餘程注意せねばならぬ ○鎖國の取扱に就いても相當困難を感じるであらう
四一	大石良雄	○大石良雄等の復讐事件を如何なる用意のもとに扱ふか ○良雄の心情に就いても種々の見方があらう ○現代思潮にかんがみ又國史教育の精神から見て如何に扱ふべきか

四八	攘夷と開港	○井伊直弼の親方は可成り困難なところである、殊に櫻田門外の變の起因を如何にみるか
五〇	武家政治の終	○武家政治の功罪を如何にみるか ○大政奉還へのプロセスを如何に取るべきか ○鳥羽伏見の戦を如何にみるべきか
五一ノ(一)	西南の役	○明治史上に於ける西南役に就いて、特に征韓論並に西郷隆盛の舉兵の動機について多くの難點がある隆盛の思想感情の内面的な考察もむづかしい
五一ノ(五)	條約改正	○これが改正さるまでの朝野の苦心は非常なものであつた。 ○これが教授にあつて如何なる點を取扱つたらよいか ○又代表的事項として如何なる事を選ぶべきか
五二ノ(六)	明治卅七年戰役	○ポーツマス條約は戰勝國の日本としては何だか物足らぬやうな感じがする。しかし當時の状況上止むを得ざりしものもあつた。この點に關して如何に扱ふべきか ○今一つ今次の滿蒙問題と如何に關聯すべきか
五二ノ(七)	韓國併合	○併合はとかく併呑の如く思はれやすい。現代世相の上から見ても餘程慎重に扱はるべきものである。教授者は如何なる用意が必要であらうか。

## 第二章 至難教材の究明

### 第一節 天照大神の章の難點及究明

#### 一、本章の難點

國史教授の第一頁であると云ふ點に於てもすでに至難な課であらうが、それにもまして困難を感じるものは神話の取扱であらう。兒童は已に動物植物、物理化學の初步を學んで來てゐる。人間と動物と自然とはそれ〴〵差異あることは知つてゐる。即ち科學的な洗禮をうけてゐるのである。だから「高天原は本當にあつたのですか」とか「八岐大蛇はどんな動物ですか」等種々の質問を發し事實と考へ得られぬやうな問題に對して疑を挿し挾むのである。

#### 二、難點の究明

この難點を解決する鍵は第一教師自身の神話觀であり第二は兒童に神話を受け入れる態度を養つておくことである。以下多少この問題に觸れてみよう。

## (1) 神代史に對する考察

イ、神代の意味 普通に神代とは神様の代と云ふことだとあつさり片づけるがこれは妥當ではない。神代は上代の義で、神様の代と云ふのではない。上代、古い昔の代、換言すれば我々國民の遠い祖先の世といふ程の義に解した方がよくはないだらうか。神武天皇以前が神の代でそれ以後を便宜上人皇と書いて人の代と稱ふることになつて居るがそれは甚だ妥當ではない。神武天皇もそれから以後の御歴代天皇も、今上天皇も等しく神様であらせられる事に就いては少しも變りはない。「神」といふ支那の文字に拘泥すると叙上の如き誤解を招く我國に於てはスメラミコトと云ふ語が神である神武天皇以前と以後と「スメラミコト」の意味には少しも違はない。一方を神と見一方を人と見ることはなかつたやうに思ふ。ここで私は我等祖先——上古の——の抱いた神と人との思想に就いて西田博士の説をかりて述べて見やう。

「草木威能言語」(日本書紀卷二神代下) また「天地割判の代草木言語せし時」(日本書紀卷十九欽明天皇十六年)ありとしたのは古代の日本人が、わが住む世界に就いて考へたこ

ゝろである。われらの祖先はその四周の山川草木のことごとくから、よく生ける聲を聞いたのである、この心のうちには自然の事象と人間の生命との區別がなほ明らかにいついてゐない而してこれはまた神と人との境がいまだ大きく分けられてゐない状態であつた。かゝることゝの裡には神はつねに人とともにある。日本民族の古代文化を考へて國家の組織を精神展開の事實として觀るとき國家は人の住む國ながら神の成せる御國であつた。精神發展の上の大なる事實である國家のその創始は神によつて成された嚴然たる事實であつた。

ロ、神話 凡そ原始時代の人々は奇しき自然現象或は花々しき人事現象の出現を一種の靈格の直接活動若しくはその保護によつてなされたものと見これを子孫に傳へんとする性質のあるものである。中にも祖先の功業や偉人の事蹟は彼等のもつとも興味をひくところとなり子々孫々に言ひ繼ぎ語り傳へらるゝ間に幾多の潤色が加へられ又理想化され神聖化されて遂には全く人間業を離れた超人間的事蹟として傳へらるゝやうになつた。これが神話である。かくてこの神話はその國の發達と共に一段の光輝を添へてその國史の卷頭を飾るやうになる我神話も恐らくかうしたプロセスを経て出來上つたものであらう。然してこの神話を知らし

ひることによつて、

- 一、我が國建國の特異性を知り
- 二、國家成長發展の要素が悠久遼遠なる往代に發達せる事實を知らしめ
- 三、純眞自然なる信仰、祖國愛が如何に培養されたか國民精神の向ふところを明示するのである。

## 2、神話の取扱法

神話の解釋に大體三通りあることは何人も知れるところであるが之に就いて述べることはやがて取扱に對する根據を指示するものであらう。

### 一、宗教的解釋

- (1)、敬遠主義 神話は超人間的にして別世界の神の活動にしてこの事實を吾々が知らんとするは凡慮の至りであると觀る方法。

併しこの神秘的な神の觀念は吾々が國史に於て實際信ずる神とは異なるものである。即國史に於ては現神である。故に神その物に對する見解が異なるものである。

- (2)、強要主義 神話は國民精神の核心である。故にその思想も皆神話より因源するもので

ある。神話としての疑問を事實として確認しなければならぬ。即ち強要的態度で高天原は天である。神代は天地の間が自由に往來出來たと説くので、ここに一點の思惟も入るゝを禁ずる。嚴然として莊重に宛も教師自身が神の態度にて説くのである。

然し兒童の心的發達と智識慾求は是等を無條件にて學ばんとするであらうか。お伽噺としてならそれでも満足するであらうか。非常識なる非教育ではなからうか。國史教育のスタートに於て夢の如き強要論は國家社會をより冷たく大きな謎として残すであらう。

### 二、自然科學的解釋

前者の反動として考證的態度或は科學的態度といふ行き方が試みられた。新井白石が試みたのもこれで高天原は常陸の多珂海上であると解したり伊勢國だとし天浮橋は舟のことなりと思惟しそして學者がこの盲目的不合理な解釋より、より正確な實際的なものにならんとした。然し何時の時代に普遍的なものになるか、これは色々と詮議立てることによつて國體に疑惑を懷かしめやがて國體の破壊者を養成することは自然である。例へばこゝに一

つの柿があるこれを皮、種子、汁と分けたならば柿としての存在があるか、玲瓏たる果實を眺める所に果實としての價值がある。それなら如何なる態度を以て授けるか、全く自然科学的思惟を忘却するか。

### 三、文化科學的解釋

然らば神話は如何なる觀方によるか、即ち文化科學的態度こそ最も當を得たものと云はねばならぬ。文化科學的取扱とは神話は神話として取扱はんとするのである。文化的と云ふことの意味は即ち我が國民は斯くの如き神話と云ふ文化を有つて居ると云ふ所から斯く名づくる。即ち子供が神話として受け入れる態度を養成することである。

先づ最初に「何れの國にも開國の初めに當つては神話なるものがある。此の神話といふものは或中心の事實があつてそれが順次敷衍され或は改變されて傳承されたものである。さればその神話は其の國民のみ有つ所の文化であつて他國の國民にはないものである吾々日本國民としての共同の寶であつて吾々の祖先は此の神話を信じ而して我が國を維持し發展して來たものである。是から皆に神話の話をするが此の通りのことが一々本當であつた

といふでもない。又嘘であつたといふでもない。唯神話は神話であることは事實である。皆さんは是から神話をきくのであるが然しこの神話も全く火のない所からけむりが起らない様にある事實がもととなつて出來たのでありそして、代々人々の口より口へ傳はる時にその人によつて面白く傳へられたのである。故に神話の中には吾々祖先の誇りとした日本國民の精神が宿つてゐる。そこで先生は今傳はつてゐるありのまゝを皆さんにお傳へする故に皆さんが神話がこのまゝほんとうで、ちつともうそではないかといふ問題に對しては私にも分らない。然し天皇陛下の御先祖であらせられる天照大神様の御徳の高かつた事や出雲の神様大國主命がいらつしやつたことは今日御子孫もありお宮さまもあることで疑のないことである」と斯る意味のことを話しておいてそれから神話を説くのである。

實に神話は民族の祖先の事實を基として語り傳へられたものが幾代も幾代も年月を経る間に潤色され敷衍され淘汰され混一され、純化され誇張され更に構想されて傳承に便なるもの、國民の性情に適するもののみが既に事實は理想化され即ちザインはゾルレンとなつて



文字に書き残されたものである。さればこれは國民の祖先累代の理想の結晶であり幾千萬年の信仰の具現であり國家統制の原理である。

而してここに注意すべきは神話は神話として授けよといふことは神話を曖昧模糊としておくと云ふことではない。神話を授けると云ふことは、神話を通じてその底に流るゝ日本精神を知らしめるのであり、實にその神話のもつ内在的意味を了解することである。故に神話の中に實を求めんとすれば何の價値もなきものとなるが眞を求むるところに生氣をもつてゐる。これはさながら漫畫の場合と同様である。

故にあくまで神話は神話として扱ふべく、一々外的理由をつけ證據だて、扱ふ必要はない然しながら神話として語るとしても教師はこの思想の流れを確認してゐなければならぬ。

天岩戸の神話―天照大神の岩屋入りによる天地皆冥の話は我帝國が天子なくして一日も成立してゆかぬことを意味し天皇の國民に對する情を示すものであり素盞鳴尊の御態度に對しては御怒りありしに非ずしてむしろ姉君として弟の心を戒めんための計ひであつたと見るべきである。

册諾二神の國産―大神と素盞鳴尊をお産みになつた後に國土をお産みになつたといふことも日本が先づ何よりも天皇を敬し奉る皇室中心の國なることを意味しまさしく君先民後の國體を明かにしてゐるものである。

高天原―先に神話に對して科學的な態度を執ることを批難しておいたが反對に「高天原は本當に天にあつたのですか」と兒童に質問が出たとする。この際私としてはやはり天上としたい。その高天原が何處にあつたかは大昔のことではあるしはつきりと今日ではわからぬ唯古の人は天上であると信じてゐたのです。先生も神話は神々の話であるからそう信じてゐる」と答へるのである。これについて、私は西田直二郎博士の言葉をかりて私の言ひ足らないところを明らかにしてみよう。

「―日本民族が至純な心を以て懐ける高天原の觀念も自然と人間の區劃のいまだなる時に於て尊く考へらるべきである。高天原をたゞちに人間の世界と考へんとしたのは近代に於いて鬱興した人間の感性を重んずる思考から來てゐる。日本の神代を考へて「神は人なり」と新井白石が説いたのは人間以上の存在を信ずることの薄くなつた時代の心から來て

ゐる。又高天原を常陸と決定せんとしたのは地上に確實に立てる生活でなければ生活でなく眼前に見らるべき事象でなければ眞實としなかつた心の傾からである。同じく高天原を海を隔てた遠隔の地に求めんとする近世の學問研究には陸地發見時代の人の心の如くに新地を見出す喜びの心が混つてゐる。現實の世界と感性に信を置くことの篤い近代人は高天原の人類と土地とを求めて止まない。而して自然科學こそこの發見者としてあるべしと考へた。

しかし人類學と考古學と而して地理學が參加しても遂には高天原の全展望をなすことは出來ないであらう。何となれば高天原は天孫民族が民族移住をしたその原住地といふやうな簡単な觀念ではない。一部の地理的區域などはこの觀念の成立には恐らく重要な本質的なものではない。實に天上こそ高天原であるからである。

天孫降臨の傳承を地上に於ける移動以外に考へられないやうに思ふたのは近世の思考があまりに感性的な事實を重んじたためである。天孫民族移動の跡を大和の中つ國から山陽に山陽から筑紫にと溯りて跡づけさらにその行きさきを天上に向けるのを好まずして強いて

折り曲げて平面的に同一地上に引かんとしたのは近代學問の傾向である。傳承の上から言つても民族移住の跡を後半は地理的水平的に考へ前半のみが天上よりの降下と云ふやうな譬喩的な脚色にする必要はない。日本の考古學、人類學的研究の結果もこれを天孫降臨の神話と結び付け民族移住の跡を決定せんとするものは天孫降臨を始めから全く地上の民族移住の事實として豫想してゐるものである。高天原は日本民族が自然と人間との分を絶した境にあつての神への體驗と次に現はれ來つた地上に於ける國家生活の實在とを所縁として明らかにもつてゐた神の國である。而してその所在こそは疑ふことの出來ぬ天上の國である。近代の自然科學的な方法によつて説かれたところよりも寧ろ徳川時代國學者によつて信じられてゐたものに通するものがある。

八岐大蛇に就いて「どんな動物か」と尋ねることがある。その時は「そんな動物は居たか居ないか分らぬが、それはとも角身の危きをも忘れて弱い者に同情して悪者である八岐の大蛇を退治さるゝ素盞鳴尊の仁俠勇武は豪いものではないか」と答へた。即ちこの物語の形のみではなくその内在的な意味を感得せしめるのである。尙この話により素盞鳴尊は單

に荒々しき神でなく一面優しきところあることを了解せしめ、外國神話にあるやうな慘虐性なきところを見ねばならぬ。併も大蛇の尾から出た劔を得ては「こは神劔なり私すべきに非ず」となして大神に奉るその御精神を感得せしめることが大切であらう。

## 第二節 神功皇后の章の難點及究明

### 一、本章の難點

新羅征伐を以て我が侵略的行動と見かゝる教材は日鮮融和の上よりしてもむしろ有害であるとし著しく皇后の御功績を縮小される感ありこの點如何に指導すべきか

### 二、難點の究明

(1)、題目を直視して

それ第二の日本武尊におはしますか、それにしても、皇后にして一課の取扱となつてゐる唯御一人であらせらるゝことは色々の意味に於て有難く思ふそれだけ本課への要求も大であ

る。女装された日本武尊、男装された神功皇后、それ程にして國家にお盡しありし有難さ。

難戰中妃を失ひたまひし尊に、天皇を失ひたまひし皇后の御悲しみ、尊し畏し、然して劔を伊勢神宮から授けられた尊の御精神あり今又朝鮮はかつて素盞鳴尊居給ふた地吾人は唯單に素盞鳴尊は荒々しい神にましましたで濟すべく、あまりに御爛眼のありし方と拜察する。實に日本國の發展は宏大な凌天建築の如く唯一つのものゝ成長であり積上げであり繼承であるやゝもすると個々別々に断片的に扱つて死したる國史教授に走りやすい事をいましめたい。

それは兎に角皇后の御事は我國海外發展外國服屬の第一人者であつた。日本は女子なりし天照大神に創められ然して外的發展は女子なる皇后に創められた。日本婦女子の自覺を促す切なるものがある。皇后御遠征御發意の男々しさ、而して凱旋の結果は大陸文物の移入と云ふ空前の莫大な貢獻を齎すことになつて教科書の「全く神功皇后のおてがらに基きしなり」とある如く實に感謝の情にたへぬものがある。

(2)、三韓征伐の史的意義 (イ) 當時の時代相——崇神天皇以來内地の經營は着々進行して西陲の熊襲も東邊の蝦夷も共に壓迫されたとは云へ熊襲の巢窟は顛覆せられず蝦夷も後方に



退いたものゝ尙依然として東北に占居してゐた。然らば我國民の勢力を展開し得べき方向は東か西かであらねばならぬ。今や内地の經營が漸く整頓した時勢力展開の針路は果して何處に向ふべきか均しく東西に向はんか抑々孰れかの一方を取るか、誠に國の東西を比較すれば一は北方に偏して氣候は寒く浪は荒く其地には毛を衣て肉を食ふ野蠻人がその間に禽獸奔走してゐて農耕の業の見るべきものはない。一は西海に臨み地味は沃饒にして氣候は溫暖に物資は豊富で生活の容易な事は勿論であり更に一衣帶水を渡れば大陸に往來する便利があるから早く海外と交通して實に大陸文明を輸入する關門である。熊襲の勢力が顛覆せざる限りは其肥沃の田地も彼等の配下に没し大陸文明の輸入も彼等の獨占に歸するのみである。斯く比較してみれば我國民が勢力發展の方向は自ら決せらるべき筈だ。然るに熊襲の勢力なるものは彼等の根據地のみ存せずして、海外に俟つ所のあつた事は明らか事である。是に於てか之迄養ひ得た國民の勢力をば先づ以て國外に展べる必要がある。さすれば東北邊土の經路は一旦手をゆるめなければならぬ。(ロ) 半島の形勢 國內の形勢かくの如くなると共に海外の形勢をも觀察せねばならぬ。何となれば國民の希望も對手の勢力如何によつて達するか達

せざるかゞ分れるからである。韓土に於ては三國(魏吳蜀)の鼎立の時代は魏の勢力は半島に及び新羅や熊襲は共に其の力を藉りてゐたが三國が亡びて晉が支那を統一するに及んで内に八王の亂あり外に五胡の侵略あり國內の亂離の爲に手を半島に伸すことが出来ない。其間に高麗の勢力が盛になつて帶方樂浪の二郡は大抵その領内に没し百濟が其南方にあつて之と境を接するに至つた。此に於てか新羅は支那の後援を失ひ剩へ高麗の勢力が北邊を壓して來てからもはや進取の力もない。従つて亦熊襲も同様の運命で右の手を支那に失ひ左の手を新羅に失つた。之實に新羅に於ては内部の經營が漸く整頓の域に達した頃であつた。(ハ) 仲哀天皇の壯圖 内外の形勢斯くの如き時に當つて日本武尊の皇子で成務天皇の後を繼がせられた仲哀天皇は遂に新羅征伐の壯圖を計畫せられたのであつた。而して此の大壯圖は單なる侵略的遠征ではなかつた。即ち日韓の交通は已に日本紀の示す如く神代に於て素盞鳴尊は會戸茂梨に居住され以來天日槍の歸化あり其他崇神天皇の頃には半島の南部に大伽羅なる國ありて新羅及び百濟の侵略に苦しみ使者を我に求め天皇は鹽乘津彦を派遣して新羅を伐たしめられた事がある。かく考ふる時この大壯圖は暫く等閑に附されてゐた、對外關係の重大視さ

れて彼の地に於ける我優越權の保護にあると同時に内地攪亂の禍根を絶滅せんとするに至つたと見る。是は仲哀天皇が二年越前宮飲宮に皇后を高穴穗より呼ばれ「朕此の國を察するに海陸の便を得勢外蕃を制するに足れり昔日新羅我に禮を失ひたり朕將に之を征せんとす汝宜しく戰捷を神明に祈るべきなり」と仰せられた事によつて單なる侵略的外征でなく而して皇后の御壯圖は天皇の御遺志を繼承されたものであり他國の侵略奪略でなくまことに之正義の出兵であつた。殊に今次の滿蒙事變と古今同じ形であると思ふ。(二) 日韓併合の第一歩。右に述べし如き立場によりて之を視る時この壯圖こそ日本國內の平和保持の爲であり半島の平和であり延いては東洋平和否世界平和へのために決然と立ちし日本精神の發露であつたと解するかくて此の擧も日清日露の二役並に今次の滿蒙問題解決の爲の出兵と何等變りなく而してこの外征こそ日韓併合の第一歩である事を強調し度い。したがつて日韓民族の共存共榮の自覺を確立せしむる上に本章は重要な使命を有する。

(3)、神功皇后の御偉大 (イ) 征韓の御識見の卓絶せる事は軍議の席上で神が皇后に託つて教へられし如く記紀に表はるゝを見てもわかる。こは皇后の御意見が神意と匹敵する程す

ぐれさせ給ひしと見るべきであらう。但し天皇との意見の相違は唯方略の差であつて皇后の御意見としては「新羅は根元なり熊襲は支葉なり」と云ふのであると思ふ。(ロ) 雄々しき皇后。』「幼くして聰明叡智まし容貌壯麗はし父王異しみたまふ(書紀)にある如く幼くしてかくの如し。天皇崩御の御時普通の女性なれば悲歎の涙にくれて歸國せんとするものを而も御懷妊の御身を以ても斷然征討を決行せられ熊襲は鴨別を遣はして之を征せしめ自ら三軍を叱咤せられた。その言葉の如何に勇壯にましますことよ「金鼓節なく旌旗亂るれば士卒振はず私を懷ひて内を顧みる時は必ず敵の捕虜とならん小敵なりとも屈する勿れ奸暴なるものは許す事なく降伏せるものは殺すこと勿れ勝つ者は必ず賞すべく走るものは必ず罪あり」と又「天師を與し衆を動かすは國の大事なり安危成敗必ず斯にあり吾婦女にしてまた不當なり——事成らば群臣其功を共にせん成らずんば我獨り罪あり」となんぞその軍令の嚴正なる誰か粉骨碎心誠忠を決せざらん。かくてこそ一矢をも費さずして彼の地を服せしめ給ふたのである。(ハ) 政治上に於ける皇后。』筑紫に凱旋して應神天皇を擧げさせ給ひ、爾來攝政として七〇年磨坂忍熊の亂を平げ百濟の貢を入れて國威を揚げ給はれたのである。而もこの壯圖

をエボックとして我文化の一大躍進があつたのである。

(4) 郷土史より本章を見る。(イ) 上代の近江・琵琶湖と文明輸入の四幹線——上古は陸上の交通よりも水上(海と川)の交通が発達してゐた。これは神代にてもやまたのおろちを退治らるゝ素盞鳴尊が簸川を上られし事や神武東征が瀬戸内海をとられし事に於ても明らかである。従つて文明も此の水路を辿つて我國に入つて來てゐる。今京大の中村直勝助教授の説によれば上古朝鮮及び支那文明が大體四つの幹線を以て我國に入り併もそのうち大動脈とも云ふべき二つの幹線が我近江の琵琶湖に於て相合したと云ふのである。今之を簡単に示せば、

第一幹線——支那文明揚子江口——九州の北部——瀬戸内海——難波——淀川——琵琶湖

第二幹線——朝鮮文明漢江——日本海——敦賀——琵琶湖

第三幹線——支那文明——九州北部——瀬戸内海——播磨

第四幹線——朝鮮文明——日本海——出雲——播磨

かく考證する時我近江は朝鮮文明と支那文明との大動脈の合流したところと云ふ事になる。かくて湖水が交通の中心でありしこと、近江の位置が東國への要路たりし爲、景行天皇は晩

年近江高穴穗に都せられ、次いで成務仲哀と三代の間の都せられしは偶然ではない。

(ロ) 神功皇后と近江——先づ皇后の御家系に就いて之を岡部精一氏の所説に依つてみると、

「皇后の御父は氣長宿禰で御母は葛城高瀬媛と申したことは記紀も一致してゐる。即ち書紀の神功皇后本記に氣長足姫尊は稚日本根彦大日天皇(開化天皇)の曾孫、氣長宿禰王の女なり母を葛城高瀬媛と曰す。足仲彦天皇(仲哀天皇)の二年に立ちて皇后となり給ふ。幼くして聰明睿智まし容貌壯だ麗し云々」とある。記の氣長足姫尊は即ち神功皇后であり其父方の家系は開化天皇より出で息長は地名で今の近江國坂田郡息長村の地である。之を謚とするは間違である事のかの古事記に詳しく説明してある。仲哀天皇の先代である成務天皇は近江志賀高穴穗宮にあつて天下を治めされ仲哀天皇もこの宮より越前角鹿の間に居られたのであるから近江の名族息長宿禰王の女である息長足姫尊を正后にされたのはさもあるべきである次に母方の方は頗る考究に値する。皇后の御母の葛城高瀬媛は新羅から渡來の天日槍(新羅王子)の後である。日槍は大體垂仁天皇以前に前記外國文明輸入の第三幹線なる播磨に入り更に宇治川より近江に出で湖畔の吾名に住むと云ふ(播磨風土記)吾名は即ち景行、成務、

仲哀三帝都なる高穴穗なる事を推定される。かくて開化天皇の曾孫息長宿禰王は近江に下り長濱附近を鎮めさせられ天日槍の子孫は高穴穗に住むとすればこの二つの家系が結ばれるのは不自然ではなからう。而して實に皇后はこの開化天皇五世の孫なる息長宿禰王と天日槍の五世の孫なる葛城高瀬媛との間に生れさせられたのである。仲哀天皇が特に新羅征伐の志によりて彼の地の國情に明き皇后を立てたまひしはさこそとうなづけるであらう（高穴穗宮址と推定さるゝところも存してゐる）

(5)、武内宿禰—教科書の本文にもある如く「武内宿禰とはかりて——」云々實に宿禰は皇后悲痛の御境地を慰め常に帷幄に參じて輔弼の任を全ふした大功臣である。宿禰は景行天皇より仁徳天皇まで五朝に歴任しよく誠忠を至した事は本章の副人物として強調すべきである。

### 三、取扱の注意

(1)、神武天皇以來の皇威と内政を回想せしめ何故に新羅征伐が行はれしかを考究せしめる事。(2)、皇后の御識見を仰ぐと共に仲哀天皇との御意見の相違は方略の差として扱はねばならぬ。(3)、天皇崩御の間にも所信斷行遂に目的を貫徹したまひし皇后の御賢明と武勇とを仰

がしめねばならぬ。(4)、三韓征伐は決して侵略的意味でなく過去に於ける我半島の優越權を回収し併せて、外交問題を解決し國內和平の爲の外征なる事を強調し、今次の滿洲事變と比較して正義の爲の皇師なる事を覺らしめる事。(5) この壯圖の結果が如何に文化史上に大なる衝動を與へたかを知らしめる事。(6) 郷土史は單に史上の人物の事蹟のみで終るべきでない。本章に於て上古に於ける郷土の文化史的考察をなし更に皇后の御家系を説きて皇后が郷土の出なる事を知らしめ一層御偉徳を景慕せしめる事。(7) 地圖により兩國の位置を示し大陸との關係を考察せしめ半島の文化輸入の重要性を知らしめ尙新羅王の過去の行動を責めずして皇后之を許し給ひ「王を殺せ」と云ふ言を退けられし寛大に侵略的ならざる征伐の眞意を明らかにすること。(8)、日鮮民族融和の一教材としても意義ある事に注意すること。(9)、我固より固有文化を所有してゐた事を授け大陸文明を同化して一層進歩せし事を授くること。

## 第三節 聖德太子の章の難點及究明

## 一、本章の難點

聖德太子は我が上古に於ける大天才にまします御方であることは云ふまでもないが、林道春一たび聖德太子に非難の聲を擧げてから水戸義公をはじめ近くは頼山陽に至るまで多くの漢學者が攻撃の筆を執つたばかりでなく本居宣長の如き國學者さては神道の人々は云ふに及ばず大抵徳川時代の一二の學者を除いては太子が我が國體に背馳するところの行動をなされたやうに論じてゐる。よし文化の祖として貢献せられたものゝ多大なるは之を認むるとして太子と蘇我氏との關係については永く疑問の間に葬られつゝあるのであり、更に小學國史教授に於ても從來やゝもすると太子の御功績があまりに狭縮されて唯佛教方面に終始するの近視的な嫌ひがあつた。之等の點に就いて如何なる教師は用意が必要であるか。

## 二、難點の究明

本課取扱の着眼として、果斷明敏眞に多方的文化の基礎づけを成された日本文化創造の本

尊としての御偉徳をその御偉業より實證申し上げねばならぬ。教科書六十二頁に「世の中の人々は皆親を失へるが如くなげき悲しみたり」とある教授活殺の岐路であり秘鍵である世の中の人々親を失へるが如く——この奥に太子の御偉徳が民の情にあらはれてゐるではないか。君民一體融合のありがたさ。吾人はかくした態度におきたまつゝた太子を御偉業を透して「親を失へる如く」悲しみし祖先にも似た兒童へ傳へたい事は太子の御偉徳であらねばならぬ。今前掲の難點を究明せんとするに先だちその時代相を研究しておく要はないか。

一、太子を生みし時代の氣運と聖德太子

今回編纂されし小學國史教師用は之に對して次の如き指針を示してゐる。即ち

- (1)、氏族制度の利弊
- (2)、豪族の土地兼併
- (3)、名族の権力事

の三點を擧げて特に氏族制度の極弊は蘇我氏無道に説き及び然る後「かゝる社會の趨勢を視



てはやくも政治を革新し、皇威を振張せんとしたまへるは聰明なる聖徳太子なり」と時代相の上には人物を視るの態度であるが、この點從來おろそかにされて居はしなかつたか。「物部氏の没落は國史上に一小時期を劃する分界線である。是より後大化改新まで五十餘年間は過渡の時代で守舊派の勢力の顛覆に乗じて外國文明の輸入が従前よりも際だつて顯著となり、大化改新の素地をなした時代である。此の氣運に乗じて我が文化の發達に偉大なる功績を貽し、此の時代の立物となられた者は蘇我皇子即ち聖徳太子である。再言すれば聖徳太子は時勢の要求に應じて文明興隆の爲めに出現せられた一大偉人である」これは萩野博士の高著日本史講話の一節である。

## 二、聖徳太子と蘇我氏との關係

世に蘇我馬子が崇峻天皇を弑したつたに拘らずあれ程立派な蘇我皇子が、之を默許せられたことを國體上より大いに非難し奉る。これに就いて考へねばならぬことは太子の大日本建設といふ大理想である。大陸文明輸入と佛教の傳來によりて當時我國民は朝鮮文明を消極的に又受動的に輸入し支那に對しても閩族に對しても、殆んど事大思想によつて左右されてゐる

たのである。かゝる時代なるが故に如何にもして皇室の繁榮、國民の幸福、對外自主の國たらしめんとせられたのが太子の遠大なる理想であり、之が實現にはこの時弊を根底から改造して行かねばならぬ。即ち消極的日本から積極的日本へ、受動的日本から能動的日本へ移らねばならなかつた。これが實に太子の御理想であり御精神であつた。一言に盡せば太子の御理想は大日本の建設で、太子の偉大なる所以が存する。

併しながら大日本建設の御理想を實現するには、それ〴〵道順がありまたその根本に溯つてその出發點を定めねばならぬ。太子はこの御理想を我が建國の大本に出發し内にあつては皇室中心外に向つては日本中心といふ純日本民族思想を國民精神の中核に置いてすべての方向に活動せしむるでなければ大日本建設の事業は仕遂げられぬことを看破し給ひ、斯にその指導者として奮闘せんと決心遊ばされたこと、推察し奉る。吾人は太子の御事業を観察するに於てすべての場合に貫するところのものは、實にこの太子の御理想であり御精神であることを確信する。従つて先づ國民思想を改造して皇室中心主義、日本中心主義のものとせねばならぬ。倒すべき機會さへあれば閩族を倒すも可なるには相違ないが、皇室中心主義の

思想が國民に充實せざる間は第一の閥族を倒すも、直ちに第二の閥族を生ずる恐があるのみならず、第一の閥族を倒して却つて第一よりも強暴なる第二の閥族によつて、皇室が危くなるやうなことがあるれば所謂毛を吹いて疵を求むるものであるから、そこに隱忍自重するところがなければならぬと如何にも慎重なる御態度が太子に觀らるゝのである。後に後醍醐天皇の建武中興が崩壊せしことを考へてみる。この理由は補弼の任に當るものゝ無能なりとは言へそれにもまして大なる原因は鎌倉時代にあつて、勤王の心猶は多くの國民の間に徹底せざりし爲め、楠木正成の如き忠臣を出せしに係はらず二たび國民は武家政治を謳歌し、皇室の式微を顧みざるに至つたのである。皇室に對する國民の思想が太子以後凡そ七百五十年の間涵養せられた筈の時に於て猶然りとせば、太子がこの點に向つて着眼せられたことの如何に偉大なるかを想はねばならぬ。しかしこの國民思想問題は古今一如現代にもまた最も痛切に之を感じざるを得ぬものである。この點黑板博士の説がおもしろい。即ち

『こは水戸義公が太子を非難しながらその精神に於て、全く太子と一致するところありしを頗る痛快に思ふ。若し義公にして皇室中心主義の上に立ち大義名分を正せる人であつたな

らば何故徳川將軍に大權奉還を迫り、幕府解散論を主張せざりしかを疑ふも、義公はまた國民に博く且つ強く勤王心が勃興して來なければ、よし徳川氏を倒し一たび王政復古を觀るも必ずや第二の徳川氏を生ずること、北條氏の後に足利氏を出せると同じきを信んじこゝに大日本史の編纂となり、大義名分の上より國民の自覺を喚起せんとしたのである。かく考ふるとき湊川に楠公碑を建て大楠公を弔ひしも、一に國民をして勤王の心を起し大楠公の如く皇室の爲めに盡瘁せしめんとするに出でたるのである。そこに義公の偉大なる人格と識見をみることが出来る。

従つて太子が從來永い間非難せられたまへる蘇我氏との關係の如き全く太子が、大日本建設の準備に着手せられ隱忍に隱忍し自重に自重して、一步々國民思想の改造を進めつゝありし間に天壽を假さず薨去せられたゝめ、今日まで千古の冤を被らるゝことゝなつたに過ぎぬ。たゞこゝに注意すべきは太子の大日本建設の事業はその御一生に大部分進行したことである。太子の御精神は皇室の御方をはじめ國民の間に弘く宣傳せられた。故に太子が薨去したまひても太子の御精神は亡ぶることなく、そして天智天皇は第二の聖徳太子と

して蘇我氏を亡しここに大化の改新を成功されたのであつた。

而して太子が大日本建設の御理想を以てかく國民思想の涵養に盡瘁せらるゝに至りしは、無論前述の如く閥族の跋扈を憤りたまひしに出たのであるが、之をどうしても決行せねばならぬ事情が太子の時代に起つてゐる。そは支那にありて南北の争亂が止んで隋の文帝が全く國內を統一したのが、恰も太子十六才の御年崇峻天皇の三年であつた。そして文明の程度高き彼は統一的勢力を以て四境を壓する時だつた。併も朝鮮半島へもその指は示されてゐる。然るに我國は嘗て南鮮に雄飛してゐたのも夢のやうになつてゐた。我國の獨立はこゝに危殆となつたことを太子はその御爛眼によつて看破せられた。國民精神の振起と國內の統一はこの對外關係から、更に一層緊急の事となつて來たのである。この際崇峻天皇は蘇我馬子の爲めに弑せられたまふた。太子は恐らく一たび立つて馬子を討たんとせられたかも知れぬ、併し蘇我氏の累世積み來つた勢力は非常に強大であつた。若し失敗に終つたら後にかの承久の變や元弘の變の二の舞を踏むかも知れなかつたらう。

太子は一たび大日本建設といふことに思ひ及ばるゝ時自重し給はざるを得なかつた。而し

て蘇我氏に對する復仇は時機の到るを待つてもよいが、大日本建設の事たるや我皇室の運命、我が日本の運命を開拓するに先づ最も緊急であり且つ大日本建設の事なる曉こそは、蘇我氏を滅すの時であると御考へになつたのであるに相違ない。近い時代で大石良雄が主君の切腹を命ぜられし報に接し、彼は何故直ちに同志と共に江戸に上つて吉良邸に討ち入らざりしか、また亡君の仇を討つと云ふことよりも何故に先づ淺野大學をして、淺野家を存続せしめんと盡せしや、その事遂にならざるを見ていよく復仇となつても彼は何故に一年有半隱忍して自からあの亂行沙汰の苦しみをせしや。これは引例として甚だ恐れ多く且權衡を失つてゐるとしても、太子の御心中と良雄の心中には似通つたものがあると思ふ。しかも成敗は天にありその成ると成らざるを以て、之を批判するは甚だ誤つたことではあるまいか。』と。

以上私は、太子攻撃の目標たる弑逆の臣馬子を討滅せられなかつたことに就いて述べたがこれは直接兒童に示す必要はなく、教師の史的背景として十分認識を要するものとして論じた。更に私は本に還つて教科書の態度を見ることにする。教科書は聖德太子の三大事業が特

筆されてゐる。即ち

- (1)、紀綱肅正の努力としての憲法の御制定
- (2)、文化の直接輸入のために對等の禮を以て支那との交通を開始せられしこと
- (3)、佛教を國民信仰の中心として深く信じ之が弘通による國民思想の統一

右の(1)と(3)は内政であり、(2)は外交であるがこの三つによりて聖徳太子は大日本建設の大理想を實現せんとしたまひしことに外ならない。この對外對内兩面を綜合止揚した「太子の深い御理想」そのもの、洞察にまでつきつめねばならぬ。

### 三、十七條の憲法について

太子の國民思想を如何に新しく改造せられんとしたかは、その制定された十七條の憲法が最も具體的に之を示してゐる。而もその中に一貫するものは大日本建設の根本思想である。

天壤無窮の神勅は我が建國の太初に於て我が國體の本質を極めて、明確に規定されたものであるが有史以後になつて、日本の國體を始めて明瞭なる文字で表現したものを太子の十七條憲法である。憲法と云つても今日のそれと大いに趣を異にすることを注意せねばならぬ

今日の憲法は天皇と臣民との權利義務を法的に規定したものであるが、太子の憲法は天皇と宗教と道德とに關した法則、或は太子の佛教的思想に基いて定められた道德的政治的規準である。教科書には官民の心得とある。而して此のうち特に國體觀念のよく表はれてゐるものは三條と第十二條であらう。即ち三條には「君則天之臣則地之」の言葉あり、日本の國體を正しく表現し又君臣の分を明にせられたものである。未だ國體の文字こそ現れてゐないが有史時代に入つてはかくした形に於て儼然と存在してゐた。而して十二條は「國司國造勿歛百姓國靡二君無兩主」と云ふので、君民の大義を明かにしたる國體觀念の最初の表現と云つても差支へない。特に注意すべきは「國司國造勿歛百姓」と云ふ文字である。この裏にひそむ當時の族制政治の色々の弊もよんで皇室の御意志が族長の跋扈によつて、抑へられる傾のあつたことを如何になげかれたか、又この憲法こそやがて來るべき大改新への氣運醸成の原動力であると見たい。要するにこの憲法は我が國固有の精神と儒教佛教の精神とが、交錯融合して表はされたものと觀ねばならぬ。

### 四、支那との交通

國民思想の改造にはまた新しい文明が必要であつた。無論朝鮮輸入の舊文明を捨て去らぬと共にしかも潑刺たる元氣を有してゐる新文明であらねばならぬ。太子が支那を統一した隋の文明に眼を注がれしは、當然のことであつた。されど我は從來支那に對しては屈從的態度で満足してゐた。屈從的態度で支那と交通を開くことは固より容易の事である。が我萬國比類なき國體を傷つること甚だしいもので、太子は皇室中心主義からも日本中心主義からも之を忍び得られなかつたのみならず若し屈從的外交、支那崇拜の心を以てしたならば矢張り朝鮮文明と同様（蘇我氏などは佛教の關係などより、歸化人と接觸し過ぎて日本精神を忘れてゐた）我が純日本思想を冒瀆するもので二たび皇室御衰微の時代を現出する。

何としても自主的精神の上に進んで支那文明を採用しなければならぬ。それには少くとも支那と對等交際を結ばねばならぬ。日本國民は支那國民と同等以上と云ふ思想を發揮するでなければ、支那文明を採用する上に大なる危険あることを確信せられたが之は至難中の至難なことであつた。——從來はこの何故對等の必要ありやを具體的に説明してゐなかつた。したがつて太子の御苦心が兒童の意識の上に燃焼せなかつたのではなからうか。太子はその十

五年秋七月小野妹子を隋に遣はれたが、あの折の國書は實に冒險であつたが、あの國書を見るとき實に日東皇子の盛んな獨立的意氣が——盛んなる御氣魄が偲ばれる。

今一つはこの際に於ける至難外交に成功せる偉人小野妹子を見ねばならぬ。恐らくこの冒險的外交——腹でゆく外交の使命を直ちに成功し得ようとは小野妹子も毛頭豫期してゐなかつたに違ひない。まして海上の危険なる隋の國都に入ることすら當時容易のことではなかつた。それに妹子は太子の命を畏み恐らく死を決して出發したのであらうが、同時に太子は妹子の外交的手腕を信じたまひ。妹子も亦自ら信ずるところがあつて使したのであらう。而もそれで一たび國書を却けられてオメ／＼と歸朝するやうな妹子ではなかつた。彼は必ずや暗中飛躍その棘腕を發揮したに相違ない。而して遂に隋の朝廷を軟化せしめ斐世清なるものを日本に遣はすことになつた。かくて太子の外に向つて凜乎としたる自主的外交的手腕は十二分に發揮されたのであつた。

#### 五、太子と佛教

太子の佛教は日本民族本位の佛教であり佛教の中から、日本民族の思想と調和し且つ之を

發展せしむるものを採擇せられたのである。そして之を採擇した後自らその弘法宣傳に當られた法華經、勝鬘經、維摩經等の注疏を制せられ且つ之を講ぜられたことをよく考察するとき、こゝに太子の日本精神がうかがはれる。例へば法華經の如き支那に於て幾多の注釋が出来て居た。それを太子はそのまま、我日本に與へやうとなさなかつた。支那人の注釋はどこまでも支那國民思想の上から佛教を解釋したものであつた。従つて日本國民の思想に適合せしめその古來の思想を向上せしむるには、日本民族としての自覺の上に立ちて注釋せねばならぬその任に當るものは當時太子以外にはなかつたのである。

さるを徳川時代の史家は多く儒者であつたが故に皆佛教を排斥して、其の結果佛教興隆の太子をば、一様に非難したが其の後國學盛んなるに及びてもその碩學者も佛教に反對し、遂に太子の功德を認むることが出來ず、かくて日本文化の大恩人にして且日本の内政外交に一大エポックを劃せる大政治家をば、全然理會することが出來ずに終つた。まさしく認識の不足であらう。

今尙佛教を高信し給ひ「篤敬三寶」の條目を憲法の中に挿入され、敬神崇祖の念なき太子

と云ふ人があつたら、それは少くも國史を以て自ら任ずる國史教育者であり得ないであらう。敬神は國民の信念であつて特にとり立て、仰せられなかつたまゝである。而もこれが爲めに深き御心は憲法の出た翌々年神祇崇敬の詔勅も下されてゐるのでないか。而して難波の四天王寺は單に佛教の道場のみならず、外人の目をひく我が文化の誇なる一大廣告塔であり、當時難波津より我が大和へ入朝するものは必ず日本文明の大陸文化に勝るとも劣らぬことに驚嘆したのであらう。

實に太子の佛教御獎勵は國家内に絶對平和を導入せんと企て給ふた御事業でやはり憲法冠位の定め方に織り込まれてゐる「心」への深刻なる陶冶としての佛教的訓化の念願であると見るとき、吾人は太子と佛教と民への御心をむすびつけて涙するものである。

#### 第四節 和氣清麻呂の章の難點と究明

##### 一、本章の難點

本章は小學國史教材中に於ても可成り至難な課であるが、今凡そ次の六項の難點は誰もが

苦しむところであらう。

- (1)、道鏡事件を思想的に大事件としてみるべきか
- (2)、臣を以て君とする事なしといふ建國の大精神よりすれば、何等の顧慮なく退けたまふべきに、何故天皇は改めて清麻呂を遣して神託をうけたまひしか
- (3)、清麻呂の奏上せし神託は神の教なりや又は清麻呂の心そのものであるとするか
- (4)、清麻呂配流に就いて天皇の御参加がありしや否や
- (5)、道鏡が天位を窺ひ尙且つ死をまぬがれ得た理由
- (6)、清麻呂なかりせば皇位あやふかりしか

## 二、難點の究明

國史教育はその本質上我が國體をぬきにして考へる事は出来ぬ。本章に於ては道鏡の皇位覬覦に關する事件を背景として、清麻呂の忠誠を讃仰せんとするにある。言を別にして言へば國體觀念を得させやうとする事であり、國民としての國家理想を得させやうとすることである。教科書がこの事件の概要を述べてその結尾に「我が國民たるものは清麻呂の心を以て

心とせざるべからず」と述べてゐる事はかゝる事を意味するものではなからうか。本章に於ての難點に對する見解の基調はどこまでもこゝに見出さねばならぬと信んずる。

### (1)、道鏡事件を思想的に大事件としてみるべきか

抑もこの事件は佛教旺盛の餘弊より生れてくる。國家的佛教政治本來の目的は第九聖武天皇の章三十六頁に見ゆる如く、慈悲を弘める事による天下太平であつた。然るに佛教極盛の結果は佛道の眞諦を外れたものも出た事は否定出来ない。道鏡、玄昉がそれである。道鏡は慧のみを修めて戒定を修めぬ人で、隨つて眞に佛法の奥義を究めた人格者と云ふを得ない。この人格内容が又この時代の誤つた傾向が彼の非望を起さしめた素因をつくつて居よう。現代に於ても最高學府に學ぶものにして往々その主義をあやまるものあるは、即ち慧知識のみの練磨に走り肝心の定戒、即ち人格の修養は殆んど顧みざるところより因てくる。

さて道鏡が皇位を覬覦するに至つた直接の動機は、阿曾麻呂の進言した八幡の神慮を妄信した結果に出てくる。而して彼には時代が根本的に天皇親政の念の強い信仰をもつてゐると言ふことも悟れなかつたらしい。

喜田博士も國史の教育に「彼は實に野心満々たる而も姦謀を逞うするやうな悪黨ではなかつた、滿廷の臣僚が自分の味方であるか敵であるか見分けすら出来ない程に時勢に通じない男であつた」と述べ更に稱徳天皇崩御に際し、彼は何等策を講ぜず高野陵下に蘆を結び讀經しつゝ將來の天皇として擁立さるべき僥倖を豫想して、奉迎の使の到るをまつた事實を指摘しそれ程時勢に通ぜぬ男であつたと論ぜられた。かく考ふるとき當時佛教はその眞諦に合せぬ不合理な極盛期を現出し、思想的に不健全な發達を見古來の國民思想と趣を異にせるものがあつた點はみとめられる。

然し乍ら皇室に對する根本的な思想即ち皇室が、萬世一系國民に君臨し給ふといふ思想が果して動搖して居たとはいへぬ。この點は萬葉集や懷風藻にも見ゆる事であり路豐永が「道鏡若登天位<sub>ニ</sub>吾以<sub>ニ</sub>何面目<sub>ニ</sub>可爲<sub>ニ</sub>其臣<sub>ニ</sub>吾與<sub>ニ</sub>三三子今日<sub>ニ</sub>之伯夷<sub>ニ</sub>耳」(日本後記卷八)といひ藤原百川が清麻呂の忠烈を愍んで、備後の國の封戸を清麻呂の配處に送充せしことは、この邊の消息もしのばれて涙ぐましくも亦心おどるではないか。こは全くわが建國の由來と皇室の御仁徳の然らしむるところによつてゐやう。かく考ふるとき當代は國體觀念の明瞭なる時

代であつたと云へやう。而も日本書紀が編纂せられ宣陽殿の進講が行はれ、自國意識旺盛にして柿本人麿大伴家持の如き尊王愛國の至誠に燃えてゐる人々が現れた時代であつた。彼の前述の路豐永の激勵の如き是は單に豐永一人の言のみとは思へない。當時の思想を代表した言葉と思はなければならぬ。又清麻呂に對する藤原百川の如き如何に當時の國民に忠良を歡ぶ精神が盛んであつて、且つ後援が強かりしかを見のがしてはならない。

かくてこの見解によればこの事件は思想的の大問題でもなく、又清麻呂が無かつたならば——若し清麻呂が軟骨漢であつたならば必ずや第二、第三の清麻呂の出現を見て無窮の皇位は完全に擁護されたであらうと解する。

(2)、「臣を以て君となすことなしと云ふ建國の精神よりすれば、よし阿曾麻呂の奏上せし神託が皇室の御信仰深き宇佐八幡のものにせよ、天皇は當然何等の叡慮をせずして退け給ふべきではないか。然るに何故改めて清麻呂を遣はして神託を請はしめたまひしか」

こゝに天皇の思召を拜察するにこの阿曾麻呂の奏した神託の誤りであり、萬世一系の皇室が國民に君臨さるゝと云ふ確信は、天皇として何等御ゆるぎになつて居なかつたことは勿論



である。然らば如何なる意味に於て託宣を請ひたまひしか。最初阿曾麻呂の言を御覧に達した時天皇の御心はむしろ阿曾麻呂の言動を御怒り遊ばしたものであらうと拜察し奉る。而して國家に事ある場合祖神に祈り御報告遊ばさるゝは、我が皇室の神に對する道であり即ちそれ自體が政治であつたのだ。まことに深作博士の言の如く徹頭徹尾我が神道の立場に於てなされやうとした大御心のあらはれと見る事が出来ると共に、一は當時一般國民の思想は單純で神託は非常な信仰力を持つて居た。而も「天下太平ならん」の阿曾麻呂の言、天下太平ならざりし當時の世の中（天平神護元年より神護景雲三年に至る五年間に於て、疫癘、大風、大小の飢饉等打ち續くその神護景雲三年九月の奏上であつたのだ）——此の苦しみを自己の苦しみとしたまふ皇道の御精神に燃えさせらるゝ稱徳天皇であつた——かゝる意味に於て、已に最初より託宣の偽なるは御承知でありむしろ阿曾麻呂をにくみたまふたのであつたが、神に對しての道として御報告の御儀を行はせられ、一は以て當時の國民の迷を解き一は次で當時天災地變に苦しむ民の災をはらはれんとして、神に祈りたまひしものと解するのである。

(3)、清麻呂の奏上した神託は神の教であるとするか、又清麻呂の心そのものであるとするか、科學の洗禮をうけた現代の兒童からは必ず出てくる問題であらう。而も時代的には隔りをもつて當時の思想などは解りにくい兒童のことである。

日本後記の記事をそのまま解すれば（日本後記卷八）清麻呂の奏上した神託は、まさしく神の仰せであることになる。萩野博士の註釋日本歴史に「清麻呂遂に神宮に祈りて曰く、今請ふところは國家の大事なり、願くば神意を示したまへと、大神人に憑りて曰く我國家開闢以來君臣の分定まれり、臣を以て君と爲せしことあらず、天日嗣は必ず皇緒を立つべし——云云」とこれによつて見れば「大神人に憑りて」巫女が神がゝりを言ふた如く解せられる。尙續日本紀等にはその邊の事情は明かにしてない。そこでこの問題はどこまでも教は直接間接にしろ神の言が、清麻呂自身の心とするかに分れよう。その解決に先つて神託そのものに就いての考察が必要となる。思ふに當時思想は單純で神託そのものは非常な力をもつて居た而も神祇崇敬の念の強い我國として、之を信する事は國民性の自然であつたやうである。然しこれも本質的には神人合一の作用であると云ふ一方の見解も出来やうと思ふ。さて今この

問題を見るに非常に現代との間に思想的な隔りを感じる。それだけ思想が原始的であり素僕であり至純である。故に當時に於ては神それ自身の教であるとして託宣は信じられてゐたらうと思ふ。この思想的背景なしに神の教を以て直ちに清麻呂その人の心なりとすることは出来ぬ。私はこの教授に於て「清麻呂は私心を離れ國家的信念を以て神に祈つた、そしてその託宣を得て都へかへつた」と説きこの邊の事には取て觸れぬ事にしてゐる。然しきつこの點に關して疑問の矢は兒童から放たれるであらう。その時私は出來得る限り當時の思想を明かにして日本書記の文そのまゝではないが「至誠をこめた清麻呂のまなこには氣高い神の姿があらはれた。又その嚴かな神の聲もきこへた。」と日本後記と云ふ古い本に書いてある。それはその頃の人達がそう信じて居たであらう、と説明する。そして暗に清麻呂その人の心である事を意味づける。

實際神人合一の境地にあつたあの時の清麻呂は、清麻呂にして神であり神が清麻呂であつたらうと私はそう信じて居る。かうした當時の歴史的事實は多分に神話的要素を持つ、それだけ時代的着物をぬがせて現代に追ひ下さうとする事は如何と思はれる。

(4)、清麻呂配流に對して天皇御關係ありしや否や。

續日本記三十、日本書記にも共に道鏡の清麻呂配流に天皇の御關係ありしことは明かに書かれてある。然し敢えて此の書に觸れる必要はない。兒童より積極的に出た時は責をよろしく輔弼の臣の任に歸し度い。随つて御態度御思召に對してその御聰明を覆ふやうな解釋をすべきではなからう。これについて廣島文理科大學の新見博士は「歴史科の學習指導に就いて」——昭和六年四月史學研究——に於てかゝる場合 天皇の御行動に對して如何に解すべきかを次の如く言はれてゐる。

『既往の天皇に對しては帝國憲法に「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」とあるを推して、凡ての批判を避けねばならぬ。尋常史にも「道眞を天皇に讒せり道眞は之が爲めに官をおとされて」とあるからには、醍醐天皇が讒を信ぜられたことになりその責任は天皇に歸せらるゝと云ふ推理が働く、この時教授者は須らく帝國憲法を説いて聽かせねばならぬ。政治の責任はすべて輔弼の任に歸すべきであり、此の場合時平がその責任者であり朝廷に奉仕する大官皆その責を負ふべきものであること、かくして公民教育は歴史科に於てその一部

を分擔することが出来る。』

以て参考となすべきである。

(5)、道鏡が天位を窺ひ尙且死をまぬがれ得た理由

世に往々道鏡が天皇の寵信なるを以て然りとなす。然しそは國史教育上よりはとらない。どこまでも佛教隆盛の世なるが故に僧侶を優遇せられたためであり、又一つは皇室の御仁慈の廣大無邊とに解し度い。

(6)、清麻呂なかりせば皇位危かりしか

難點一に於てこの事件は思想的に大事件でもなく、清麻呂が無くても危いやうな社稷でなかつたと解し、たとへ道鏡によつて、清麻呂が無きものにされ或は清麻呂が軟骨漢であつたとして第二、第三の清麻呂の出現を見て皇位は完全に擁護されたであらうと解した。即ち忠誠の士は清麻呂一人のみではなかつたであらう。道鏡の如き無道の徒がたとひ幾人あらうとも敢へて國體には動搖はなかつたと解した。随つて清麻呂の出現を見なかつたら皇位は道鏡に移つたといふ見解のもとに、清麻呂が忠臣であつたと讃仰するものではない。私の見解を以

てすれば清麻呂の偉大さは先驅となつて事を未然に防いだといふ點にあり、而も彼の忠誠は權勢に屈せずその威武に恐れず命をさゝげて、その節義を全うした所にあると思ふ。清麻呂まさに三十七才の偉丈夫近衛將監、近衛府の三序、長官次官を頭にいたたく清麻呂こそさして大身とは云ひ得ない。その少壯卑官の一面士が國家の大事を擔ふ立役者として、檜舞臺に活躍するに至つた理由としては、吾人はこの忠誠無二の士を選ばれし天皇の御明德を欽仰すると共に、ます／＼清麻呂の眞價を認識せざるを得ない。勿論この背後に姉廣虫のあるを忘れてはならぬ。

之を要するに此の事件の解決は稱徳天皇の神道的御信仰と、和氣清麻呂の徹底した國體觀念の賜物であつたと解することが出来、又我史上より考ふるにこの事件を以て徒らに悲しむよりもむしろ雨降つて地固まり、而もかゝる事件によつて一層我が皇位の尊嚴を裏書するものなりと思推するとき、いよ／＼我が國體のありがたさを痛感するものである。

但しこゝに説き方の上に注意すべきは大衆の力を力説して、清麻呂の影を不鮮明にするが如き取扱におち入らぬことである。大體に於て低學年に於ては個人史觀に立つべきであつて

児童各自をして清麻呂となつて、その責任の重大であることに克く堪え得るや否やに就いて反省せしめ、意志の鍛練と云ふことについて工夫せしめることが必要である。この意味に於て國史教育は意志の陶冶であり所謂自己陶冶であると云へる。

### 第五節 菅原道眞の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

この章の取扱は豫め研究を重ねておかねばならぬ事項がある。例へば

- 1、菅原道眞は忠誠の士であるが筑紫に流されて後は更に藤原氏に反抗の態度も示さなかつた。
- 2、藤原氏と種々困難な關係に立ち乍らも其の位置に戀々としてゐたではないかとも考へられる。
- 3、又道眞と時平と比べて政治の實際的手腕に於て果して、何れが優つて居るかとも云ふ疑に對しては如何に扱ふか

これ等に就いての問題は道眞の忠誠を如何に説くかに觸れる問題である。

#### 二 難點の究明

鎌足の美しき忠勤を裏ぎる子孫の無自覺な言動を如何に取扱ふかは頗る難事である「御代々の皇后もたいていこの氏からお出になる習はしとなつた——高い官職にのぼるものもあつて朝廷の政治を思ふまゝに動かすことが出来たので、藤原氏に縁のないものはすつかり勢を失つてしまつた」何と言ふ至難な教材であらうか、所謂歴史教授なら煩悶はないが國民教育なればこそ悩むのである。教師の腐心はかゝる構文の取扱にあるわけだ。人材の出現を許さないことが國家の發展を阻害する禍害の大なることはまだしも朝廷の政治を思ふまゝにした不忠は何と説明したら無難だらう。努めて骨折つても此の教材を兒童に感化づけることは至難であらうとさへ思はれる位だ。然し行くところまで行つたのだ躊躇は許されぬ。唯恐懼しつゝ當時の天皇がこの爲めに如何に御苦惱あらせられたかを恐察申上げることが大切であるよくも藤原氏一族のそうした横暴が臣下として出来たものだ。遂に愛民を以つて一貫し給ふ天皇も藤原氏を憎くは思召さぬのであるが國家の爲め、國民の爲めの絶對聖慮から餘りの威

勢を憂へ給へるに至つた宇多天皇こそその人におはしましたのである。全く藤原氏の迷夢を醒されんと御慈愛のそれである。藤原氏を憎んでの御精神ではない事を十分悟らせて、天恩の量り知れぬ深さを感謝せしめなければならぬ。その御企圖に選ばれたのが道真その人であつた。然らば道真はそも如何なる人格の人であつたか、吾人は純忠至誠の四字に生きた日本精神の體現者との前提のもとに次の難點にふれようと思ふ。従來道真の論評を見るに

(1)、忠誠の士なるも筑紫に流謫後は、更に藤原氏に反抗の態度なきは畢竟勇なき士であると論じ

(2)、藤原氏と困難なる關係にありかくなるとは知りつゝも、其の顯職に戀々たるその態度を以てあまり自己愛着の人と見たり

(3)、道真と時平と比べて政治の實際的手腕に於て果して何れが優れたりやとか

(4)、延喜の聖代の實現、寒夜に御衣を脱がせらるゝ程の聖帝醍醐天皇が、何故にかくまで誠忠の士を貶したまひしか等

これ等の問題はまさしく公の忠誠を説く上に最も緊要なる問題であらう。

### 一、公の筑紫に於ける忠誠

何故に筑紫に於て藤原氏に反抗の態度を示さなかつたか。吾人はこの問題を説くまでに公の流謫は誰の命なりやを考へ度い。たとへ虚構の讒奏とは云へ皇命により謫居の公だ。公に忠誠の念強き程筑紫に於ける生活が謹慎そのものなる筈である。故に貶謫の身となるも聊かも君を怨まず従來の君恩に對してその辱きことを感謝しいつまでも、君を思ひ奉りし忠誠高潔の精神こそ菅公独自の生命である。太宰府の淨妙院に入つた後別に警固の士あるにあらねど獨自ら謹慎して一步も門外に出でず、たとへ虚構の讒奏に因たる冤罪にて聊かの罪なければど純忠至誠の菅公は、皇命を皇命として、謫居の内に謹慎屏息して一意皇命を慎み奉つたのである。

流謫の事と藤原氏の讒奏とは別問題である。その間に皇命あるを忘れてはならぬ。こゝに嚴然として勅命を絶對に信じ喜んで、その冤罪に服せしところ誰か勇なきと云はんや。誰か忠誠の士と云はざらんや。されば名にしおふ都府樓も遙かに瓦色をみるのみで、觀音寺の鐘聲を聞き得るのみであつたのである。この時にこそ「去年の今夜」の詩が生れ出たのである

而して此の間にも公の忠誠なる心を往來するものは、御幼少の御時より輔育し奉れる天皇の御身であつた。而して公の公的生活としての考察はかくなるも私的生活としての精神内面には必ずや離散せる子女のことであつたであらう。從來やゝもすると斯かる人間味の取扱を等閑に附しては居なかつただらうか。妻子の離散を思ふことは決して皇恩を思ひ奉らぬことではない。皇恩を思ふ人なるが故にこそ美しき人情の多分にあつたことを見逃してはならぬ。

二、藤原氏との困難なる關係にありつゝも、その職に止まつた菅公——清行の言にしたがはなかつたこと——

高山樗牛はその名著「菅公傳」に於て公の性格を論じ「そは學者にあらず、政治家にあらず、實に一個の多感なる詩人なり」と斷じ公の生涯を貫く言動事蹟をば、詩人として意味統一を結んで居る。然し本課に於てみる道眞は、政治家としてその象徴を結んでゐるとみとめられる。道眞を詩人としてみるが是か政治家としてみるが是か。かゝる吟味は教化史としての小學國史直接の方向ではない。即ちわれ等は小學國史を追攝して道眞の人格をみて行けば足りる。それが國史教育の示標に合する道である。さてかく政治家としての道眞が學者の家

から身を起して右大臣の顯職にありながら、政治に關係してゐるのは必ず災害の下らん事を慮り早く官位を辭して、その身の安全を圖れと忠告した三善清行の言は友へ對しての好意であらう。道眞素よりこの事は知つてゐる。さればこそこれまで再三再四辭表を出して自己の此の如き高位高官の心苦しさを訴へたのである。

許されないのは天皇、上皇の藤原氏一門の権力を抑壓せんとの御心であり、今一つは道眞の人格の高潔を頼母しく思召され天下の爲めに、此の者に政治を委せたいとの御思召に外ならぬ。道眞の立場に立ち、如何にするが人臣としての道か、即ち士は己を知るものゝ爲めに死す。至尊の御心を十分度してゐる公は己一身の安危を顧るべき時でない。如何なる災害も來らば來れ死して後、己まんとの決心が斷然職に止つて政務に盡瘁して聖慮に對へ奉つたのである。この献身的犠牲的精神而も和魂漢才の公にして始めてなし得るところであらう。

### 三、時平と道眞の政治的手腕

道眞は學者であり寧ろ天下經營の道を講ずるよりも詩歌文章に長じ、その政治的手腕は長所でなく保守的であつたと言はるゝも、遣唐使の廢止説を建白し或は寛平八年諸國に檢非使

を差遣し規定外の剩餘を検出し之を以て國費の不足を補はんとの議ありしに、公は三箇條の闕陥を擧げて反對し實施中止を見た如き一大識見をもち、而も和魂漢才よく支那模倣に走らんとする時に於て、日本精神に生きたる如きまさに老練圓熟學徳共に高き忠誠の士であつた而して時平は進歩主義であり而も加ふるに名門、政治の才能にも富みし人物にしてのち、醍醐帝を輔け奉つて所謂延喜の治を開いたのは此の人の功大なりと云はれてゐる。

然れども吾人は才能のみを以てその人物の偉大を決するものではない。藤原氏の系圖（六五頁）を見ると祖先の精忠に背反したる子孫は責むるも哀れな程、誠忠の失はれた非國民であることを徹底させねばならぬ。日本人の血統を受けたゞけで眞の日本人たり得ないことを悟らせねばならぬ。時平もゑらいと評し道眞もゑらいと評して灰色的な不鮮明な態度は斷然すてねばならない。殊に對象は尋常五年生の兒童であることをも考慮せねばならぬ。

#### 四、醍醐天皇と道眞流諸問題

對天皇の問題である。吾人はすでにこの問題にふれるを以てすら恐れ多く思ふのである。教科書には「道眞を天皇に讒せり、道眞之が爲めに官をおとされて」とあるからには、天皇

が讒を信ぜられたやうになり、その責任が天皇に歸せらるゝと云ふ推理が働く。我等は須らく帝國憲法の「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」を説いて聽かしめねばならぬ。政治の責任はすべて輔弼の任に歸する。時平がその責任者であり朝廷に奉仕するところの大官、皆その責を負ふべきものであることを知らしめよ。かくして公民教育は國史科に於てもその一部を分擔することが出来る。私は最後に菅原道眞失脚の眞因に就いて、史料編纂官龍肅氏の説をかりて本章難點の究明の結論とする。

#### 五、道眞失脚の眞因

要するに道眞は宇多天皇の藤原氏抑制の叡旨によつて、菅原閥を中央政界に扶植し以て藤原閥に對抗したのであつたが、傳統的の根差し強い大勢力の藤原閥に對しては尙力が不足して居つた。之に加ふるに菅原閥に應援を與へてくれるものは門戸の競争から一人もなく、宇多天皇の御信任が唯一の後援であつたに止まつた——對手方である藤原氏及び菅原氏に反感を懷いた諸他の勢力家に對しては、何等積極的行動に出ることを敢えてしなかつた。道眞は全く學者出の温厚なる人格者で政略がましい策は講じなかつた。菅原氏と云ふ大木は殆んど



無援孤立で強風の荒む廣野の只中に伸び得る限り伸びたため終に吹き折られた感がある。今少しくこの大木の周囲に防風の爲めの垣が築かれたならば、この害は被らなかつたことであらう。然し純真にして忠誠な道真にはかゝる術策を用ふる餘地は存しなかつたのである。配所にある道真の態度はよくこの間の消息を傳へて居る。

### 第六節 平氏の勃興の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

- 1、保元の亂の原因は如何に説いたらよいか
- 2、亂の結果に就いての批判は如何に取扱つたらよいか

△義朝が父爲義を殺したことに就いては義朝悪しとするかそれとも止むを得ずとするか

△建策容れられざりし勇士爲朝の行動は如何に取扱つたらよいか

これ等は保元の亂の取扱にあつて豫め見解を定めておかねばならぬ難問であらう。

#### 二、難點の究明

##### (1)、保元の亂の原因に就いて

國史をひもといて困難を感じるのは壬申の亂とこの保元の亂とであらう。前者は國史教科書に出てゐないが後者は平氏の勃興のプロセスとして是非とも觸れねばならぬ事亂である。

從來の教科書が「保元物語」を準據として説かれてあつたために皇室の御不和、藤原氏の政權爭奪、源平二氏の擡頭この三つの原因が錯綜して此の亂を起したものと觀て行つたのであつたが、今日の科學的研究によつて全く藤原氏の政權爭奪が唯一の原因となり、藤原氏の野心の爲めに皇室が巻き副へにお會ひになつたと觀て行く主副の關係に書いてある。是は事實の上からも然りであらうし、又説く上に於てもその方が日本精神を傳へるに最もよき方法であるとして編纂者の苦心の存するところが見える。試みに今回の教師用書を見ると(二三六頁)

「此の變もと藤原氏が攝關の地位を競望して兄弟牆に鬨ぎしに起り、遂には累を皇室に及ぼしたてまつり源平の武士またその渦中に投ぜられたるものにて、父子、兄弟、叔姪相分れて互に殺傷し倫常を破却し名分を蔑して實に空前の亡狀を極めたりき」



と評されて居る。故に本教材はどこまでもこの立場から説くことであり、この亂の如きところこそ大いに教師の教育史觀によつて、ぐん／＼と事件の展開をして行くべきところであらう。實に國史全系中これ程淺ましい戰亂は無かつた。黑板博士は「實に道義も倫理も廢れてその間に見るべきものなし」と評された。天子は至上至貴唯一絶對の權威である。之に對して弓を引くものは賊軍である。然しながらこの筆法を以て保元の亂に於ける上皇方を賊軍と云ふことが出來やうか。それは餘りに不穩な心地がする。後三條、白河兩帝より院政を設けられてから事實院宣は勅宣にまさる効力をもつて居たのであつた。主上と院——何れも皇室の至貴であつた。故にこのところはどこまでも、時代相を背景として批判せねばならない。主上も院も共に至貴至尊であると觀ずる當時の人らは之に對し奉り其の間、毫も差別をもうけなかつた。

保元の亂爲朝や爲義は、上皇方に赴くにあたつて賊軍になるとは夢にも思はなかつたであらうし、又義朝や清盛も賊軍を討つとは考へなかつたであらう。又主從間の情誼制裁は勅勸よりも重しと見られてゐた時代であつた。彼の古事談にある白河法皇が殺生禁斷を令せられ

たにも拘らず平忠盛の家人加藤成家が鷹を使つて殺生をしたので、檢非違使の召喚を受けた時「某は主の命によりて鳥を捕へたりもし主命を怠らば死刑に處せらるべきも、政府の罰は軽くして恐るゝに足らざれば禁をおかせるなり」(高史上卷八四頁並教師用上、一三四頁參照)と言つたが如き又保元物語にある。宇野七郎が「源氏は二人の主とることなければ宣旨なりとも如何にか御所へ赴くべき」と云つてゐる如き時代である。即ち國家精神の衰へてゐた時代であるが、しかし宇野七郎でも明瞭に官職の區別のつく時にはかくまでいはなかつたであらうと思はれる。

加藤成家も日本精神が明かであつたらばかゝる所爲はせなかつたであらう。その下に居るもの共は皆自分の仕へた方に眞心をつくすを、絶對の忠義と考へて活動したことであらう。一方は勅命をうけて征伐に向ふと言へば、一方は院宣によつて之を守るといふのである。頼山陽は「兩日天を争ひて天光なし」と言つてゐる。天子の位には父母もなく兄弟もない唯一絶對であることが我國體の旨である。されば事情の如何は別として上皇方の御敗北は國體の然らしむるところか、上皇方が爲義や爲朝の獻策容れられず勝つべき戰に敗けたのも、我が

國の神佑の然らしむる所であらうかと太田元貞は論じてゐる。教科書が「頼長は天皇の兄——おのれ關白となりて權力を得んとて上皇にすゝめて兵を擧げん」と説き、併も保元の亂を説く時に可成り懇切に當時の經濟狀態の如何を見ることが、兒童にわかる様教材排列にも意を用ひて居る。(教師用書も亦二三五頁に可成り詳細に記してゐる)故に此の點に着眼し藤原氏の經濟上(世襲財産、攝關職、殿下の渡領)の暗闘は遂に長くも累を皇室に及ぼし源平兩氏の反目となりここに保元の亂を勃發したものであると見たい。かゝる取扱は或は頼長を殺したものであり酷であるとか、史實を無視したものであるとか評があるかも知れぬ。然し我等の言ふ國史教育は直ちに以て國體教育である。事皇室の御争ひの如き史實は時に之を捨つるに吝でない。否むしろ教化的國史から見れば反面的教材であり、理想的な史實ではない。かゝる見地より教材選擇上からはむしろ捨て、ほしい一つである。

喜田博士は「國史の教育」中に「保元の亂に、後白河天皇と崇徳上皇と御兄弟にて争ひたまひしごとき如何にも御失徳のやうに見えるけれども、これ全く藤原忠通頼長兄弟の權力争ひの渦中に御巻きこまれになつたので、御痛はしいと申上げるより外なく——」とのべられ

た。而してかゝる亂を惹き起せしは之れ全く輔弼の臣の責であり、而も皇室を御利用申し上げて事を大にした臣下のものどもの不心得をこそ責むべき教材である。

(2)、此の亂に登場する人物の批判

一、爲義に就いて

結果は終に天皇方の勝利に歸し上皇は流されたまひ、清盛は叔父忠正を斬り義朝は父を弑するに至つた。後人は「人倫地を拂へり」と稱してゐる。果して道德は地を拂ひしか。戦功によつて左馬頭に任せられし義朝が父を始め弟達を斬つても、尙勝者の喜悅を胸中に浮べたであらうか。恩愛深き父に刃を加へし義朝の行爲は實に憎むべきである。だが併し彼義朝の行爲を倫理的批判する前に家傳來の重寶源太が産衣と膝丸とを敵となるべき長子に送り、夫々最後の疇着を纏はせて數子を引具して、知遇の情に酬みんとて上皇の御所に起ちし老將爲義の心中には萬腔の同情を捧げ度い。保元物語の一節にも「かゝる稀代の重寶を敵となる子の許に遣はしける親の心ぞ哀れなる」と述べて居る。實に優しき親の情である。實に爲義には古武士の面影があつた。老體その器に非ずと辭して夢を信じ又上皇の勸説にあつては、敢

へて拒めなかつた點等を考へると義理堅い老武士の思を禁じ得ぬ。あゝ爲義は藤原氏にとつては忠實な老人であつた。彼がそうした心持で子義朝を敵とせねばならぬその老人の「何のめぐり合せか敵味方にならうとは——此の上は勇ましく戦ひて祖先の名を汚すな」と勵ましたその心境を察するとき私は一掬の涙をそゝがずに居れない。

## 二、義朝の行爲

義朝を論ずる點に於ては今日普通にあらはれて居る史料の上からは、簡単に論じ難きことであらうと思ふが、普通の史料に就いて言つてみる。

(イ) 最初より父子敵味方に分れることがそも／＼の間違ひであつた。ここに義朝が考慮を以て父、兄弟を同一の味方にすると云ふことを考へねばならぬのに——うかつであつたと一つの缺點を見出す。

(ロ) 亂後、父助命の一件である——清盛が叔父忠正を殺して例を示してゐるから、餘程困難であつたに相違なきも此の點に向つて再三再四死を暗して、助命を乞はなかつたことには残された問題がある。(勿論一度は己の勳功に代へて父の助命を乞ふた——然し許されなかつた。)

つた。)

若し當時の事情が親子の至誠を以てして、百方理解と同情にすがつても許されなかつたとするならば勅命に従ふことは已むを得ぬ事情と同情せねばならぬが。

(ハ) その後の義朝の行爲を君臣の道より論ずれば自暴自棄に陥らず、忠勤を勵み父をして死後恩赦に浴せしむるの方針に出ることが人の子たる者の本領である。

義朝は此の點に於てあまりに迂濶であつた。亂暴狼藉を敢えてしてゐる。されば大日本史にも「叛臣傳」に列して居る。又親房卿は神皇正統記に「名行缺けはてにければいかでか終にその身を全くすべき。滅びぬることは天の理なり」と非難してゐる。

然し尙翻つて義朝が己の功を以て父の命乞をしたら、情狀酌量せらるべきにこの嚴命ありしは清盛の勢力の然らしむるところながら輔弼の臣藤原信西の不明に歸するものである。然し之も究極するところ信西一人を責めることも不可である。歴史精神を没却した時代の罪である。

## 三、爲朝の批判

保元の亂の花形、爲朝の一言一句は子供の血を湧かせ心を躍らせるに充分である。されどこの若武者の理を盡した建策も、必勝を期せし戦略も頼長の用ふるところとならず、却つて「若輩の私闘に於ける戦略」なりと頼長に退けられ、父爲義の謀亦衆徒に頼む心なき頼長の爲めに容れられず今は徒らに手を措て敵の來襲を待つより外なきに至つた。兄の夜討の計を知つてゐるだけに爲朝の心中は、遺瀨なかつたに違ひない。だが彼は遂に堪へ忍んだ。從容として深く期するところあり。果せるかな敵は義朝の謀によつて攻めて來た。頼長始めて自己の不明を覺り敵兵を見るに及び急に諸將の官位を進めんとしたが、爲朝一人冷然として「今日のこと戦を主とす、吾は鎮西八郎にて足れり」と、此の一語にして既に爲朝の人となりを知る事が出來やう。名利を慾せず死を怖れぬ十八才の若武者爲朝の奮戦は今更ら論するまでもあるまい。

敵將清盛父子も僅かに一人の弓勢に怖れをなして引き退き、代つて來つたのは兄義朝であつた。鎮西を從へし程の勇士氣隨氣儘の爲朝も父と兄との間に、何かの約束もあるにやと兜の星を削つて我慢した心遣ひ、然もその命をかけて戦ふその時に於て閃きしものは父子兄弟

の情であつた。又可憐といふべきではないか。若しそれ彼の末路を大島の孤島に見るとき世人が琉球にて尙生存したと傳ふるは、彼に涙する民衆が日本的英雄崇拜の一端であり國民の精神的一つの共有財産であらうからである。

#### 四、信西に就いて

保元の亂の指圖をなした黒幕的人物こそ信西であつた。顧ふに弘仁中、藤原仲成を誅せし以來朝臣を死刑せざること三百四十餘年全く皇道の御精神であり平和主義の天皇の御心、かく考ふるとき何故信西は後白河天皇に對して一の進言をせなかつたか、敵を罪するに純然たる賊軍の如し、この偏狹なる判斷冷酷なる處置は輔弼の臣のとるべきところでない。彼が平治の亂に斬られた時に世人は保元の亂の報であるといつたと云ふ。これを見ても我國民が平和愛好の念に燃えたかを知ることが出来る。されど單に信西一人のみの責めに歸することは出來ない。當時公卿の中に信西以上の人物がなかつたから斯くの如くになつたのであらう。

#### 五、清盛に就いて

内心源氏の勢力をそがんとて信西と謀りてその叔父忠正を斬る。その狡智憎むべしと雖も亂世の統一をなす人物は往々此の種の権力型——手腕政略をとる——彼も時代の兒であつた龍肅氏は清盛の一代を評して「驕る平氏久しからずして亡ぶと、後の世の鑑となつて居るその興亡の主人公は實に清盛その人であつた。保元平治の二亂に俄に頭角をあげて遂に萬乗外祖の尊貴に列つたまで春秋の移りは僅かに二十有五回、世の耳目を聳えしめたことではあるが、父祖の築き上げた家門の地歩の上に武力を背景として當時の院政に迎合したためで、運が忽ちに傾いたのは時勢と相背馳した故に外ならぬ。いはゞ清盛はよく時勢に順應したばかりで時勢を自分に都合よく開展はさせなかつたのである。」と云つて居る。かゝる一生をもつた彼清盛がまさに擡頭せんとする第一歩の保元の亂に於ける行動も、さこそと思はるゝ節があるではなからうか。

#### 六、頼長に對して

一代の才人頼長に至つては人となり、峻嚴深刻時に人之を呼びて惡左府とさへ云はれしもの學識才能人にすぐると云へども、この亂に於ける彼の行動は「策士策に溺るゝ」の好典

型と評されても證なきことだ。

#### 七、平 重 盛

この亂逆の時代に光を放つものは——特に義朝の不孝不忠に對して忠孝兩全の日本精神をあらはしたものは實に平重盛であり當代の日本人の汚名を雪ぐ紅一點はまさしく平重盛その人であつたと思ふ。

### 第七節 武家政治の起の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

- 1、武家政治の起は之を如何に説いたらよいか、否定してかゝるべきか、謳歌すべきか、止むを得ずとするかを研究しておかねばならぬ。再言すればかゝる變體政治の出現を慨嘆して呪ふべきであるか。それとも頼朝の出づることなくば天下の亂れは果して如何に成行つたかわからぬとして謳歌すべきか、或は之を以て藤原氏の責任であるとして變態政治出現の責を藤原氏に嫁すべきであるか

2、頼朝に就いては從來あまり好感をもつてゐられなかつたやうである。それは源義経との関係もあらうし其他種々の原因が錯綜して居やうけれども、この頼朝の人物行蹟を究めたならば強ちさうばかりとは考へられない。

## 二、難點の究明

### 一、武家政治の眞義

氏族制度の弊害からのがれ出る爲め一大變革としての「大化の改新」と、民衆をして倦ましめた徳川氏の政治から、潑刺とした元氣そのもの、積極性を示した明治維新の二者に比せられて、其の變革程度に於て甲たり難く乙たり難しとする「武家政治」それは武士が起つて來たから、其の政治が始まるのだと云つた様な抽象化された概念化された空虚な説明によつては何等満たされない。「武士」と云ふもの、意味理會が先づ何よりも必要である。武士は精神である。外面よりも内面なのである二本差してゐると云ふことが武士であり、陣羽織をきて槍に弓矢馬に乗つたものそれが武士であり、さうしたものが武士ではなくて「武士精神」が眞の武士そのものだ。然らば武士精神とは何か「あらゆる傳統に拘泥せず、眞に國家當面

の困難性にうちむかつてこれを打開して行くことを、己れの使命としてこれを小にしては己の住む近隣の生活者に眞によりよく生活せしめるために、援助と激勵とを與へ之を大にしては地方のため御國の爲めにそのひし／＼となやまされてゐる問題の解決の爲めに、自己並びに自己と一心同體の近親者乃至「家來」たちと全生命をさへげて、之れに盡すところのけなげなる意志、純粹にして少しもまぢり氣ない精神そのものが、實に「武士」なのである」かゝる武士精神が個人に於て表現せられたものが義家であり義経であり又頼朝である。但し頼朝に於ては同じき精神が、著しく持続性を中心要求としてうごいて來た爲めに、武士精神による合法的制度化」と云ふことが強くあらはれはしたが、その根本性に於ては頼朝のそれが決して義家や義経のそれと相矛盾するものではない。かくてこの意味に於ける「武士」によつてなされた武家政治について難點の究明を試みよう。

### (2)、武家政治の起因についての考察

これを政治的、思想的、經濟的の三面より考察してみやう。

### 一、時代相と政治的原因の考察

天皇親征といふ我國體觀の不明瞭な時代であつた。その第一原因は國史教育の不徹底な時代であつた。奈良朝から平安朝へかけての紀傳道は村上朝より全く廢れて、國體本然の姿は天日を叢雲の覆ふが如く攝關政治のためにかくされてしまつた。院政の變態的政治にもやむを得なかつた時勢の力であらう。かくて院政は藤原氏の專權を抑へ政權朝廷に歸したるも、その時はすでに藤原氏の他氏排斥と官兵の無力は、地方政治の紊亂を來して遂にあらゆる傳統を破つて、國家當面の困難性にうちむかつて之を打開せんことを己れの使命とした武士の興起を見るに至り政權は武人に歸するに至つた。

## 二、當時の自家主義の思想

當時國家主義の思想衰へて自家主義の思想盛んであつた。即ち武家の莊園を收めんとした頼朝に對して守護地頭の策を獻言し、又朝廷との間に立つて黑幕的手腕を振つた九條兼實なども、共に自家興隆の爲めであつた。大江廣元も亦然り。即ち頼朝も自家主義ならば廣元も兼實も共に自家を中心とする自家主義の中にまきこまれてゐたもので、この主義思想が當時の大勢であつて時代精神であつた。幕府の創設を見るに至つたのも亦この時代精神によつて

起つたものと言つて差支へなからう。

## 三、經濟問題から

當時莊園が非常に増加して朝廷の御收入が減じたから、自然税率も高くなり人民は是に苦しむ。不景氣の時には盜賊が横行するのは今日と雖もその通りである如く當時盜賊が蜂起した。しかし官兵が弱いから自分の莊園を護るために、自然自警團を組織し又盜賊を捉へる任にあつたのである。頼朝の守護地頭の政策はまさしく全國を公然と準莊園となしたる如きを見れば、如何に經濟的原因がこの政治の根底に横つてゐたかを知り得やう。かくて武家政治は頼朝によつて創始せられた事になるが、ここで頼朝の開きし武家政治が果して是か非かを考察せねばならなくなつた。

## 四、頼朝と武家政治

武家政治は大勢上やむを得ざりし變革であり結果より論ずるは好ましからねど、時宜に適した變革であつた。私は特に時宜の文字を使用するは——何時如何なる時代に武家政治が行はれてもよしと思ふものではない。あの時代に於てのみ許さるべきものである意味に於てか

る文字を引用するのである。世に名分上よりして王權を盗んだものは頼朝である。甚だ不都合だとするものがある。私もかゝる意味の小學國史を教へられたものであつた。併しなから武家政治を起して王權を奪つたのは頼朝なりとは早断ではなからうか。吉野朝の大忠臣北畠親房は神皇正統記に於て

「頼朝は更に一身の力にて平家の亂を平げ、二十餘年の御憤を休め奉りき、昔神武の御時に宇麻志麻見命の中洲を鎮め皇極の御宇に大織冠の蘇我氏の一門を滅して、皇家を全くせしより後には類なき程の勳功にや」

と述べて頼朝が平家を討滅して天下を平定した功績を稱へ、而してその幕府を開いた事について「頼朝高官に登り守護の職を賜ふこれ皆法皇の勅裁なり、私に盜めりと定め難し」と言ひ更に「凡そ保元平治より此方みだりがはしき頼朝といふ人もなく、泰時と云ふ者なからましかば、日本國の人民如何なりなまし。此の所以をよく知らぬ人は故なく皇威の衰へ武備の勝ちにけると思へるは誤なり」と論じた。即ち親房は朝威が衰へて人民が憐むべき状態に陥つてゐたのを救ひ、天下を泰平ならしめたのは頼朝の功であり而して鎌倉に幕府を開いた

のは當時としてはやむを得ない事であつて、然もそれは法皇の勅裁を仰いだのであるから私に盗んだのだと云ふ批難は當らないと云つて居るのである。この點については吾々も亦親房と同意見で頼朝が、武家政治の創始者である故を以て直ちに大罪人扱は出来ぬと思ふ。だがこの事たるや我國としては確に變體であつて、何時かは王政復古をさるべきものであることを忘れてはならぬ。教科書が「これ凡そ七百年の間武家の政治つゞきて、朝廷の御威光衰へたるぞ遺憾なる」と結んで居るところは、我等の味讀沈思すべき構文であらう。

#### 四、頼朝の人物に就いて

一、或る人は頼朝を目して皇室の權を奪つた不届な人物であると云ふ。しかし彼は決してかゝる人物ではなかつた。頼朝は生れながらにして勤王家であつた。彼が西海に在つた範頼に與へた手紙には、平氏は皇室を輕んじたのであるが故に遂に亡びたのである。とされば源氏はよく此の點に意を注がねばならぬといつて送つてゐる。

「八島御座、大やけ并に二位殿女房たちなど少しもあやまり、あしざまなる事なくて、向へとり申させたまふべし。かくとだにも披露せられば、二位殿などは、大やけを心しまるら



せて、向さすにおほす事もあるらん、大方は帝王の御事いまに始ぬ事なれども、木曾はやまの宮、鳥羽の四宮對奉せて冥加がつきて失にき。平家又、三條高倉對奉て、加様に失せんとする事なり。」

と云ふ手紙である。此の手紙に見える如く彼は尊王心に厚いものであつて、朝廷に御儀式があれば物を献じ天子、法皇が病氣であらせられると神社、佛閣に祈禱をなし、崩御と聞けば天下の神社、佛閣に物を献じ、狩なども差止めた。全體として言へば頼朝の時代は皇室に對して随分亂暴な考を抱いて居たものであつたことは、國史精神の衰へた自家主義の時代の特殊相として誰しも肯定せずには居れない時だつた。源平盛衰記に

「木曾は法ぢう寺殿のいくさに打ちかつて萬事思ふさまなれば、今はたゞ兵共取あつめて、やあ殿ばら今は義仲なに、なる共我心也、こく玉にならん共、院にならんとも心なるべし公卿殿上人にならんと思はん人々は所望すべし、乞によりてすべしと云ひけるこそあさましけれ。云々」

とある如く義仲などは随分亂暴なりし風に見ゆるも、頼朝には始めからそれ等の事は毫頭も

ない。寧ろ保守的な勤王の厚い人であつた。

莊園に守護地頭を置いたのは敢て頼朝に始つたのではない。頼朝の前から既に地頭と云ふものは出来て居て、領主の権利を侵害し領主の勢力は殆んど地におちてしまつてゐた。台記に藤原秀衡の事に就いて書いて居るところを見れば此の事がよくわかる。頼朝は此の傾向を見て現状に依りて権利の限界を作つたことが分る。

「水の流れるのを塞ぐより水勢を利用して堤防を築き、氾濫することをなくして水利を得るやうにすれば、洪水の慘害はないものであると等しく、歴史の流に従つて時代相應の堤防を作るのは止むを得ないことである。頼朝の將軍政治は此の堤防に過ぎないのであつた。それを以て皇室の權を偷むものと斷するは大なる誤解といはねばならぬ。」

とは山路愛山氏の頼朝開幕の論評である。

ロ、武士道の創始者として頼朝を見る。武士道と云ふものは何も頼朝に始まつたものでないことは勿論である。併し眞に武士精神を鍛錬しそれを統整して「武士道」と云ふ形式内容共に至きものとして創始したのは、頼朝であつた。この點に就いてはあまり詳述することは

紙數に都合あれば之れにて止める。

#### ハ、義經に對する頼朝の態度批判

私は頼朝の長所は長所として話しこの問題の批判をする前に、その猜疑心の深かつたことについては、二十餘年の流人生活をながめ、又義經との二十餘年の離れた生活、異母兄弟なることやその異母兄弟の間から、その時代の思想をながめ流人頼朝として、敵の監視の中に人となつた頼朝が、若し吾々であつたらどうだつたか、もつと疑ひ深かつたかも知れぬと考へてみたい。

義經は過つて兄の掟に背いた結果その憎みを招き平家討伐の苦心と大功にも報ひられず、勘氣を蒙つて海内に身を入るゝ處もなく或は雪中に吉野山を彷徨ひ、或は遠く奥羽の地に逃れ憐れにもその地に果敢ない最後を遂げたと云ふやうな悲劇の主人公だつた。然も彼の行動こそ我が民族精神の花とたゞへられるが故に、一般の同情は其の悲劇の主人公に、悲惨なる彼の生涯に集中されることになつたのであらう。故に彼の最後をおしむあまり、奥羽にて死したりとするは不満足の結果、蒙古に渡るとさへ傳へられて居るのであらう。

この同情はやがて頼朝への反感となつた。そしてかゝる同情と反感的の現象を稱して昔は「判官びいき」と言つてゐた。然しながら我等はあまりに判官びいきの爲めに、彼を憎むよりも「偉人英雄の頼朝が、兄弟さへも信じ切れなかつたといふことは憎むよりもむしろ尙あはれむべきではないか。そして弟を殺したのは頼朝としてそうするより外に仕方がなかつたかも知れないがその事は確に悪い事だ。それかと云つてその罪を憎むのあまり頼朝の善きところまで認めないと云ふことはあまりに狭量を示すものだ」と、その罪を憎んで人を憎まぬ態度で批判せしめたい。

### 第八節 後鳥羽上皇の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

承久の變の取扱に就いて

- 1、後鳥羽上皇のお企て並に北條義時、泰時のとつた態度は如何に取扱つたらよいか、これ國史教育上の重大な事件である

2、何となれば従来皇師は常に勝を制して皇威を輝かし給ふが常であり、又かくあらねばならぬのであるが、此の變のみは皇軍の御敗北に終つてをられるからである。

## 二、難點の究明

### 一、後鳥羽上皇の御意志

我が建國の精神は時に一時的に蔽はるゝことはあつても、常に力強い潮流となつて國民の思想の奥に流れてゐて時々其の波頭を現はすものである。今小學國史の教材を通觀するとき聖德太子、天智天皇、後三條天皇、後白河法皇、後鳥羽上皇、後醍醐天皇、後光明天皇、孝明天皇、明治天皇等を擧げて政權の王道的回復を志したまひし我が皇室の大理想實現のプロセスを示してゐる。

かゝる意味に於て後鳥羽上皇の御聖慮を拜察し奉るとき、單なる北條氏討伐の御目的ではなくそは實に遠大なる傳統的理想の御繼承に外ならぬと思ふのである。

然るにこの御計畫の結果は有史以來の不祥事を惹き起し、實に淺ましいとも畏多き極みであつた。

### 二、承久の變批判

この事件を説く背景として考ふべきことは當時の國民の思想特に武家階級の方面である。

一、當代は國家主義衰へて自家主義の盛ん時であつた。

二、君臣間の道德廢れて、主従間の道德である武士道が重んぜられた時代である。

三、武家興隆の時代であつて皇威の振はざる世であつた。源氏政府は實朝に至つて滅びたりと雖も鎌倉幕府は北條の執權政治によつて益々武家の力の鞏固さを加へてゐた。

四、一般に無學にして「院宣を読み得るものは藤田三郎唯一人なり」とある如き時代である。

之を要するに「國民精神の陶冶」があまりに缺けて居た時代であり、國民の皇室に對し奉る心のあまりに無自覺な時代であつた。この點聖德太子の條に於て述べし如く「先づ以て民心の改造」が必要であつた。然るに太子以來のこの懸案は一千年も續いて居たのであつたが國民全般に普及するには、非常なる困難なことであつた。何時の世にも國民思想の陶冶改造程むつかしいことはない。

このことに對しては古來幾多の議論が行はれた。親房は神皇正統記に於て

「頼朝勳功は昔より類なき程なれども偏に天下を掌にせしかば、君として安からず思召しけるも理なり、況や其の蹤絶へて後室尼、陪臣の義時が世になりぬれば、彼の蹤を削りて御心の儘にせらるべしと云ふも一應の請なきにあらず、然れども白河鳥羽の御代の比より政道の古き姿漸々衰へ、後白河の御時兵革起りて姦臣世を亂る。天下の民殆ど塗炭に落ちにき。頼朝一臂を揮つて其亂を平げたり。王室は古きに回るまでなかりしかど九重の塵も收り萬民の肩も休まりぬ。上下堵を安じ東より西より其德に服せしかば頼朝なくなりても叛く者ありとは聞えず、是に優る程の徳政なくして如何で容易く覆さるべき」と述べ更に進んで北條氏は未だ是といふ缺點があるのではないから之を御追討になつたのは天の許さないことである。

と論じ時期が尙早かつた、兵を御起しになるべき時でなかつたと論じてゐる。抑も神皇正統記は後村上天皇に向つて帝王の道を説いたもので帝王たるものは、此の心得がなくてはならぬといふ所謂帝王論を書いたものであるから此の議論でよいが、天の許さないこと、即ち天道觀

念を最高審判としてゐる。しかし此の論を以て吾々は兒童に接することは出来ないと思ふ。

大日本史の論は後鳥羽帝の贊のところに「人君の位に即くは必ず其初を正しくしなければならぬ、初めを正しくするのはその終りを正しくする所以である。」と云ふ論より進んで後鳥羽の踐祚は一時の權に出て神器を繼承してゐられない。萬世の法とすべきではない。義時を誅せられんとしたるは洵に有爲の君である。しかし時勢を詳にせず畿内の僅かなる兵を以て關東の堅衛を防がんとせられたのは間違である。況や將に人なく兵に規律なく、遂に未曾有の不祥事を來した是皆其初を正さざる所以である」と云ふ風に論じてゐる。

頼山陽も亦親房の論を進めてゐるのである。

さてかく考察するとき我等は頗るこの亂の結果よりして、此の問題の至難さを痛感する。如何にして説くかゞこゝに切實な問題とならう。

即ち出来るだけ時代相を描き具體化してこの失敗を説き、更に進んで泰時義時の無道を批判する態度が望ましい。

「大日本帝國は萬世一系の天皇の統治したまふ國である。斯くあらねばならぬ國である。それ

は何によつて定まるか——神勅——併し長き歴史の間には變體のことも行はれたのは如何とも致し難いことである。平安時代より藤原氏が權を恣にし、天下の政治は亂れ君臣の間を阻隔し奉り斯くして武士と云ふものが現れて來たために、君臣の關係と云ふものは、主家と家臣との間に移り行き、保元平治の戦以後、武力を以て天下を治めなければならぬ時代となつた。所謂軍政政治を行はねばならなくなつた。斯くて武門政治を開いたのは源頼朝である此の頼朝の政治によつて、平安時代の亂れたらしなき我が日本は一變して國內統一され威令が行はれることになつた。源氏は三代にして北條氏の爲めに滅ぼされたが、鎌倉幕府は決して滅びない。武家政治は却つて執權政治となつて鞏固になつた。

昔は天皇の御命令は絶対無限のものと考へてゐたが、此の頃に至つて天皇の御命令以上に「天道の命令」といふものに絶対の權威を認めるやうになつて來た。

承久の變に於ける義時の訓令にも、天下の爲めである、天道に任じて合戦せよと云ふことがある。

又政子が頼朝の功を説いて諸將の歸趨を問ふた時も、諸將は頼朝の恩義に感憤して進んで

朝敵になるといふ時代である。承久の變に十九萬の賊軍中院宜を読み得るものは、藤田三郎唯一人なりと云はれた程無學の人の多かつた時代である。殊に平安時代に國史の教育が廢せられて以來大義名分の思想は全く廢れ、武士にして主家の恩義は知つても、天皇の御恩の貴きを知る者はなかつたのである。而して時代は尙暫く武門政治を必要として居たので、畏多いことながら後鳥羽上皇の御企は未だ其の時機ではなかつたのである。天皇は絶対至貴の御方にして其の天皇を聖明の君とし奉るも一に輔弼の任にある臣下の責である。當時、時勢を上皇に申し上げる侃々諤々の臣下のなかつたことは實に遺憾なことである。

さて義時泰時の行爲を如何に見るか

義時の無道

總大將泰時の「若し乘輿親征し給は、如何にすべき」の間に對して沈思久しくして曰ふ、「善問哉や、若し乘輿親征し給は、胄をぬぎ弓を弛め、身をまかせ奉るべし、諸將兵を率ゐて來りなば命をすて、千人が一人になるまで戦ふべし」と命じたが、遂に軍を進め京都に入

りては、勢の赴くところ大河の流るゝ如く、遂に三上皇を遠島へ流し奉つた如き大不忠を働いた、その罪は萬死をも容れない。

而して義時にしてかくの如き言あらば如何で三上皇をかゝる遠地に遷し奉つたか、君の馬前に胄を脱ぎ伏奉る一念あらば斯る不忠はあるまじきに、尊王の意もこれまでに至れば、全く假面であつた。而も知つて行はざるは知らずして行はざるより罪大なるを思はねばならぬ。されば教科書にも「天皇の御心にそむいて、みだりに兵を擧げて京都をさはがししかも天皇を廢立申したり、三上皇を遠い島々におうつし申したりしたことは古今に例のない大事變で義時の不忠不義、洵にくみてもあまりありといふべきである」と評してゐる、而してかくならしめたのは時代の罪であつた。殊に彼の自家主義に加ふるに、宋學の影響亦大なるものである。當時の禪宗は特に武人に喜ばれ武士の思想の中心であつた、故に彼義時も最初は決してかくの如き暴逆の行爲は豫期せずとも遂に勢力の赴くところ、白刃一閃のその如く敢へて上皇の御諫も聞き入れずしてかくなせしものであらう。泰時の不徹底も亦然りといへやう。

## 泰時の批判

彼は後半生に於て善政をしいた恐らく執權中の執權であらうが、父の擧に對して「普天の下王土に非ざるはなし、今王命に抗するは臣子の道ではない。よろしく闕下に到つて申開きをなし天威尙霽れずんば、擧族刑に就くとも何の憾もない。若し御赦免を蒙つたならば身も山林に晦まして餘生を送つたが宜い。」と云つたが義時は「素より己一人の爲めに謀るに非ず天下の憂に代つて憂ふるのである。我は敢て官闕を冒さんとするに非ず國をあやまる佞幸を除かんとするのである」と答へたといふ。けれども是は泰時に忠の精神あり義時に幾分日本的の心掛があつたと云ふ證據に引くのであるが、しかし三上皇を選し仲恭天皇を廢し奉つたといふことに對してそれを諫めおほせなかつた泰時も亦人臣の道でない。彼も亦時代の兒であつた。

更に私は平重盛と泰時と共に無道の父をもつものとして比較してみる。

重盛はとも角、在世中は父をして逆臣たらしめなかつた。然るに彼泰時は之を諫め盡くさなかつたではないか。眞に大義を重んじたならば、三上皇を都に迎へ奉り以て公武の融和位考へ得たであらう。然るに彼が敢てこの擧に出で得なかつたのを見ると泰時も亦義時の無

道と五十歩百歩の差、自家の安泰の理想の下に私的なる彼の民政に於ける功績で以て此の時の罪を償ひ得たと論ずるものあれば、そはあまりに皮相なる見解と言はざるを得ない。

### 第九節 北條時宗の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

- 1、弘安の役の勝因を如何に見るか
- 2、神風を如何に取扱ふかと云ふことが問題である。即ち之を天佑として信仰的に扱ふか、それとも合理的に季節の問題として扱ふか  
之が本章の至難な問題であらう。

#### 二、難點の究明

この未曾有の國難に對して破天荒の勝利を得た原因は種々あらうが、要するに次の五點に歸着せん。

- 一、天皇上皇の御懿徳は申すまでもない。

二、時宗の勇武果斷と諸將を統帥したる雄略であつた。若し位置を變へて此の國難が藤原氏攝關の時代にあつたとしたらどうなつたであらうか、時宗が斷乎と、彼の威嚇を卻けたるは時宗に深い自信があつたのであらう。縱令勝算はなくとも、彼の驕傲無禮に屈することの出来ないのが鎌倉男兒の本領であり日本男子の精神である。

三、頼朝時代より養はれ來つた武士的精神を發揮して、將士のよく奮闘努力したことは推賞しなければならぬ。彼は軍器に於て軍船に於て、戰術に於て我國の如き幼稚なものではなかつた。しかし歸するところは精神であつて、草野二郎や河野通有の如き何れも軍器兵器戰術の上に超越した行動をなしてゐるのである。

四、我が舉國一致の精神である。彼の井芹西向（肥後の住人八十五歳で歩行不自由の爲め六十五歳の嫡子長秀三十八歳の經秀を、從軍せしむと九州探題北條實政に申出た）の如き、又眞阿と云ふ尼（自分の子と娘の婿とを夜を日に繼いで參上せしめると申出た）の如きは當時の國民の誰もが抱く舉國一致君國を護る念の強きを物語るものである。而して神官は神社に僧侶は佛寺に何れも身を以て祈願を籠めた。かゝる神國日本精神こそ勝因の大なるもの

であらう。

五、時恰も暴風襲來の時期とは言ひながら文永と言ひ弘安と云ひ二回までも、暴風雨が起つて皇軍を援けたと云ふことは是全く天佑と言はねばならぬ。

以上五つの點を擧げて勝因としたが、本課の題目が「北條時宗」とあるからには時宗その人に就いて多少研究しておかねばなるまいし、更に神風を如何に見るかを今少し探究してみねばならない。

#### 一、北條時宗について

本課が時宗を標題として居ることによつても明なるごとく、彼は實に本題の主役花形である。勿論時宗個人の働のみを見るのは國史の取扱ではないが、私は個人史觀と大衆史觀について特に考へて居ることは——この場合に於てあまりに民衆の力を強調するとき、時宗の偉大さは大衆の中に没してしまふと思ふ。大體に於て私は低學年は個人史觀に立つべきで而も兒童各自身をして、時宗になつてその時の時宗の思想感情に觸れてみる、そして時宗だつたらとその責任を反省せしめることにより私の云ふ意志の陶冶にまで導かねばならぬ。私は大

體に於て國民教育に於ける國史教授はたとひ、高學年にても大衆史觀より個人史觀に立ちて個人の努力向上といふこと所謂立志といふことに向はしめると云ふことが緊要であると思ふ教育學者は近來立志の教育（言葉はおかしいが）を功利的だと稱して、非難せらるゝやうだが、——道德的人格の完成に向つて邁進し社會國家の爲めに奉仕し、文化の創造に貢獻せんとする意氣込を抱持せしめるやうにするのが立志の教育である。

かゝる意味から政治上の偉人、文化史上の偉人の事蹟について成るべく具體的な知識を授け敬慕の念を抱かしめることが望ましい。

さて時宗は如何なる人物であり如何なる働きをなしたか。——彼は文永元年十五歳にして執權となり、十九歳にして元使をしりぞけて種々畫策し（時に時宗年僅かに十九歳年少の故を以て補佐役の政村等があつたとはいへ、その畫策はむしろ時宗自らに成つたものと見るべきであらうとの意が、黑板博士の國史の研究にも見へてゐるが事實左様あつたらうし、こゝによし異論があらうとも國史教育として當然かく扱ふべきであらう。）文永の役には二十四歳此の時に當つて男盛りの三十二歳である。はやくから大覺禪師、佛光禪師等について參禪し心



膽をねる一方これ等の及び道隆蘭溪などによつて、自らも支那蒙古の事情に詳しかつたのである（紀事本末稿本に於て青山延光所説——時宗は未だ必ずしも其の強弱を料らず、但だ義勇天性に出で——とあれど私は謬見であると思ふ）——又田口鼎軒博士は「元寇の難局打開は北條政村（義時の第四子）にあり」と云はれ、又同書に忽必烈以爲らく是の役（文永役）に克たざるは兵の多からざるに由ると、故に弘安の役には彼仍ち大舉して來寇し勢甚だ張皇す、然れども衆心一ならず、愈多ければ愈弱し云々——は元兵の状態を推す遠見であらう。何となれば元來元の遠征については忽必烈にこの目的があつた。その一は彼の功名心により、その一は彼が東伐西攻に於ける降將の處置のためであつたから當然將士の不一致を來してゐたと見るべきである。

とに角時宗は武力の中樞たる鎌倉に於ける實權の長として、自ら武あり智あり膽あり年あり、未曾有の國難に望むその働き期してみるべきであつた。即ち鎮西に探題をおき細密なる國內要所の兵備をなさしめ更に驚くべきは却つて外征の計畫をもなし、遂にその出征の令を下すまでに至つたことである。（これに就いては三浦周行博士によつて「鎌倉時代の外征計

畫」なる研究あり、しかし尙彼は一遍武の人のみではなかつた。八方畫策の背後には神佛を忘れなかつた。而してこの願文に現はれるところの私事を滅却して、専ら大義に就いたところ全くその昔和氣清麻呂、菅原道真に髣髴たるものがあつた。これ等のよつてくるところは時宗の細心、豪勇忠烈そのものに根ざすものであつて、一々時宗の全人格の表現である。要するに彼は年少氣鋭しかも細心要路にあたる司として武士として、國民としての身命を賭して事にあたりこの一大國難をはらむ祖國をして、泰山の安きにあらしめた大巨人大偉人である。従つて極めて狡猾なる手段によつて武家政治を私したる北條氏も、こゝに至つては彼を偉人として取扱ふべきは當然であつて、教科書二九頁に「かたじけなくも明治天皇は時宗の大功をお褒めになつて従一位をお贈りになつた」とあるも、これを明かにするものであると思ふ。頼山陽が「相模太郎膽如甕」と嘆ぜし如く、吾人又溜飲三斗を下るの快感を味ひ古來剛快男子、鎌倉武士の典型として萬人ひとしく稱讃措く能はざるものである。

## 二、神風に就いて

上述の如く皇室に於かせられても北條氏及將士に於ても、又神官僧侶一般民衆がいやしく

も用に立ちうるかぎり皆兵の實をあげてこの難に當つたのであるが、捷報一度傳はるや神明の加護なりと云つた。私はこの神明の加護なりと云ふ信念は如何にして生れたか少くもこの役に於て、如何に神の力てふ結論を生ましめたかを追究することによつて、神風を説明することにする。

「記事本末稿本」に於て青山延光所説——弘安の捷は風濤の助けによる。人力に非ざるなりと是然らず、天子は怒を上、震ひ將士は厲を下に奮ひ使來れば即ち斬り兵來れば則ちうつ、人事を前に盡して天理後に應ず、風濤の助け由て來るなり」と、實に明論ではないか。本章一一九頁に「上下が心を合せて元寇をうちはらつた」とあるによつて、そのすべてが明示されるのである。

即ちこの困難に勝を得たのは一旦緩急に際しては學國一致、義勇奉公、盡忠の賜であつてこの意味に於ても、龜山上皇宇多天皇は救世の英主であらせられたとし、北條氏河野菊池氏其他の民衆皆大忠臣として取扱はるべきである。若しこの役をして全く神風のみの力とするならば天皇の御軫念、時宗の畫策、河野菊池の活動は何物でもなくたゞ「骨折り損のくたび

れもうけ」となるではないか。

併し私はこの偶然の大風をしてそのまゝそれと擧り去らんとするものではない。

龜山上皇、後宇多天皇が御自らを無にしたまひて神に祈り給ふとき（こゝに注意すべきは神に祈る、すがると云ふことを神社佛閣に坐した時のみと考ふべからざること、かく考ふるのは、所謂偶像崇拜の立場を脱し得ないのである。よしまた神社佛閣に詣でられなくても誠一心にて自我のない世界は神の國である）そこに龜山上皇、後宇多天皇は在さずその御願裡にひらめくものは神の御聲である。

時宗が一切を空にして國家の爲畫策するところ、それが直ちに神の御國であり神の御聲である。即ち時宗の一舉一動みな神の御旨であつたのである。

河野菊池の一進一退神の御指圖であつたのである。士民百姓の築臺の一鐵一鋤も神の働きに外ならぬ。

かくてすべてが自己を空にしてひたすら御國のために凝つて一團になつた。その姿こそすでに神の姿ではないか。かくして最後の大風も人事を盡し給へたる時、神の加護——神風と

して招來されたものではなからうか。邪は正に勝たず、上下協力一心國家の爲めにするそのすべてが人事を超越してのことであつた。

畢竟「誠ハ天ノ道ナリ」であり「之ヲ誠ニスルハ人ノ道ナリ」である。

人皆の心の誠つくしての

後こそ吹かめ伊勢の神風

とあるもこの意を論じたまひしものであらう。

この考へを以てしてこそ龜山上皇の御祈願も、國民一般の働きにも、時宗のめざましき活動にも而して最後の大風にも相通する意味を見出すことが出来て兩立を期し得るである。

さもなくば時宗を生さんとして上皇の御祈願を愚人の迷ひ事と化せしめ、大風をしてこの一戦に於ける一役を負はしめることが出来ず、専ら神風を主張しては一切の愛國的活動を消滅し去るであらう。

自然科学的に季節的颶風であつた、この大風こそ我等の僥倖なりと切り碎くことが如何ばかり國史教育の任を完ふするか。

まさしく上下一致緊張のものすごさそこには神佛に祈り、神佛に誓ひつゝ結果の豫想もつかないあの場面が一夜のあらしによつて、最後の解決をなしたのあつた。敵方にとつては、のろひの風とも思はれたであらうが、全く神の風とも思はれたことであらうことを了解せしめねばならぬ。

永仁元年伊勢の風社を風宮となして元寇の平げを賽するとあるは、これ又雄辯にこの間の消息を物語るものであらう。要するにこの役は君民一體の愛國運動として最も強烈なる日本精神のあらはれた事件であつて、又之と關聯して敬神崇祖尊王の美德が多くの具體的實例を以てあらはれた事件であり、こゝに本課の教育的價值があるのである。

尙最後に蛇足ではあるが時宗の決意に對して、徒らに戦を好みしものと一部の人の評に對して私見を述べて本節の結論とす。時宗は始めから自ら好んで戦端を開かんとしたのではなく、専ら國家の安穩を期し建長寺住持蘭谿道隆を請じて國家安穩を祈り願文を捧げてゐる。その願文は時宗の衷心を披瀝してゐるものである。

專祈弟子時宗、永扶帝祚久護宗乘不施一箭而四海安和不露一鋒而群魔頓息、

德仁普利、壽福彌堅乘憲短而燭昏衢、剖慈心而賑危乏諸天匡護衆聖密扶、二六時中  
祥駢集次 翼山門肅靜、中外安寧檀信歸崇

即ち時宗が平素自ら期してゐる所は永く帝祚を扶け久しく宗乗を守り、中外を安寧に保つことであつた。併しながら事實内外の形勢は益々切迫して遂に兵を鼓舞して、乾坤一擲の大激戦を決行したのであつたことを明言したい。

### 第十節 楠木正成の章の難點と充明

#### 一、本章の難點

建武中興の取扱ひ

建武の中興の紊れた原因を如何に取扱ふかゝ問題である。政權が久しく武家に歸して居たのを朝廷に復歸したことは本に歸つて來たのである。然るにそれが再び紊れる至つた原因を如何に取扱ふかゝ問題の中心となるのである。而も世に論ぜらるゝ恩賞問題を如何に説くか。尙至難な問題は護良親王の讒奏のことである。

#### 二、難點の究明

建武中興は後鳥羽天皇の御遺志が徹底したものである。洵に慶賀すべきことであつたが、間もなく奸雄尊氏のために再び亂れることになつたことは實に残念なことであつた。此の取扱に就いては可成り問題が多い。

教科書の批判をしらべてみると

尋常史「武士の中には長い間幕府の政治になれてゐたため、君臣の大義を忘れ、朝廷の賞罰に不平をもち、かへつて武家政治を喜ぶものが少くなかつた。足利尊氏はかねて將軍となりたいと望んでゐたのでこれ等不平の武士をひそかに、手なづけてゐた」

高等史「天皇はかくまで御熱心に、中興の政治に勵ませられたが、

○政務にあづかる朝臣は、久しく政治に遠ざかつてゐたので、容易にこれを決することが出来なかつた。それで戦後の訴は日まに積り、賞罰もまた不公平なことが多かつたので、不平の聲がやうやく起つてきた。

○これから武人のうちでも、大義にくらいものは、中興の政治を喜ばず、かへつて武家政治の昔を慕ふやうになつたのに、

○朝臣はさほどの功勞のないものまでも朝恩にほこつて、にはかに奢をきはめ武人を輕んじたので、

○公武が互に、にくみあつて天下は再び亂れようとする形勢となつた。

尋常史が武士の大義に暗きこと、賞罰に不平をいだくことより論じ尊氏の野心を動火線と見てゐるに對し

高 史は朝臣の政務不慣がやがて論功の不公平を來し、而して武人の大義に暗きため再び武家政治を望みしことより論じて更に公武のあつれきをその動火線となして居る尋常科兒童にはこの態度が望ましく高等科兒童に對しては、かくまでつきつめて説くべきだが吾等はこれに對して如何なる用意と識見が必要か。

一、當時新政の目標は何であつたか——

即ち醍醐天皇の延喜、村上天皇の天曆が後醍醐天皇の御理想であつた。即ち醍醐天皇は時平を左大臣とし道眞を右大臣として、特に太政大臣や關白を御置きにならなかつた如く、

後醍醐天皇にも二條道平を左大臣、近衛經忠を右大臣にし特に太政大臣や關白を設けられず御親政遊ばされる御精神であつた。又後醍醐天皇は遺命して諡を後醍醐と稱せしめられ又御子後村上天皇が後村上天皇と申し上げた點から言つて延喜、天曆を理想と遊ばされたことがわかるのである。更にこの御政治を稱して「公家一統の政治」を以て御理想であると古來云つて居るが、この眞の意味は何かと云ふ點から近頃、中村直勝氏はその著「北畠親房」の中に説かれてゐるが、從來とは異つた説であり吾々の以て参考とすべき論評であらう。

「曰く朝臣のみの政治であつて武士の勢力を其の朝廷から排除せらるゝものである。曰く鎌倉幕府を倒滅して京都側のみで天下を統一せんとするものであると。而してそれは何れも當つては居らうけれども、亦一も正鵠を得たとは思はれない——。」

との前提から更に

「單に京都側の手で政治を運行すると云ふことならば、それは政權爭奪史の一種に過ぎなく吾人が特に筆勢に力を籠めて史乘に力説する必要は薄いと云はねばならぬ——」  
そのことは公家なる詞の内容を検討することによつて諒解が出來やう。

公家なる言葉が如何なる内容をもつか。それは「公家」を以て天皇それ御自身の意味に使はれる事が平安朝以来の文書、文献に多くの例證を求め得る事である。南北朝の時代のものでも「公家上皇」とあつて上皇よりも上位のもの、即ち天皇の意味に用ゐられてゐる。或は公家なる詞には天皇を意味する内容の方が本来明であり古いのであるまいか。それは天皇を指す詞として「公家」が——恰も「御門」が天皇を指すやうに——用ゐられたのではない。國語の「おほやけ」に漢字の「公家」を當て、天皇の文字に代用したのだらうと云ふ考へから誘導さるゝ——。

それによれば「公家一統の政治」とは天皇親政といふ事に外ならない事になり、公家即ち天皇のみが政權を左右することとなるならば、攝政關白の政治も、上皇の政治もまた武家政治も拒否さるべきである。——と解するならば後醍醐天皇が夙に後宇多院の院政を停止せられ北條幕府を倒潰されたことも、攝關職の廢止もすべて解決がつく筈である。天皇の御理想は單に攝關政治の廢止にあつたのでもなく、單に北條氏の倒幕でもなくて更に院政の如き變態政治をも根絶し、我國本來の政體である天皇親政に復えすべしと云ふにあつた

のである。——天皇は武士と政權の爭奪をなされたのではない。政權は天皇のものであるそれをとり戻されたにすぎない。武士幕府と同一の平面に立つて争ひたまふたのではない——常に一段の高所から命令し給ふたのである。北條氏がそれに應じないから兵力を以てその目的を達したまはんとし給ふたのである。

北條氏や之を大にしては持明院統の人々の如く便宜主義、御都合主義ではない。現實の情態——しかも權道的な變態的な——を肯定せられたのではなく、嚴然たる御理想の許に其の實現を期したまふたのである。その一事こそは後醍醐天皇の元弘建武中興をして永遠ならしめる唯一無二の理由であり、御理想の實現に向つての努力であると云ふ事が、天皇をして列聖中の首班におかしめる所以である。」

實に清新にして穩健なる説と言ふべく再讀をすゝめ度し。

二、思想問題より當時を論ずれば

當時は大義名分に明かでなかつたことは、彼の梅松論に「重賞の下に勇士あり」の言葉の如く、多くは楠木正成の如き純忠至誠の士は少かつた。即ち國體觀念を會得して行動した人

は少くも多くの報酬を得んが爲めに活動した人のみであつて、名分の亂れてゐることは太平記に「持明院の方程御仕合せな方はない。戦の一度もし給はずして將軍より天子の位を御貰ひになつたなどと田舎人等が語りつたへた」と書いてあるのを見ても、當時國民の思想が如何に大義に暗かりしかを證するものである。

三、次は論功行賞に對する不平である

前にも述べた如く重賞の下に勇士ありの時代であるから、何れも多きを得んとした時代である。親房は神皇正統記に於て「凡そ國土に生れて忠を致し命を捨るは人臣の道なり、必ず之を以て身の功名と思ふべからず」と言つて人臣の道を説いてゐるが、親房の如き精神をもつものは實に曉星もたゞならざる有様であつた。又重賞を得んことを望んだに對して「若しも一國宛を望まば日本は六十六國故六十六人しか與へられず、他の者は皆不満足である。又日本は五百九十四郡であるから一郡宛つ與へれば、五百九十四人は喜んでも千萬人を愛することは出来ない。北條氏の領地には限りがあるから満足には出来ない」といふやうなことを述べてゐる。然し皆多きを望んで自ら公然と申出ることが出来なかつたので、内奏、請託が

行はれて是が公平に行はれない所から、遂に藤原藤房が遁世するといふ有様となつたのである。藤房の行爲は「三度諫めてきかされば即ち去る」と云ふ支那のやり方であつて、正成、親房の如く最後まで君國に盡したる日本精神よりみれば徑庭があると思ふ。

世に尊氏、義貞、正成、長年の順に重賞ありと云ふを問題とするが、この間に如何なる事情があつたにせよ、國史教育と云ふ上から此の問題は、どこまでも、天皇輔弼の任に歸すべきものであり之を今日の言葉で云へば、責任内閣と云ふものが無かつたからではなからうか此の點から云つても今日輔弼の任にある内閣の諸公が、あくまで責任を帯びて天皇に罪を嫁さないと云ふ今日の立憲政治はまさしく日本精神からいつて大切な政體である。併しながら論功行賞問題に於て兒童は足利尊氏の重賞を疑ふであらうが、これについて公卿のうちに恩賞方があつて、天皇の下において論功を行つたことを話しそれが不公平であつたのはこの人々の罪であり、天皇の御罪ではないことを説かねばならぬ。この場合更に追究をすれば、私は次の如く之を意味づけんとするものである。

之を領地の配置上から考へると次の如くなつてくる即ち中興當時の領地の配置をみるので

ある。

○尊氏——武藏、常陸、下總

○直義——遠江

○義貞——上總、播磨……尊氏の西國への手を切らしめんため。

尊氏は出雲地方に勢力あり。

○義顯——越後……北陸の備

○脇屋義助——駿河、足利直氏への備

○長年——因播、伯耆……山陰の備

○正成——攝津、河内（これは太平記に傳へてゐるところ、梅松論には河内和泉の守護とあり大日本史には攝、河、泉三ヶ國とある）攝、河は京都の糧道

○親房——伊勢……西國と東國との連絡地

○顯家——陸奥……奥羽の備と尊氏のけんせい

右の配置を圖示すると次の如くなる。

即ち配置上より京都を中心とする第一圈内には勤王の武將をおき、尊氏、直義を遠國に、而してそれ等の者に備へるべく尊氏の近國に北畠氏が（少し後ではあるが）直義には脇屋義助後に宗良親王を派された等、大いに意を用ひられしことを知り更に正成の所領たる堺、親房の伊勢國大湊はその當時の要港にして最も重要は位置を占めることにより考へても忠臣が地位に於ても決して不公平な賞をうけたのではないことが

陸奥

陸奥

上總

河内

遠江

後越

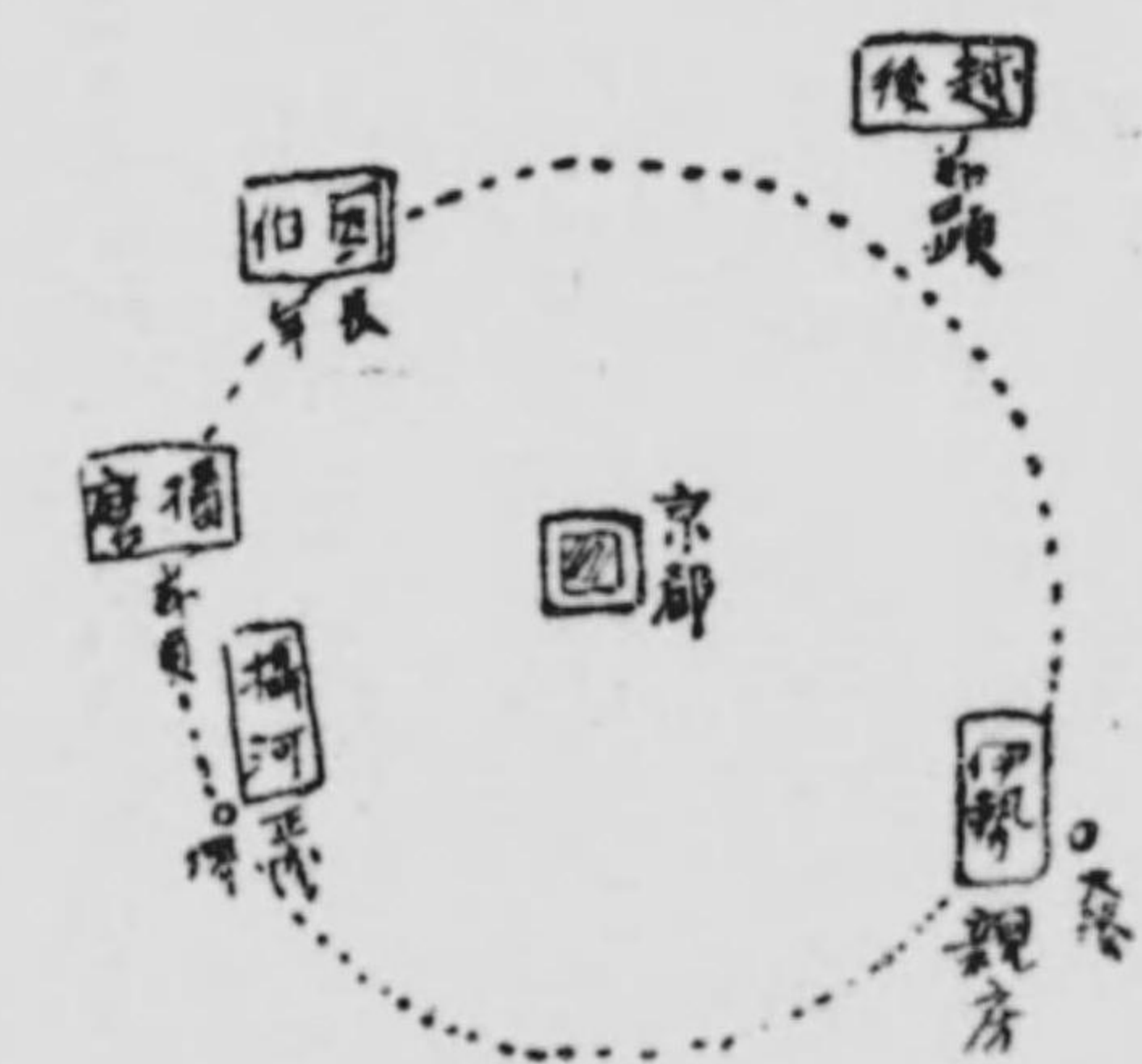
播磨

伊勢

京都

河内

播磨



も似てゐておもしろい。かくて、我々はいよく後醍醐天皇の御深慮を拜察し奉ることが出来得る。但し、一般には論功の不公平があつたが之は前に述べし恩賞方の罪であり、補弼者の責任として行かねばならぬと思ふ。



尙私の常に警戒するところは、「物質的恩賞」をながめすぎて、正成も結局一俗人とみ誤りやすいそのことである。むしろ物質的なものが恩賞の最大価値を決するものではなくさうした奥に精神的な形なきも、形あるもの以上のものが絶対者として存することを忘れてはならない。日本人の經濟觀はかうなくてはならない。物質的なものゝみで、どこかに空虚を感じるのが我々の心の叫びである。

正成が天皇隱岐より還幸の砌、須磨附近で迎へ奉つた時「汝の忠誠を嘉するぞ、朕の今日あるは、汝の力によること多し、今より前驅して京都に向へ」との有りがたき御詔を拜したことは正成にとつては、形なきも、形あるもの以上の重賞であつたのだ、この時、春よみかへる京都へ、はやる愛馬のたづなを引きしめて前驅申上げた姿が二重橋外の銅像であるといふことだ——と説いてゐる。私はこのところを力説して、彼等に對して疑問を解くべき秘鍵であると信ずる。

四、最も大きなことは公武の軋轢であつた。何れも當時の人々は自家主義であつて公家は

平安朝を理想とし武家政治が倒れて天皇の御親政となつたのであるから、是からは公家の世の中だ自らの羽振りをよくせんと考へた。一方武家は北條氏を倒滅したのは武士の力なりとて其の恩賞を得んことを欲したのである。而して當時公家の頭領は護良親王であらせられ、武家の頭領は足利尊氏であつた。尊氏は自ら北條氏に代つて源氏の政府を思立つてゐたのである。源氏滅びて北條氏が起つたその北條氏は平氏である。——足利氏は關東に於て北條氏に次ぐ名門であつた。だから自ら武家政治を起すことを念願としてゐたのでありこれは足利氏累代の傳統的精神であつた。

此の點は彼が篠村八幡宮に奉つた願文に依つてもその精神が明かに見えてゐる。而して天皇は尊氏の野心を看破されてゐたから公家方なる護良親王を征夷大將軍とされて、尊氏には之を與へなかつた。當時各地に親王を配され何れも一種の獨立國があつたので、天下を統一せられたと云ふものゝ徹底的には行かなかつた。而も公卿は政治に不慣れのため訴訟は日に山積し恩賞も亦思ふ様に行かない。かくて公武の軋轢が遂に尊氏に依つて導火された。彼の明治維新が思想方面より段々に闡明せられて、將軍も大名も乃至は武士、町人に至るまで天

皇が實權をにぎり給ふことが至當と考へたのであるが、建武中興は未だ思想方面から何等開拓が行はれず、事が早く破れた原因となつた。前記引用せし中村直勝氏は「天皇親政の實現——公家一統への政治——それは思索的には肯定さるべきも歴史的考察に於ては——物の進歩發展する過程の上から見てはまだその時機ではないと云へやう」と評された。當時の民衆は北條氏幕府の對御家人政策を誤り社會的信賴を失ひ社會經濟組織をして行きつまらしめた事は認められた。それ故一般民衆は北條氏幕府を倒すことは要求してゐたに相違ない。しかし北條氏幕府倒壊要求は同時に天皇親征出現の要求だと云へぬ。北條氏幕府を倒した後は寧ろそれに代る何人かが武家幕府を樹立していくべきだったのであつた。我が國の本體が天皇親政であるべきだといふ理由を當時の民衆が知らう筈はなかつた。それ迄に政治的知識が進歩して居つたとは思はれない。

だから教科書にも「かへつて武家の政治を喜ぶものが少くなかつた」としてゐる。

併しその時勢を洞察されなかつたところに天皇の御不明があるのではなく、すべての罪は輔弼の臣の責に歸すべきものであらうか。吾人はかゝる時勢を洞察され盡して居られたが故

に、むしろ積極的に北條氏の人望地におちたる時に——止むにやまれぬ御心——それはまさしく、皇室の理想實現てふ大理想のもとに斷行なされし天皇の御偉大さを痛感するものである。

#### 五、護良親王の讒奏問題

尋史上卷一三二頁には「かへつて尊氏に讒言せられ、これが爲に鎌倉に送られておしこめられたまうた」とあり。

高史上卷一三六頁には「まづ威望の高い護良親王と、義貞とをしりぞけんとし……護良親王は早くも尊氏の野心を見ぬかれ、尊氏を除かうとおはかりになつたが、かへつてその讒言にあつて、鎌倉に幽せられたまうた」とある。この構文をこのまゝみれば、恐れ多いことながら後醍醐天皇が尊氏の言を信じたまふて中興の業に最大の功ありし親王が東下幽閉せらるゝことになるかと考へられるのである。

世には尊氏を天皇が御過信の結果中興政治が崩れたと説き、甚だしきは天皇と親王との間に親子としての争ひがあり、殊に宮中の一婦人をめぐる問題だとさへ論ずる學者があつたが

まことに俗説も甚だしい。先づ親王に對する天皇の御愛撫と御信任とを史的事實によつて探つてみよう。

親王は後醍醐天皇の第一皇子だと平泉博士は言はれてゐる（小學國史教科書では系圖上では第二皇子となつてゐる）——然るに文保二年二月二十六日出家遊ばされて比叡山の天台座主となりたまふた。之は一體何故かといふに比叡山は當時僧兵の力強大にして且、日吉山王の威力をもつて、北條氏の力の入らぬ特別な治外法權的な師團であつたからである。この特別な師團長が護良親王であらせられた。

次に文保二年二月二十六日と云へば建武中興より十五年前のことであり、而してこの日はかしくも後醍醐天皇御踐祚の日であつた。こゝに於て考察を要することは後醍醐天皇が何故に踐祚の吉日に第一皇子を以て出家として天台座主に任じたまふたかといふことである。即ち天皇の御倒幕御計畫は御踐祚の日に始つたことを物語るものであり實に天皇が深慮遠謀終止一貫打倒幕府の御志を抱きたまひしことを知ると共に、今一つは如何に護良親王を御信任御重要視されたまひしかを物語るものであると思ふ。かくて天皇は大塔宮と同様尊氏の野

心を看破せられてゐたればこそ敬遠策をとりまひ、好機をみて尊氏倒伐を御胸深く秘めさせられたことゝ拜察するのである。たゞ當時尊氏の謀叛が表面に現はれてはゐなかつたしその非常に強大なる勢力は一度仕損ずれば恐るべき結果を招來する懼れがあつたので先づ大塔宮の御責任として、尊氏討伐の御計畫を進められたのであつた。然るに結果は尊氏の勢力豫想以上に強く、その計畫も頓挫して却つて尊氏からねぢ込まれて止むなく大塔宮が一切の責任を負ふて一時を收拾したまふたのであつた。宮を弑し奉つたのは、それは足利の暴虐であつて、もとより天皇の知りたまふ所ではなかつた。天皇は宮の御失脚を只一時の事と御考へ遊ばされ、そのうちには必ず救ひ出さんと御期待遊ばされたに相違ない。かくて天皇が尊氏の讒奏をそのまゝ信じたまふて鎌倉に送りたまひしといふ俗説はこの意味に於て教師用中巻一四八頁に「護親良親王は早くもその野心を看破したまひ、正成、義貞、長年らと謀りて天皇の論旨を請ひてこれを除かんとしたまひしに、かへつて尊氏の讒奏にあひ親王はその犠牲となり、鎌倉に下り云々」なる構文をそのまゝ兒童に投げかけるのである。

## 第一節 足利氏の僭上の章の難點と究明

### 一、本章の難點

本章に難點が二つあり、一は後龜山天皇の御還幸であり一は義滿の僭上である。

(1)、後龜山天皇の京都還幸は世に之を南北朝の合一といふ。京都の恢復は後醍醐天皇の御遺志ではあるが、その御遺詔の中に「——もし朕が命にそむき、義を輕んぜば君も繼體の君にあらず——云々」の語がある。然るに外面的にながめると後龜山天皇は京都御還幸後所謂北朝の後小松天皇に譲り給ひしは如何に、尙考慮すべきは元來を言へば北朝と雖も皇胤である。この問題を如何に説くか。

(2)、足利義滿の行爲についての取扱である。義滿の如き皇室に不敬の行をしたものは國民思想上からは反逆的人物である。國民教育上之を如何に取扱つたらよいか。

### 二、難點の究明

#### 一、後龜山天皇の御還幸

(1)、後龜山天皇の崇高なる御精神

はじめ王政恢復を企て、遂にならず、恨を抱いて南山に崩じ給ふた後醍醐天皇の御遺詔を拜することにする。

「朕が身はたとひ吉野山の宮に埋もるとも朕が魂は常に京都の天を望むべし、もし朕が命にそむき、義を輕んぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」

恐多いことながらあまりに悲壯なる御遺詔である。後龜山天皇の還幸の史實を照應する時「もし朕が命にそむき、義を輕んぜば君も繼體の君にあらず」と云ふ一句が強く吾々の胸をうつ。

そこで問題はかゝる御遺詔を排しても斷然還幸を決行せられたのは、天皇の御胸中深く期せらるゝところが、おはせしものと解されるのである。故にひるがへつてその頃の時代の動

きを眺めることにする。

後醍醐天皇が笠置行幸以來、六十一年に近い日子は短しとはしない。而してそは世をあげての間断ない戦の展開であつた。故に人民の疲弊、困苦はあまりにも痛々しいものであつた。而も天皇の御代は後醍醐天皇の御時に比し更に甚だしきものがあつたであらう。こゝに於てか民の苦を自己の苦としたまふ。我が皇道の一貫せる精神を繼承され殊の外仁慈の御徳高き後龜山天皇には恐れ多いことながら、御心中二元の御苦しみを抱かれて御なやみ遊ばされた事と拜察する。即ちあくまで御遺詔を奉じ先皇の意志をついで王政復古のために戦ふべきか、或は凡てを捨て、天下を静謐に歸し疲弊の極に達せる人民を救ふべきかにあつたであらう。

然るに天皇は前者を捨て、後者をえらばせたまふた。その御精神はこの後應永九年に吉田兼宜が日本紀進論に参候したる時御述懐ありし上皇（後龜山天皇）の御詞でも察せられる。

元弘建武以來世上之變轉、先皇遺詔、明德御合體御入洛之次第以下、具被<sub>レ</sub>仰下<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>干羅縷<sub>一</sub>所詮<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>聖運之泰否<sub>一</sub>者偏任<sub>二</sub>天道神慮<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>休<sub>二</sub>民間之憂<sub>一</sub>之條、爲<sub>二</sub>御本意<sub>一</sub>之趣被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>

下之叡慮之奥旨直被勅言、面目之至也（吉田日記）

とあつて國民の憂を休めため凡てを超越せられて還幸遊ばされた事を知るのである。限りなき國民愛、その前には凡てを捨て、神のみむねに復歸せられし御聖愛たゞ崇高の極であるこの點教科書にも「かねく、長い間の戦亂で萬民が苦しんでゐることをふびんに思つて」とあるところよく味ふべきである。

## (2) 皇位繼承に關する名分論

次に所謂南北の合一は名分上より如何に解さるべきかといふ問題である。世やゝもすればこの事を以つて、正統なる南朝が閏位なる北朝に皇位を譲りたるものなりと解すれども、こは甚だしき謬見ではなからうか。南北朝なる語がすでにあやまつて居る。何となれば兩朝廷が對立してゐたのではなく朝廷はたゞ吉野にありしのみであることは、唯しも神器の所在より考ふれば肯定し得らるゝところ、更に六十年に近き吉野朝廷時代の紛亂の根本義は南北兩朝の皇位爭奪とは考ふるを得ない。こは全く王政を恢復せんとする公家方と武家政治を永續せんとする武家方の抗爭であつて、兩皇統相互は全然對立するものでなく、又全然争闘には

關與するところではない。而して武家方は自己の目的を達せんがため皇室の尊嚴をかりんとし擅にこゝに持明院統を奉戴するに到つたものである。

故に持明院統には何等對立の意志なきのみならず、王政恢復につきても所見を異にせられしとは考へられぬのである。かゝる意味よりすれば南北兩朝と云ふ語は内容なき空疎な語となり、正しき名分論よりは所謂北朝の存在を許されぬものとなる。同時に嚴然たる不可分の皇位のみ存在を見るのである。

ひるがへつて所謂南北合一の事實をみるに之が爲めに武家方を有利に導きしとはいへ、皇位繼承は嚴然として正しきが行はれ皇祖の神勅の御精神に合致し、その間何等の暗影をもみとむる事は出来ぬのである。何となれば私は皇位の不可分を信じ兩朝の分立をみとめず、而して名分上よりは不離一體の皇室のおはしますことのみを信じ、後小松天皇も亦後龜山天皇と同じく不離一體の皇室の御一人にましまし、正しき道をとりにて即位したまへるが故である故に私の言を以てすれば、所謂南北合一は名分上よりみて、正統より正統に皇位はつたへられしものと言ふをはゞからぬものである。

### (3)、南北合一條件

義滿の方から和議を申し上げて之を吉野方にては御許しになつたのであるが、これに就いては多年その状態が不明であつたが、三浦博士の研究によつて近衛家の舊記録の中より講和に關する新史料が發表された(全文は中村直勝氏(南朝の研究)「六五頁を参照」その大要を示せば

- 1、神器は讓位の儀式を以て後小松天皇に授け給ふこと
- 2、爾後兩統の交立であるべきこと
- 3、國衙領は大覺寺統の御料たるべきこと
- 4、長講堂領は持明院統の支配たるべきこと

かくて元中九年十月二十八日天皇は賀名生の御所を出でさせられ、奈良を経て閏十月二日御入洛、先づ嵯峨大覺寺に入らせられた。而して三種神器は五日宮中内侍所に奉安せられ「父子の禮」を以て後小松天皇に御讓位あらせられたのである。こゝに於て五十七年間に亘る問題は解決された。

これに就いて三浦博士の「日本史の研究」中南北合體條件の一節を引用してみやう。

「是等の條件は之を南朝側から言へば其の根本の理想とされつゝあつた。公家一統の政治に遠ざかつてゐることが餘りに大である。併ながら時勢は移り變つてゐる」。——とて南朝の日に日に壓迫されて行く状態を述べ更に「今や殆んど絶望的窮地に陥つてその陥落は時の問題となつたのである。過去に於ても武家側より和議を提出する時は即ち壓迫を加へるときであつたが、是時位徹底的な壓迫なことはなかつた。それ丈南朝もその和議については眞剣に御考慮を要したであらう。——故に南朝は公家統一も將軍の降参も一切みづから放棄されて仕舞つて、五十餘年來奉祀された南朝正統唯一の象徴たる神器の歸座授受をさへ御同意遊ばされ、唯一の條件として、その授受が讓位の儀式に據つて行はるべきことを提議されたに止ることは何たる悲惨なることであらう。

南朝が斯る凋落の時期に際したことを知つて居乍ら此の條件に同意し奉つた上に兩統の迭立、全國々衙領の管轄なる條件を提出した義滿は未だしも公明の態度を失はなかつたものと謂ふべきである。南朝は此合體の成立した結果多年の御主張を撤回されて、兩統迭立の

如き武家の主張に屈服されたことになるが併し、最後の瞬間に於て北朝や公家をして南朝が皇統の正統にましますことを確認せしむるに成功されたものと謂ひ得る。」

と記され更に其の結語の一節に

「近衛家文書の發見は南朝の最後までその傳統的御理想を以て、終始されたことを益々雄辯に物語つてゐる『三種神器可有歸座之上者可爲御讓國之儀式』とは何たる崇高の響であらう。南朝がその微力を以て武家不斷の壓迫に堪へられ乍ら、尙ほ五十七年の運命を維持致されたのも、其の式微の極に瀕せられ乍ら尙ほ傲岸なる義滿に膝を屈して、和を請はしめられたのも其の由來するところがなければならぬ。諸國々衙領の進獻の如きは畢竟義滿が、還幸後の供御についての御執念を休め奉らんとする用意に出でたるものであつて、南朝御提出の條件でなかつたことは明白である。私は今此研究を終るに當つて南朝の此御態度に滿腔の敬意を表すると共に、此機會を以て彼の經濟事情が一切の歴史事業の基調であるとする、マルクスの唯物史觀を盲目的に我國史の諸相に適用し、解釋せんと試みる多くの史學者に反省を促したい。」

とあり。當時の事情がつくされてゐる。我等は日本精神の理想主義に立脚してゐることが、最後の勝利を得たるに對して快哉を思はず叫ぶものである。今日國史教科書にては勿論南北朝といはず皇位は唯一絶對の見地から、吉野に朝廷が一時的にゐらせられたものとするのであるが、此の精神も亦理想主義に立脚したものであつてまさしく日本精神である。

## 二、足利義滿の僭上

彼義滿の皇室に對する不敬の行を國民教育上如何に取扱ふべきかに就いてが問題である。

彼の不敬は「義滿の奢」と「義滿の僭上」の兩節に含まれて居やう、義滿の奢に就いては太政大臣に任せられしこと、花の御所、金閣の三項、僭上には行幸の行列模擬、對明交通の二項に對してある。教科書は可成り詳細にこの間の事情に注意して編纂されて居る。その書き振りを教師はよく玩味し兒童に十分玩味させることだ。

一、義滿の驕僭——彼の驕僭するに至つて由來を考へる必要があらう。

足利氏は種々の事情から鎌倉に幕府を開き得なかつたので京都に開いた。こゝに彼義滿の驕僭に陥らねばならない陥穽があつた。京都は貴族の勢力地であり驕奢墮落の淵である。所

謂武家貴族の出現はこの時であり藤原氏や、平氏と同一軌上を進まねばならなかつたのは自然の理であらう。

義滿が官位の榮達をのぞんでやまなかつたのは、藤原氏や平氏の踏んだ道そのまゝだ。教科書にも「武人にして太政大臣に任せられたことは平清盛云々」とあるを味はすがよい又教科書の「強いて朝廷に請い」とある構文を見のがしてはならぬ。太政大臣は則闕の官で天子の師範となる様な人物で始めて任せらるべきに、自ら勢にまかせて之を強請するにいたつては僭上の沙汰も極に達したものだといふべきである。

次に彼の奢はたゞの奢でない。秀吉等の豪奢と同一視してはならぬ。こゝに國民的に忌憚さるゝところあるにあらずや、即ち義滿の奢の行爲は悪まれ、秀吉の豪奢は却つて好感をもたれて居る。そこに普遍的な或ものが存在してゐる。それは何か。秀吉は朝廷に對し尊ぶべきことを知り民政にも意を用ゐた。それに對して義滿は朝廷の尊嚴を侵して國民の困苦を顧みなかつた。花の御所、金閣の壯麗を知らしむるのみならず、彼が北山第に紫宸殿、公卿の間などを設けて臣下として許すべからざる僭上の行があつたのを見のがしてはならぬ。彼の



行列の御幸の模倣や、彼が妻日野康子を入内せしめて准母とせるが如き言語同義である。兒童をして批判せしめねばならぬ。

同時に考ふべきは當時の國民の思想である。公卿官人も彼の門に伺候してその傾使に甘んじた。教科書にも「朝廷の官吏も皆義滿の勢に恐れて此別荘に来て、その命令をうけるといふ有様であつた」とある。その「朝廷の官吏」の語を見のがしてはならぬ。當時の國民の如何に無自覺であつたか。即ち彼を「公方」と稱した。この無見識をさこそと思ふものであるかゝる意味に於て國民としての責任を痛感せしめねばならぬ。

ロ、明との交通——これは最も重大なる問題である。彼の使聘前後六回、往來頗る頻繁であつた。彼義滿の目的は財政上の苦しみをのがれんとともに貿易しこれによる利益にて、財政の補頭をせんとせるのにあり。明の目的は之を利用して倭寇の鎮壓であつた。初め明よりの國書に義滿を「日本國王源道義」といひ大統領を贈つて來た。其後義滿は使聘ごとに、其信書に必ず「日本國王源道義」と稱し、明の年號を使用した。教科書の一九九頁「明主が義滿を指して日本國王と言つても、義滿は別にはばかる様子もなく、みづからも進んで日本國王と

名乗つて書を送つた。わが國には天皇の外にまた國王があらうか。義滿の行は實にわが國體をかるんじたものといふべきである」の批判は自ら兒童の叫びであらねばならぬ。

然しそれにもまして、義滿が臣を外國に稱した一事は、國交上のこの上なき大失體であつた十分批判せしむべきところである。高等史にも「外交上の失體」として之を説いてゐる。彼のこの失體は、やはり貿易の利益のみを眼中において何物もなかつた結果であつて、王號を得意とする如き單純な彼でないことは明かだ。我等は聖德太子や秀吉の外交と比較させて兒童の意志に強く印象づけねばならぬ。然も一般國民が之に對して正面より攻撃一つ加へなかつたとみるときは如何に國史に理會なく、國體觀念の不明瞭なりしかを痛感するものである。

彼は年五十一才を以て死んだ。田中博士は足利時代史に於て義滿の不法に論及し「要するに彼が薨去は誠に我が皇室の幸福なりき、若し彼をして今一年存在せしめば、必ず金匱無缺の皇統を傷け、我が帝國の歴史を穢せしに相違なかるべし（中略）然るに天我が皇室を助け義滿俄に薨じて義持立つに及び皇室に對する方針一變するに至りしは、實に我が帝國の一大

幸福と言はざるべからず」と述べられてゐる。

この論評にある如く、義持は實に日本精神、自主獨立の愛國性を多分にもつて居た。この史實はこゝに記するを省略するも高史上卷一四〇頁に「然るに義持之を恥ぢて斷然交通をこばみ、明が兵を用ひやうとしたのに對しては元冠の例を引いて、答へ少しも之を恐れなざりし態度を示した」と述べてゐる。尋常史にても之を附加して兒童に、日本精神のあるところを知らしめるがよいと思ふ。

### 三、結 論

要するに本課は反面的教材である。

歴史は本質上廣い人生理會の教育である。されば重大なる事項は善惡共に知らしめて行かねばならぬがしかし訓育方面から見ると善行爲は夫が直接的に模範であり、惡行爲はこれを惡む情を養つて行くのである。その惡行爲を憎む情はやがて善行爲を喜ぶ心情となるのである。しかし其の何れを詳述するかと云ふならば言ふまでもなく善行爲の稱揚にあると言はねばならぬ。本課の如きは後者に屬する方面と見る。

## 第二節 足利氏の衰微の章の難點と究明

### 一、本章の難點

足利義政の取扱

義政は東山文化の功勞者であるが一方にはかゝる戰亂の世に土木を起して、政治を顧みざる將軍であつた。この文化の方面より見た義政、道德の方面より見た義政を如何に取扱つたらよいか。

### 二、難點の究明

教科書の態度

イ、政治家的良心の癱瘓者

「義政は——將軍となつたが少しも政治に心を入れなかつた——人民が困つてゐるのに、義政いつころ憐みの心なく——後花園天皇は大そう御心配になつてこれを戒められた。——いつたん工事をやめさせたがなほたび／＼花見の宴などを開いておごりにふけてゐた。

それ故費用が足らず、人民からたくさん税をとりたてた」

「かういふ大亂の中でも義政はなほ奢をやめないで——銀閣を建て茶の湯などの遊にふけりむだに月日を送つてゐた」

## ロ、人格の破産者

「義政は三十才になると早や政治にゐて来た。けれどもまだ子がなかつたので——この時義政はこの後たとひ子が生れても決して義視を退けるやうなことはしないと堅く約束したのに」かゝる態度に出でし義政の行爲こそ言語同断と云ふべきである。

我等は今之を倫理的に批判せんとする前に「何故彼はかくなりしか」を研究してみる必要はないか。

## 萩野博士日本史講話に

「是は將軍義政の個人としての性情境遇もさることながら、其職の前後から有力なる諸大名が幕府を壓迫することの甚だしい所から、將軍の名によつて下された幕府の命令が朝夕に反覆するの己むを得ざるの勢であつて、名は堂々たる征夷大將軍でもその威令は強大

なる諸大名の前には全く無意義のものであつた。又その御台所なる富子は貧慾にして貨殖を好み將士に金を貸して利を得己れ獨り富を積むを以て樂しみとなす程の、人物義政は内かゝる悍婦に憚り外豪族に制せられて、遣るせなさに遊興逸樂を事とし、數寄風流に耽つた是は京都公方がか一杯になし得た慰安であらう」と、又栗田元次氏は綜合日本史概説に於て「彼が幕府の窮迫せる際に於て猶かく驕奢豪遊に耽つたのでは、天下の事日に非にして諸將は彼の命を奉ぜずして天下の大亂を惹起し夫人富子及び日野勝之等は專横を極めて、彼の威令少しも行はれないため政務に倦き既に、文明五年に將軍職を義尙に讓つて豪遊を事とした。然るに其後富子の專横は益々甚だしく——これが彼が一切政治上の責務を抛棄し自己の趣味を恣にすると共に、足利氏の最盛時であつた義滿の時代を回顧し、その遺風を模して僅かに心を慰めて居た所以であつた」

と説かれてゐる。義政を一個の人間として見るとき義政も幾許かの言分はあらう。そして同情すべき點もあるに相違ない。然し彼は將軍であつた。その將軍として政治上の責任者として眺むる時はかゝる事情を汲む必要は更がない。勿論私は當時の時勢を彼一人の所爲として

責める程冷たい眼を以てみやうとはせない。

私は彼が豪奢の所産たる東山文化の價值とその後世に及ぼせる影響に就いては、滿腔の敬意を表する一人である。然し彼の政治家としての良心は不幸にして麻痺して居た。彼の人格の何處かには大きな缺陷があつた。彼は基礎の動搖し續いた——而も下剋上の思想によつて素亂、頽廢亂脈の世だつた——室町將軍家をつぐべき材ではなかつた。時勢はもつと偉大な人物の出現を待望したのであつた。

彼としても今少し目覺めて居たらあれまでに時局は紛糾しなかつたであらうに、彼の政治家的良心の麻痺から上天皇に「御心をいたたまひ」の恐れ多き所爲をなし、下國民をして「いよ／＼苦しんだ」としたのである。彼の人格破産から應仁の大亂は捲き起され、國民は極度の疲弊を來したのではなからうか。私は應仁の亂の結果の我が國情をみるにつけ義政のあまりに無責任なる所爲を惡むと共に、尊氏にもかゝる責任があることを痛感するものである。

かくて彼は應仁の亂の間、己獨り晏閑として奢侈に耽つてゐたのであつた。其處に一點の

假借すべき餘地をも不幸にして私は見出し得ない。

特に尋五の兒童に向つて説くときかゝる態度にて望むものである。あまりに義政の「かくなりし」プロセスを重視し同情するとき國民教化としての、國史の教育的價值を没却してしまふからである。

而してどこまでも彼の行爲は國家的に許されぬことを、深く兒童の惱裡に銘し以つて動きつゝある、彼等の英雄崇拜心を正しい方向に進展せしめんとするものである。勿論善人にも缺點あり、悪人にも美點を有するものであることを考察して、史上の偉人も亦人間であつたことを説き彼等の向上心をそそる一助として、義政の行爲も一面に於て効果のあつたことも述べたい。彼の文化史上に於ける地位の大體を知らすことも決して無駄ではないと信ずる。但しこれは尋常五年に於ては極めて軽くせぬば彼等の頭腦を混亂せしめる惧がある。

尙序ながら應仁の亂の取扱は亂後の社會の變轉を説くことが大切である。如何に社會が變轉し推移して行つたか、そこに國民の物質的精神的兩面に立つ動きが讀まれる。教師はよろしく具體化してこのところを扱はねばならぬ。従來の國史があまりに一局部のみの狹域をね

らつてのみゐたことを痛感し當にあるべき、將來の國史の眼界はもつとく廣められねばならぬと思ふ。

### 第一三節 織田信長の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

##### 織田信長と光秀との關係

織田信長が四方を定めん爲め羽柴秀吉を中國地方に遣はしてその應援のため京都本能寺に宿つた。此の時先發の光秀のために遂に命を失つた。此の信長と光秀との關係に就いては様々な説があるが之を如何に取扱つたらよいか。

#### 二、難點の究明

古來光秀と信長の關係に就いて色々批判もされ種々の説がある。私は之を二人の性格の差からくる衝突と、加ふるに「戰國特有の時代氣風」からくるものと思ふ。そこで勢兩人の性格とその關係より進めて行かねばならぬ。

#### (1) 信長の性格

辻善之助博士は「織田信長の側面觀」と題して (一) 信長の膽力 (二) 信長の機敏 (三) 信長の殘忍刻薄なること (四) 信長の民心收攬 (五) 信長の平和統一の精神に就いて述べられ最後に「……之を綜合してみると信長には精悍なところがあつた、然しながら其の缺點としては、どつしりしたところがない、ゆつたりしたところがない、大きく包んで行くところがない。おほやうなる點が乏しかつた。總べてを力で行かうといふのである。これを秀吉の行蹟に比してみるにやはり信長は荆棘を切り開くのであつたのである。先驅となるのが其の天職であつたので、秀吉の爲めの露拂ひが彼の仕事であつたのである。彼がよし天正十年に光秀に弑せられずして、命を全うして彼の抱負を十分に遂げしめ天下統一の業をなさしめたとするも彼は果してよくその統一を維持してその業を全くし得たであらうか否やは疑問であつたであらう」と述べられてゐる。實に信長のプロフィールを、平易に分りよく述べられたと思ふ。實際彼の幼少の時を見ても放縱不羈常に異形の服裝をなし傍若無人の素行があつたことは史實が物語る。故に「大呆氣者」として指彈された。然し一面朝暮武藝の鍛鍊に至つて

は彼をして別人の如き名手たらしめてゐる。政秀の諫死もやはり之等のことが主因であつた。その後大に悔ひ改めたところは彼の一生を支配した大きな力であつたが、しかし性格の峻烈で幾分粗暴味を有してゐたことは確實で叡山の焼打、伊勢長島の一向一揆に對する鑿殺或は部下に對しても僅かの罪をも寛恕することが出來ず、折檻、追放、殺戮を敢えてした事は部下人心をして不安ならしめ、國家統一の大業半にして破れし所以である。

## (2)、光秀の性格

光秀は中々智勇兼備の良將であつた。爲めに信長に用ゐられた。然し當時戰國時代の武人としては珍らしい謹言家で、又自己の容體を飾る男だつたらしい。天正十年五月家康を安土に待遇せんと準備せし時などは喜び勇んで命を拜し、大宴場を定めて客館となし、湖畔に帳り人を京に遣して珍器を購ひ、供具甚だ盛んにして善美をかね盡せりと云ふ。かく一面風流な點或は身を飾る點を信長の粗暴な、口わるい性格とを相對比する時、所謂性格の相違からくる感情上の衝突、延いては軍事上、政治上の衝突を見るや明かである。更に一步を進めて彼光秀は他面狹量偏狹にして主人信長への不平をうけ入れるだけの餘裕はなかつた。この點

秀吉は流石に豪腹であつたことは種々物語りとなるところであらう。信長の近臣森蘭丸が信長に告げて「光秀飯を食ひながら深く考ふる體にて箸を取り落しやゝ有りて驚きたり、是程思ひ入りたるは大事をたくらむならん。今の程に刺殺し申すべし」と云ひしこと及び深く考へに沈み、粽を皮ながら食ひて人に怪まれたることもあつたと云ふ。これ等は皆彼の狹量を思ひ起す物語である。此點到底戰國時代の武將としての器ではなかつた。

## (3)、信長と光秀との關係

かく兩者の性格の相違からか、信長の粗暴なる言動は殊に烈しく、光秀に向つて注がれた觀がある。普通光秀が信長を恨んだ事柄としてあげられて居ることは

- 1、酒宴の席上に於ける信長のちやうちやく
- 2、命を用ゐずとて折檻したこと
- 3、光秀の領地坂本城附近は蘭丸の父森三左衛門の舊領地であつた、蘭丸の希望を聞いて「よし三年まで」と云ひしにより光秀心に恐を懷く
- 4、丹波八上城に波多野秀治を攻めた事件から光秀の母を人質にした。この波多野を信長

が安土にて磔にしたために光秀の母は八上の殘黨に磔にされた。

これ等の事實はどこまでが本當かわからぬが、放縱自恣、直情徑行、人を人とも思はぬ信長としてはやりさうなことである。しかし唯光秀一人のみがそんな目にあつたのではない。多くの者が皆同様なのである。併し光秀にはそれがぐい／＼こたへてゐたのであらう。信長とても三千石から二十五萬石の大名にとりたてたので、柴田勝家なども光秀の出世の早いに少しく、えせましく思つてゐた位だ。だからもし光秀が今少し大膽であり、而も眞の良臣であつたら夫れ位のことには辛抱したであらうと思ふ。しかしながら光秀に最後の決心を與へたものは「安土の饗應」だと云はれてゐる。それについても色々問題があるが、結局これは「平素から心中悶々の情にたへぬ光秀をして魔をさゝしめたものは安土の饗應だ」と云ふことにして説いて行く。そして成可くこの安土の饗應の話を具體的に語り、その物語の中に兩者の性格や互にその間にまつはる因果を讀ませるやうにしてゐる。信長記にはこの事情が詳しく出てゐる参考とすべきであらうが今は省略する。とに角、信長は光秀の態度が氣に入らなかつた爲め役目を取り上げすぐ出陣を命じたのである。光秀も腹立まぎれに料理の品々を器具

諸共安土の城壕へ投げ込んで去つたと云ふ。さりながら此時既に反逆の心を抱いたと云ふのではなかつた。五月十七日に安土を出立居城坂本に入り、五月廿六日に坂本より丹波の龜山（今の龜岡）へ赴いた。此の間は彼の煩悶時期であつたのである。翌二十七日愛宕山へ參籠した、この參籠が彼の胸中の難悶を決する極所であつたらしい。彼は愛宕山で二度も三度も鬨を取つたといふから、この鬨が決心の動機となつたものであらう。決心を鬨で固めたか、鬨で決心を定めたかは分らぬが、兎に角愛宕山は從軍と反逆の分水嶺であつた。其二十八日西坊で連歌を催した時光秀は「ときは今あめが下知る五月哉」とやつた。ときは土岐に通ず光秀は土岐の一族である既に野心が見える。もう此の時は決心がついてゐた時であつた。かくて光秀は廿八日に龜山城へ歸つた。信長は廿九日安土を出立京都本能寺に宿泊した。信長の手兵二三十人と何等防禦の無き本能寺に宿することは彼が安土を去つてから知り得たことで、之が決心誘發の動機であらう。かくて光秀の本心を打ちあげたのは普通出陣以前の如く言はれてゐるが、山田義直氏の説によれば、六月朔日午後四時頃出陣の命を出し、午後六時頃になつて幹部五人にその心狀を打ちあげたと言ふことだ。總勢一萬三千「我敵は本能寺に

あり」と押しかけたのであつた。

さるにても僅か四十九才を一期として「人間五十年化轉の中をくらぶれば夢幻の如く也」と桶狭間に出陣した勇將信長は彼の人生觀其の儘の最期をとげた。

史實はこれだけであるが、かく考ふるとき信長と光秀との衝突は免れ得ないところであつた。然し單なる兩者の不和を以てその事件を批判し決定するには未だ不充分である。故に私は、當時に於ける時代相をも考へ度い。

(5)、戰國時代の氣風

到るところに戰亂が続いたのみならず、君臣、父子、兄弟、一族間に於ても權力の爭奪が行はれた。且つ殆んど君臣の争は臣、父子の確執は子、兄弟の争は弟、本家との衝突は支家の勝利に歸し、舊勢力は姿を滅して實力ある新人が勝を制し來つたのである。即ち下剋上の時代であつた。社會の解體は極度に達し因習打破の革新的風潮の盛んな時代で、來るべき新社會の基礎をなすものであり、近世日本を生み出すべき産みのなやみであつた。故に道徳上或は思想上等あらゆる方面に於て混頓として歸する處を知らぬ有様であつた。「時代が英雄

を生むか英雄が時代を造るか」と言ふ如く、この場合は「時代が事件を生むのか人間が事件を生み出すか」それについての相互關係を考へずにはおれない。言ふまでもなく時代思潮に照してこそその時代の事件や人物の正確さが現れ且つそのもの自身を尙一層生かす所以であらうと思ふ。

(6)、結 論

以上述べ來れる如く、信長の粗暴峻烈で部下に對しても僅かの罪を寛恕することが出來ず追放、折檻、殺戮等を敢てせしは部下人心を安んぜしめず、且つ光秀の如き狹量小膽の士に非ずともかくの如き侮辱を甘んずることが出來やうか。かく平等的に個人關係として考へる時、人間として自然の陥るべき過程であり、殊に武將としての面目上仕方がないとも思へる尙前述の如く下剋上の時代思潮の上に成長し、且つその餘風をうけた當時を考へる時、環境の支配を尙一層叛逆の道へと引つて行つた様に思へる。人間のまことに弱いところであることを考慮の中へ入れねばならぬ。

併し吾々は正しい鏡の上にうつして見る時、光秀の叛逆行爲を是認することは全然出來な



い。當時の支配階級としてあくまで武士道をふみ行くべきは武將としての心掛である。何處までも主従の恩義を重んじ、節義を守つて、主主たらずとも臣臣たるの考へがなくてはならぬ。信長とても鬼ではなかつた、併も二十五萬石の大名にとりたてたところも考へてみねばならぬ。

我々は光秀と信長の性格や、本能寺の亂を授くるのではない。かゝる史實に流るゝ意味の把握によりてそこに、國民としての教育陶冶の價値をさぐるのである。我民族的精神換言すれば武士道の精華こそ、我々が國史上に求める一大目標ではなからうか。

今私は参考までに、徳富氏の「近世日本國民史」の一節をかゝげて、今一度兩者の關係を再吟味してみやう。

「人間は實に不可解の動物である。今日の事を以て明日の事を卜する能はぬ。我を以て他を知る事も能はぬ、否な我自ら我が何事をなすやを豫知することも能はぬ、此の不可解な動物の寄合世帯に意外の出來事の突發するのも決して意外ではあるまい。そは申すまでも

なく明智光秀の謀反である。明察な信長でさへも氣付なかつたことであれば、誰しも氣づいたものはあるまい。否光秀彼自身さへも彼が安土を去る迄は其の決心はついてゐなかつたであらう。

全く然り、古來光秀反逆の理由について色々の説あり、此の野心は種々實例をあげて早くより萌せしものと説くが、こは恐らく結果から見えて原因、動機を拵へあげたもので、光秀自身として信長を怨んで居たことはあつたにしろ其の反逆の念が凝固的に一貫的に連続してゐて、之が本能寺の宿泊を機會に斷行したものはなからう。唯日頃からそりがあはなかつたそれが安土の饗應から俄に高潮し、守兵なき本能寺の宿泊を知つてここに光秀が活路を求めんとする出來心が起つたのである。私はさきに「魔がさした光秀」と云つた。全くこの場合の心理は恐らく光秀自身も不可解であつたらう。

蘇峰先生の文に次のやうなことがある。

「彼も信長には知己の感がないでもなかつた、尾羽打ちからした瘦浪人を取立て、大國の主となしたる大度胸は戰國の諸傑を見出しても信長ならでは出來ぬ業だ。但だ信長と光秀

とは何處やらそりの合はぬ所があつた。云はゞ光秀は勿體屋であつた。驕飾屋であつた。何事も腹へ腹へと持込む流儀であつた。

信長は直截屋であつた、前提よりも結論からやり出す流儀であつた。信長の怒罵、嬉笑を平氣の平左で行雲流れに附して去る秀吉とは違ひ光秀にはそれが一々意味ある様に解せられた。乃ち此れが十數年溜りに溜つて光秀と信長との間に一個の障壁が出来たのだ。加ふるに安土に於ける不首尾に就いては胸中の不平、懊惱やるせなかつた。乃ち斯る場合に於て光秀は忽ち一條の活路を求めた。それは別儀ではない、本能寺の討入である。此れは思掛なく信長が光秀に與へた好機會であつた。」

輕妙才筆、面白い譬喩、先生一流の麗筆はよくうがつてゐる。

尙直接兒童に話すとしてよき材料は北垣氏の國史美談中卷一一二―一一三頁の所説であるが今私は限られたるこの小冊子の上では省略することにする。

#### 第一四節 豊臣秀吉の章の難點と究明

##### 一、本章の難點

豊臣秀吉の朝鮮征伐について

秀吉は其の身貧賤より起つて遂に人臣の榮を極めたが、最後の朝鮮征伐は失敗にこそあれ確かに大事業であつた。かくの如き他に比類なき大事業を小學國史教育上之を如何に取扱つたらよいか。或者は曰く、かくの如きを教へるは徒らに軍國主義的教養をするものであるとこの點如何に扱ふべきか。

##### 二、難點の究明

(1)、外征の原因考察

A、時代相 極めて簡単に列擧する

一、當代は人物本位所謂實力本位の時代であつて、匹夫下賤名もなきものが一躍政治上の實權を握る大勢力家たり得る下剋上の世であつた

二、當時の國民は元氣到るところに充滿横溢して少しも屈託する所がなく、外國との交通の如き非常に盛な時代であつた。

かうした時代に絶世の風雲児秀吉は四海を蕩平し、百戦錬磨の甲兵を擁して金銀の財貨充實、軍用金は足る。誰か秀吉にあらずと雖も此の時勇心勃々心中を往來せぬであらうか。謂んや盛んに慈母胎中にある時日輪懷中に入るの瑞夢を得て生れたと説き、自己が先天的に宇内統一太陽の世界遍照と同一徹なりと信じ、之を實行して行く秀吉に於てをや。朝鮮征伐の如きその對外的雄圖の片鱗のあらはれであると云ふても憚りない。今かゝる時代背景に於て外征の原因を探究しやう、

## 外征の原因

- 一、我國の海外進取の思想である。即ち戦國時代の餘風を承けて尙武の念に富み、勇敢なる倭寇に倣ふ念が強く、殊に西洋人の來航に伴つて強き世界觀を有してゐた。
- 二、當時の豪放なる國民思想が更に偉大なる秀吉を推戴したといふことである。大明國併合の雄志に燃えてゐた秀吉は國民に漲る意氣を巧に外に轉向せしめたのである。もとよりこの事は信長の頃僧天荊を朝鮮に遣はして貿易復舊の計畫があつたといふから、其の事業は信長の遺志を繼いでゐたものであらうが、その志の大なる事は世に傳へら

れたるが如く、信長中國征伐の際秀吉を勵まして征伐の功成つたら中國悉くを以て汝を賞すると言つたのに對して、秀吉は「中國の如きは之を他の將士に與へよ、臣は更に進んで九州を平げ朝鮮を破り明を併呑せん」と言つたと云ふ。之れは傳説としても當時の國民の意氣を考へ、秀吉の性格偉業を考へるときこの物語に内在する意味はまさしく秀吉その人の心であり、之れによつて秀吉の秀吉たる個性を理解し得るではな

いか。

三、朝鮮が我が要求を拒絶したこと、即ち秀吉が使を朝鮮に遣はして征明の嚮導たらしめんとした時、朝鮮王は其の前我に遣はした使者のうち秀吉には必ず征明の舉ありと言つた正使の言葉よりも副使の言葉を信じて、到底秀吉はかゝる大壯圖をなす人間ではないと言つてゐた。かゝる考へから秀吉の要求に應じなかつたことになる。若し朝鮮が何等かの返事をしてゐたならば、歴史は如何轉回したかは分らぬ。しかし秀吉の朝鮮征伐は實に大事件であつて一方には弘安役の復讐とも考へられてゐたのである。

## (2)、外征の批判

近來この事に關して色々の説をなす者があつて、嘗ては國際聯盟といふことさへ唱へられてゐるのに、此の秀吉の朝鮮征伐などといふことは不都合であるから、小學國史より抹殺するがよいとさへ説く人があつた。併しそれは全く國史そのものゝ本質を知らぬものである。事件でも人物でも、その時代の趨勢によつて色々と變化する觀方がされる。(山田義直氏國史教材の觀方)

△徳川の鎖國思想時代——貝原益軒の五兵の説あり、これは儒教主義の方から——即ち義兵、應兵、驕兵、忿兵、貧兵の説を述べ、秀吉の外征は義兵に非ず、應兵に非ず、驕兵と忿兵と貧兵とを兼ねたが故にその結果が失敗に終り、その無謀の擧なることを説いてゐる。

△外艦の渡來の時代——外國の地位から自國の國史を省み、海外發展を謳歌する聲も起つてくる。文化文政の頃の國學者上田秋成は「天の下拂ひ清めて四方の海外さへ照らす豊臣の神」とその雄圖をたゞへてゐる。

△又日清日露の戦争の時は此の秀吉の偉業が大いに賞讃され、秀吉の時さへ負けなかつたのに何ぞ負けるものかといふ自信を國民に與へ盛んに是が鼓吹され、又今次の滿洲上海事件

によつて一層この精神が強調された。

ここに今一つ考ふべきは、我が國の天皇の外征との比較である。神功皇后の三韓征伐と云ひ、近くは日清、日露、日獨、滿洲上海事件と云ひ何れも王者の戦ひで已むに已まれぬ義兵であり或は應兵であつた。

しかし覇者の戦争には往々其の勢に乗じて兵を動かすことがある。殊に國際關係が今日の如く發達してゐなかつた時代に於ては全く自國中心主義であつて、自國以外に領土を増すことが自國を愛する道であると考へてゐるから、彼の元の忽必烈が我が國に攻めて來た如く、我國から秀吉が朝鮮を攻めたのである。若し秀吉をして今日あらしめたら、決してかゝることとはしない。必ず文化的發展、産業的發展の道に向つてゐたであらう。

教育的國史に於けるこの外征は——亞細亞の東の小國から斯の如き英雄の出たと云ふことは吾等の誇りではないか。支那に成吉思汗、忽必烈あり、西歐にアレキサンダーあり、シーザー、ナポレオンがある。

若し我國に何等大きな意圖を有つた人がないとしたら、我國の將來の上から考へても、甚

だ心細い次第であるが幸にも秀吉と云ふ偉人があつて、世界を一呑しやうといふ意氣を有つてゐたことは國民的誇りとして教育の上から言つて歡ぶべきことであり、立派なことではなからうか。而も彼秀吉は皇室中心主義であり、決して皇室を蔑にしてゐないといふ行を見る時益々その人物が子供に好まれる所以も分る。私は何等心配なく當時の時代の背景を物語りつゝこの千古の英雄の事業を子供に傳へ度いと思ふのである。

### (3) 外征の功罪

前後七ヶ年の外征は貴重な人命と、多大な軍費をこそ失へ結局龍頭蛇尾殆んど何等の特權効果なしと云はるゝも吾等は教育的な觀照をせねばならぬ。之を今物質的と精神的の二面より考察するとき、むしろ精神的効果の大なるを痛感するものであり、同時に取扱上留意すべきであらう。

1、物質的に——朝鮮より連れ歸れる多數の捕虜のうち、工藝—殊に陶業の技能あるものあり、これによつて朝鮮式の陶業が創められた。宛然朝鮮の窯業が全部其儘日本に移された感あり、肥前の有田焼、薩摩の薩摩焼、長門の萩焼等中國、九州の窯業が諸所に興つたのもこの時だ。又印刷術も傳はつた。

### 2、精神的に——

A、明をして我が國威の嚴たることを知らしめ得た。

B、國民は國家的觀念の痛切な自覺を興へた。碧蹄館の戰、蔚山籠城、泗川の戰によつて日本精神が發揚されてゐる。この戰を説く時我等は今次の上海事件に見る軍國美談を附加して、而も桶狹間の戰や小田原攻めと同一視してはならぬ。

萩野博士はその高著「日本史講話」に於て

「外征の効果と時代精神」と題して

「——九州中國の諸所に窯業が興つたといふ一事は多少注意すべき事柄ではあるが、外征の目的に副ふた結果としては何の見るべきものもなかつた。併しこの龍頭蛇尾に終つた外征も、決して時代の趨勢に戻つて行はれるのではなく、秀吉は國民に横溢せる發展的精神を代表して一大外征を企てたのであるから、文祿慶長の戰役が不結果に終つたからとて時代の精神には何等の影響もなく、寧ろ十數萬の我が將士は鷄林八道を蹂躪し明軍をも輒く

打ち破つて、その腕前をためし其の眼界を擴めた効果はあつたと云つてもよからう。然らば此の意氣が此の後如何なる方面に發動し、此の精神が秀吉に代つて天下の政權を握つた家康によりて如何に代表せられるであらうかといふ事は二三章を隔て後に述べる機會があるであらう。』

と述べられ、更に後章(五十五章)に至つて

「——既に述べた如く秀吉と家康とは偉人としての特長が違ひ任務が異つてゐた。秀吉の任務は征服と攻略にあつたけれども家康のは平和と秩序にあつた。されば當時の國民の進取的氣象が此の二偉人を通じて國家の政略に上つた點に於ても亦異ならざるを得ぬ。秀吉に於ては大規模なる外征計畫となつて表はれたが、家康に於ては大規模なる通商政策となつて表はれた。是が即ち江戸初期の舞台に於て家康の働いた役割であつた。」

かく考ふるとき、我等は單に朝鮮役の史的意味を、物質的のみに眺めず精神的方面よりも考察することによつてその役の後代に及ぼせる影響こそ教育國史として力説すべきであると信ずるものである。

## 第五節 徳川家康の章の難點と究明

### 一、本章の難點

徳川家康は十五代三百年の泰平の基を開いた人であるけれどもその人物は誰にも感心されぬやう傳へられてゐる。これは果して正當な批判であらうか、彼の偉業を思ひ功績を思ふ時如何に之を傳へたならばよいであらうか。

### 二、難點の究明

兒童の好める人物は秀吉と清正で嫌いな人物は三成と家康とである。關ヶ原役は嫌な人間同志の戦であつたから徳川方が勝つたとてさまで兒童は不快な感をもたないのであるが、大阪陣に至つては家康の老獪なる手段を話す時、兒童は恐ろしく家康を嫌ふに至る。これは何れの所でも同じであらうと思ふ。其の老獪なる點は老獪なりとして扱ふことは差支へないとしても、この當時の自家主義の思想中に起つた出來事を現代の倫理的な批判でやつてのけることは第二、第三の問題であらう。むしろこの嫌惡の情は傳統的でありいまだ家康の一生を

學ばぬ初めから兒童は嫌悪して居て家康の話が出ると、「狸爺」とのゝしつてゐる。このころの指導の態度としては、家康の全輪廓を描きつゝ、大阪陣の一事を以て家康の全價値を没却せないやうに導いて行くことが大切である。大阪陣は家康の事業中の一片だこの一片を以て家康の一代を評するは餘りに殘酷である。家康の長所は兒童の生活に觸れざる所にあるから、目を大きくして世の中を眺めるより導き度いものである。所謂史眼の養成と云ふことはかゝる所に於て成されねばならぬ。

(1)、秀吉と家康

試みに尋ねてみやう、秀吉は天下を如何にして誰から讓をうけたか？織田氏はだまつて、秀吉に屈服したか？又その末路は、之に對してはつきりと答をなし得る者は果して幾人居るか。勿論教科書をひろげても殆んど言及してゐない。(信雄と秀吉のことが僅か一行足らず出てゐるのみ)

然るに家康と豊臣氏の關係は如何？即ち關ヶ原の戰に秀吉薨後の家康の權勢を説き、家康と秀頼との關係の條には行先短かき家康の大阪に對する心事を描き、方廣寺の鐘銘事件には

可成り兒童をして慷慨せしめ、大阪冬夏の兩陣を述べて家康の老獪なる手段をとく、總堀埋立の事から「秀頼母子は自殺して豊臣氏は全くほろびてしまった」と結んで居る兩者を比較するときは寧ろ秀吉の手腕に驚嘆するに反して隱險なりと呼ばれる家康の手段の露骨にして凡庸なるを感じるではないか。我等は不幸にして家康の短所を餘り多く知りすぎて居る。かるが故に先入見としても家康に好感をもち得ない。併し之は決して教育的でないことを知らねばならぬ。

(2)、大阪陣における家康の内面的考察

徳富蘇峰氏の大阪役の序文をかりて所見を述べよう。

「家康の一生は殆んど流れ行く雲の自然法を憑據した。誰だ大阪役に至りては徹上徹下不自然に始り不自然に申し、不自然に終つた。大佛鐘銘を開戦の理由とする不自然だ。冬陣の講和に廓を毀ち濠を埋むる不自然だ、夏陣の終りに秀頼、淀君を殺すは勿論、秀頼の八才になる幼兒迄百方探索の上之を殺すに至つては不自然と云ふも誰が之を不可とせむ。然も是れ只だ大阪役中に於ける著明なる事實に就いて云ふのみ。仔細に立ち入りて研究すれば、一として不自然ならざるものはない。之を譬へれば從來禁酒家として世に立つた者が一夕の宴

會にて泥酔して宛ら大酒家の評判を取つたが如し、平生品行方正を以て聞えた者が一夜魔界に墮ちて直ちに蕩兒の觀を他に做さしめたるが如く、家康一生一代を通じての化の皮が大阪役に至りて全く剥げさりたるは如何にも笑止千萬の事ではあるまいか。

惟ふに取りたく無いものは齡だ。若し家康が今二十年若かつたならば斯る拙劣なる芝居を打たなかつたであらう。然も彼は追々と老人となつた。既に七十才の坂を踰れば如何なる强健なる者と雖も自ら老人たるを覺らざるを得ぬ、彼は餘命の幾許も無きを知つた、而して其の死後の事を豫じめ慮るを禁じ得なかつた。姑らく彼の實見したる所を以てするも、今川義元死後の今川家は如何、武田信玄後の武田家如何、而て最近には豊臣秀吉死後の豊臣家は如何、彼は家康死後の徳川氏に想到する毎に此儘にて死すとも死に切れぬ苦痛と不安とを感じたに相違あるまい。

然も此の苦痛と不安との對象物は大阪だ。大阪が存在する限り家康は此の世に於ける煩惱を斷つこと能はぬ。されば其の生前に一切之を處分せねばならぬ。此に於てか從來時間を味方としたる家康が大阪役に於ては時間を敵として其の仕事を做すべく餘儀なくせられた。

即ち前には時が自然に發展せしむるに一任し、己れは知らぬ顔して其の收穫者となつたが今は其の機熟すと熟せざるとを問はず、遮二無二之れが收穫を爲さんと焦燥した。されば事實を云へば滅された大阪よりも滅した家康の方が心中の苦悶は甚だしかつたに相違あるまい。何れも不幸には相違ないが、時としては殺さるゝ者より殺す者が不幸であることがある。家康の大阪役に於ける、正しく其の適例だ。家康が自らかく迄覺り得たるか否かは姑らく疑問とする。』

實に名言名句誰もが如何にもとうなづくであらう。併し家康も關ヶ原役後直ちに大阪を根こそぎにしゃうなどとは考へてゐなかつたものであらう。豊臣氏も亦信雄が秀吉に對する態度の如く時勢をさとつて敢えて反抗の意がなかつたらば、或は家康も江戸時代に於ける喜連川公方の如く、或程度まで尊敬をはらつて之を臣従せしめたのであらうが、大阪陣の堅牢の自負と淀君の名門意識としてはそれは出来ない事であつた。遂に家康も徹底的にやらうといふ慘酷心になつていつたものであらうと思ふ。若し大阪方が秀吉の意志を繼承してゐたもりならば、細々として命脈がつながるよりも一陣の悲風となつてくれた方が之にあたるであ



らう。

### (3) 大阪滅亡に對する考察

これは實力競争の世の中では如何とも致し難いことであつた。唯秀吉の偉業が大なる丈けそれ丈け反對にいたましく思はれる。しかし目を大きくして見れば之を日本の國全體としてながめれば皇室に關係したことなく、所謂番頭の交替である。實力のある徳川氏が天下をとつたのは日本の爲めにもよく思はれる。天下は一人の天下に非ず、天下の天下なりと見て行かねばならぬ。併し乍ら家康を嘆美する人の少いのは人間の人情といふものであらう。しばし述べた如く家康も最初からかゝるペテン仕掛をもつて豊臣氏を滅ぼさんとは思つて居なかつたのが、段々と年をとつたところから徳川百年の計を考へて最後の手段が出たのである。この一事件が家康の全生涯をつらぬく性格ではない。これをよく兒童の頭に入れておくことである。秀吉の生前は律義者であるといふ評判をとつてゐたのであつたが、この一幕のためすつかり古狸の如く今迄のことは全く假面にすぎないかの如く思はれてしまつた。しかし夫は決してさうではなかつた。家康の年齢と、時勢の進展と、而して戰國時代傳統の自家

主義がよつて集つてしたものであることに注意せねばならぬ。

### (4) 教授上の注意

ここに重大な意義をもつものは批判の問題である。

不完全な人間、否實在の人間に絶對的善人、絶對的惡人といふものゝない事を先づ念頭に置いて一人物の善惡兩方面を眺めその善を禮讚し、その惡を憎むる寛大な心を以てなすつ、善惡共に我が教訓なることを悟らしめるにある。而してこれをなさしめるに當り自己の感情好惡を以て人物の賢愚正邪善惡を誤まらざる様常に注意しなければならぬことを銘記させるにある。即ち私は先づ批判の態度をこしらへておくことである、而しこれはさて家康を説く時にあたつてなさるべきものでなく、平素から培つておくことが肝要な問題である。一體に兒童の批判なるものは往々にして感情的であつて理性的でない。所謂悲憤慷慨的であつて、その惡むこと甚だしく、且つ又弱者といへば無條件で同情し勝ちなものである。かくの如き批判及びその態度をそのまま放置してよいものだらうか。そこに教育の必要があり指導の大切な所があるのであるまいか。

さて家康のとつた處置に對する批判である。

私は事件の經過を教師の史眼によつて教育化しつゝ説いた後、色々と兒童に感想を語らせる。この場合あまり教師の主觀を強要してはならぬ。

「家康の豊臣氏に對してとつた處置は何人と雖も憎むであらう。吾々としても同様であるだが然しそのことからして好き嫌ひは別とする。家康の善い所を認めないといふ事は感心出来ない。——何故君等は好き嫌ひにだけこだはつて居て、それよりも家康の長所を認める氣にならないのか。——批判するものは何處までも冷靜で而も滿腔の同情ある人でなければならぬ。」

かゝる意味に於て兒童の偏見、興奮を適度に訂正して行く所に意義深い國史教育が成り立つものであると信じて居る。

故東京高師の山田藤直氏の説をかゝげる。

「教科書の終りには家康の晩年についての一節があり、賞揚的言葉が用ひてある。若し此の一節を大阪陣の終りに於て取扱つたならば夫は必ず失敗に終る、何となれば兒童は大阪

陣に對して豊臣氏に滿腔の同情を寄せ一〇〇パーセントに家康を嫌つてゐる。此の時に家康全體の性格をまとめて行かうとする事は、却つて兒童の反感を起させるやうなものである。されば大阪陣の所で其のまゝ切つて更に時間をへだて、家康全體の事項を復習しつゝ取扱ふことだ。さすれば大阪陣も家康事業の一節として之を見て評價するに至るであらう。さうして此の際信長、秀吉、家康三人の業績を比較し、此の三英雄の力によつて日本が統一せられ、平定せられたことを知らしめるがよい。信長は峻烈火の如き人だ、焼きつくさずんばおかない性格だ。秀吉は洋々たる大水の押しよせるが如き人だ、あらゆるものを併呑せすばやまざる概がある。家康に至つては着實堅牢、石を以てたゞんで行くが如き人である。信長は峻烈、秀吉は雄大、家康は着實だ。戰國亂雜の世の中を荒こなしするは信長に由らずんば能はず、其の餘を悉く風靡し餘類を併呑する度量は秀吉の雄大豪放によらずば能はず、大なせになぜられた後を再び亂れることなく築造構成せしめるは家康の忍耐、綿密、着實なる實力によらずば出来ないのである。この三人がこの順序に出て來たことは天下平定に誠に都合がよかつた。しかし又時勢は順次にかうした人物を要したので

あるから、かゝる性格の人が順次に成功したとも考へられる。」

——流石は老大家、着實穩健な取扱に敬服するものである。更にこゝに徳富先生の史論を介して結論としよう。

「信長が餅をつき、秀吉が丸め、家康が食ふ。これが世間に有りふれたる諷刺畫だ。(中略)併しこれは家康に取つては全く冤罪だ。如何に御用學者のひいきの引倒しの結果は其の反動を挑發して此に至らしめたとは云へ、公正の史家は決して家康を以て僥倖漢とは認めぬ。否家康の天下は家康の自力で取つたのだ。決して他より貰ひうけたのではなく、譲りうけたのではなく、又盗んだのでもない。仕事の順序から云へば信長は搗き、秀吉は丸め、家康は餅を喰つたに相違ない。併し家康の時は喰ふ計りではなかつた。彼は餅を搗く爲めに信長とも協力した。彼は餅を丸むる爲めに秀吉とも協力した。彼は決して据膳を喰つたのではない。彼の協力、微せば信長の天下布武の事業も斯様には參らなかつたであらう。信長の手の西に向つて伸びたのは家康が東にあつて武田氏の防禦の天任に當つたからだ。若し家康が膝を屈せず北條やら佐々やら其の他否秀吉黨を糾合し西なる島津氏と相策

應して旗をあげるに於ては、秀吉の天下統一の事業も縦令全く沮廢せざるも、中途にして頓挫したに相違あるまい。天下の統一者は秀吉だ、然も天下を統一せしめたものは家康の力だ、家康は信長に向つても因より其の割前を要請する権利がある。秀吉に向つては因より獅子の割前を要求しても必ずしも過當ではない。世間では信長をば「啼かぬなら殺してしまへ子規」と云ひ、秀吉をば「啼かぬなら啼かして見せよう子規」と云ひ、家康をば「啼かぬなら啼くまで待たう子規」と云つてゐる。此れは何れも三人の性格をよく穿つたものとして賞美せられてゐる。併し信長は決して殺して仕舞へ子規と云ふ如き短慮の漢ではなかつた。彼は疾風耳を掩はざる底の活動家であつたが、然も其の辛抱や忍耐も亦一通りではなかつた。彼は恒に勝易きに勝つに勤めた。若し形勢非なりと認むるときには直ちに退藏して其の時機の來るを待つた。彼は殺して仕舞へではなく啼く迄待つことを否まなかつた。彼の仕事は何時も全局の打算から割り出された。彼は決して局部の勝敗に没頭しなかつた。されば殺して仕舞への一句は明かに信長の半面若くは四半面に過ぎなかつた。秀吉の啼かして見せようは全く其の通りだ。秀吉の字引には殆んど不可能の字がなかつた。彼

の前には如何なる難題も刃を迎へて解けた。他人の四苦八苦する難場も彼には容易に通過せられた。

併しその晩年朝鮮役以後に於ては彼は全く其の神通力を失ひ、事毎時勢の爲めに制せられた彼が子規を啼かせて見せようも、彼自ら啼いて他の憐みを求むるに至つた。家康の啼くまで待たうも、其の晩年は全く相反した。彼は自ら待ち得ずして却つて子規の羽を絞る其の咽喉を掩して啼かしめんとした。此に至つて彼の本領も、殆んど滅却せられたと云はねばならぬ。』云々

古來名高き歌詞などに一度評價されたことばがあれば、金科玉條の如く思惟して人物も事蹟も其の評價されたる歌詞の意味に解して進まうとする傾向がある。徳富氏の史眼と才筆を参考して行くことが大切であらう。

### 第六節 徳川家光の章の難點と究明

#### 一、本章の難點

家光の鎖國はキリスト教の絶滅となつて幕府の目的は達し得たが、外國との關係は全く衰へ國民は爲めに外國の事情にうとく世界の進歩におくれるに至つた。これは一國としても大問題であり尙又

切支丹禁絶の取扱も今日切支丹宗が信教の自由を認められ、盛に信仰せられて居る點から考へても餘程取扱に注意を要すると思ふ。之等の難點を如何に取扱ふべきか。

#### 二、難點の究明

##### 一、切支丹宗の傳播力が偉大なりし理由

この取扱によつて現今のキリスト教に對して悪感を抱かしめぬやうに扱はねばならぬ。キリスト教が短日月の間に驚くべき勢を以て傳播した主因は何か？

イ、宣教師が何れも人格者であり而も非常なる努力と偉大なる識見をもつてゐた。

ロ、我國民が其の當時戰國のあとをうけて氣宇廣大にして排他的精神の少かつたこと。